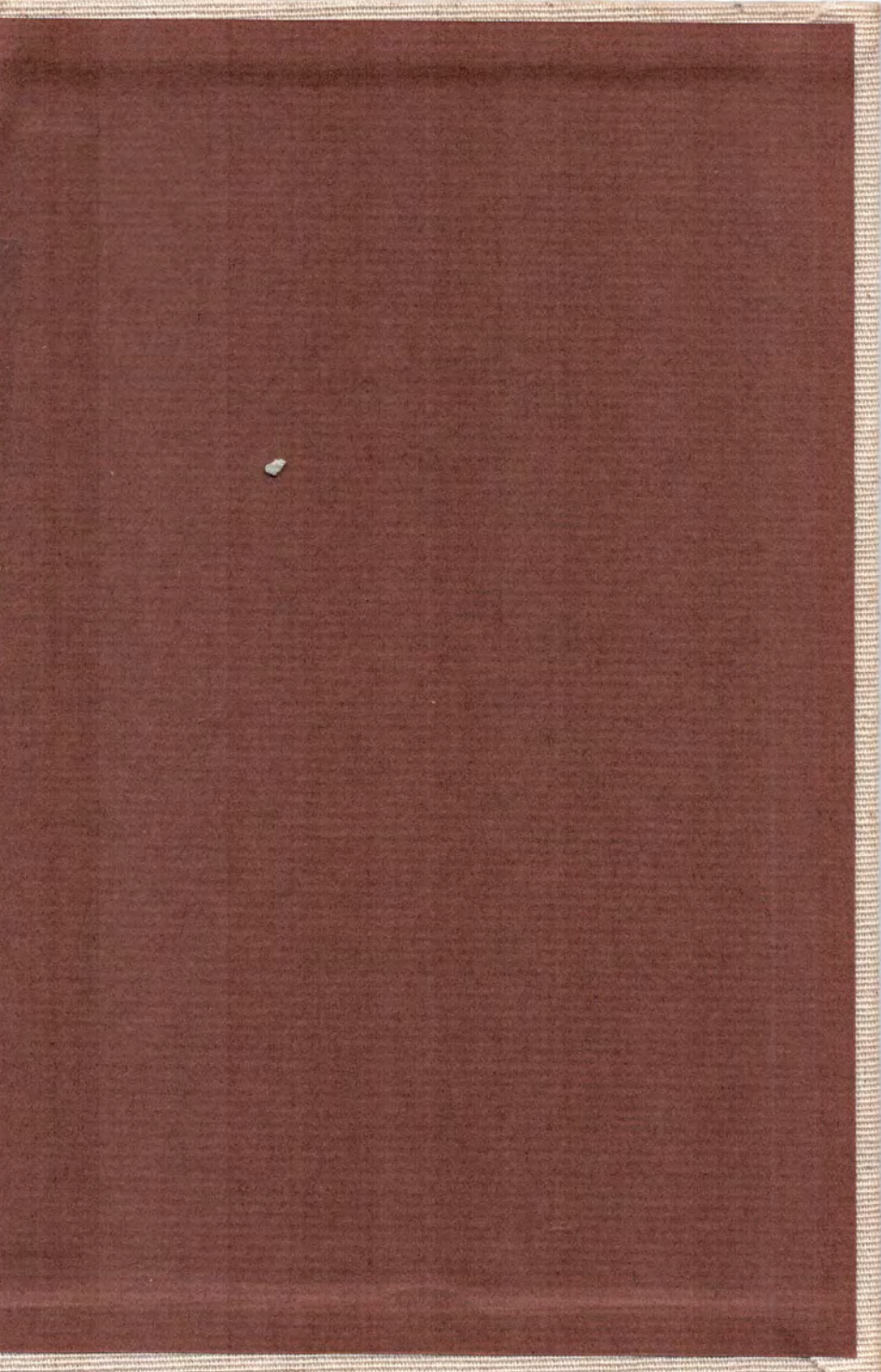


追憶

中林賢二郎

追悼文集刊行委員会編



追憶

中林賢二郎

追悼文集刊行委員会編







上=後列(父と母), 前列(左・賢二郎, 哲太郎)
下=兄・哲太郎と





△旧制中学時代



八高時代



新婚時代（奥沢にて、1949年1月ごろ）





1961年（奥沢から新居の小平の庭にて）



1959年



賢一

上—一九七九年十二月一日、第一回全法政教職員
硬式庭球大会優勝カップをもって(左—賢一)



下=1975年8月
(立川テニスクラブにて)





愛犬・ゴローと



愛猫・ミー子



テムズ川のほとりで



1980年ロンドンにて



1985年



右と下=1985年，蓼科山荘にて





孫と一緒に（一九八六年九月、自宅にて）



中林家一同

一九八一年四月（ロンドンより帰国して）



1985年10月11日、蓼科高原、横谷溪谷にて

目
次

目次

敗戦日誌 中林賢二郎 1

弔辞

法政大学総長 青木 宗也 19

法政大学社会学部長 高橋 彦博 21

友人代表 黒川 俊雄 27

卒業生代表 波多野 章 29

中林ゼミ一同 塚田 成幸 33

業績をしのぶ

中林賢二郎さんの業績をしのぶ 戸木田嘉久 39

国際社会労働運動史研究について 手島繁一 / 五十嵐 仁 43

労働組合論研究について 木下 武男 47

追悼・中林さん

中林賢二郎君を悼む	高橋 正蔵	57
テニスの中林	寺沢 恒信	60
わが友ありて	田中 信	63
賢ちゃんとの五十年の交友	川田 祐之	66
急に消えてしまった友	村瀬 泰敏	68
夜の立ち話	三國 一郎	72
追憶——中林賢二郎のこと	栗野 鳳	75
春の海は泡立っているか——追憶のなかの中林兄	北村 忠夫	81
中林君の生きた時代	上杉 捨彦	86
政治経済研究所で	上杉 緑	90
中林賢二郎さんの人柄	舟橋 尚道	92
忘れえぬ思い出	岡倉古志郎	94

細く、長い、おつきあい——中林さんを偲ぶ……………	小林 勇	97
中林さんの思い出……………	松尾 洋	100
若き日の中林先生の思い出……………	若林章雄／若林しげの	103
未来にかぎりなく確信をもった人……………	門田 陽一	106
中林賢二郎さんを悼む……………	塩田庄兵衛	108
革命的ロマンチスト……………	増島 宏	114
中林賢二郎さんのこと……………	二村 一夫	117
中林先生と大原社研……………	是枝 洋	123
『日本労働年鑑』と中林さん……………	早川征一郎	125
一回だけほめられた労働者から……………	西村なおき	129
同志は斃れぬ……………	佐藤 一晴	132
「中林教室」をつくりたかった……………	栗山 嘉明	137
中賢さん——すがすがしい民主主義者……………	柳沢 明朗	140
組合活動家との議論を好んだ中林先生……………	芹沢 寿良	142

中林氏との討論	犬丸 義一	146
告別のことば——墓前での朗読にかえて	ゆかわやすお	148
同僚としての中林さん	土生 長穂	151
研究テーマに反映した豊かな人間性	嶺 学	154
中林先生のこと——人柄と業績	相田 利雄	157
厳しさと優しさと	富沢 賢治	158
中林君との奇遇	矢嶋悦太郎	161
第三通信	高橋 彦博	165
ある夏の日の中林先生	久松 妙子	168
友情	堀江 鈴子	171
中林さんのこと	高木 督夫	174
ご遺志をうけついで前進を	辻岡 靖仁	177
中林賢二郎さんの思い出	北田 寛二	180
中林さんとの出会い	竹内 真一	183

大阪の労働者教育と中林賢二郎先生……………	吉井 清文	186
プロフィールの「社会保険について の決議」をめぐる……………	坂寄 俊雄	189
本を読んで埋めます……………	鈴木 ふみ	191
早かった死……………	渡辺 菊雄	194
真の教育者中林先生……………	田崎 信子	196
中林先生の思い出……………	黒部 清明	199
中林賢二郎先生を偲んで……………	岸田 修	202
中林先生の思い出……………	俵 博子	205
大学院での中林ゼミ……………	佐々木太郎	208
ひとこと……………	鳥居 俊夫	212
弟・賢二郎のこと……………	中林哲太郎	214
思い出の記……………	松本 清	217

父の思い出	中林賢一	222
思い出すままに	中林倭子	225
「中林賢二郎先生を偲ぶ会」の記録		246
あとがき	田沼肇	250
付——中林賢二郎先生の年譜と業績目録		

題字 中林八重子

敗戰日誌

中林賢二郎

中林先生自筆の『敗戦日誌』は、先生の逝去後、ご自宅の書斎から発見されたものである。現物は、ヨコ一六・九cm、タテ二一・〇cmのノートに、粗末な厚紙トリボンで表紙がつけられている。

この日誌は、太平洋戦争末期の一九四五年四月一日から、敗戦直後の同年八月三〇日ころまで、とびとびの日付で誌されている。最後の日付を、「八月三〇日ころ」というのは、日誌に明記されているのが八月三〇日までで、それとはべつに、ノート一ページ分だけ、日付なしに日誌がつけられているからである。本書には、その部分は収録されていない。

中林先生が『敗戦日誌』を誌されるようになったのは、先生が一九四四年九月に大学を卒業し、一〇月、東亜研究所に勤務しはじめてから、ほぼ半年たった時期、しだいに激しくなる空襲のさなかであった。中林先生は、敗戦の予感と、「新しい日本への期待」をこめて、メンをとられている。

『敗戦日誌』をこの追悼文集の巻頭に収録するにあたって、中林先生のご遺志にそうよう万全の努力をしながら、全体の約三分の一を割愛し、その省略箇所は、(…………)で明らかにした。また、かなづかいには、すべて新かなづかいに改めたが、句読点、送りがな、漢字のつかいかたなどは、できるだけ原文に従った。なお、原文は、ところどころタテ書きもあるが、全体としてはヨコ書きで、年号も西暦をつかっている。(田沼肇記)

一九四五年四月一日

われわれは、この戦局の中で、毎日恐ろしいことを考えている。この戦局の中で、われわれは、もはや現在抗戦しつつある日本を信じていないのだ。もちろん、勝つことを欲してはいる。然し、勝てぬと信じているのだ。そして、何等かの形——抗戦以外の——でこの危機を脱出する方法を考えるか、あるいは、敗戦の後に立上るべき新しい日本への期待を語りつつあるのだ。これは確かに恐ろしいことだ。

併し、この抗戦日本を信じないにも拘らず、この抗戦勢力にひきづられて、何等、新しい一步を踏み出そうとしていないということに比べれば、この恐ろしさも、実は大したことではないのだ。この意味でわれわれは、抗戦勢力を信じない事からも、それと同じ病疾に災され厄されていると言えるであろう。この思想の怠惰、この思考と実行との分離こそ一番恐ろしいものなのである。

新しい日本が、敗北の灰の中から立ち上るということを考える。この灰の中から、この封建勢力、軍部勢力の崩壊の後から、新しい生命力が湧き出ない様なら、もう日本は見捨てられる外ない。(……)

然し、この封建勢力の最中で育てられ、*militarism* に育てられた、現代の少年達は、果して

新しい日本の担当者たり得るであろうか、との疑問は生ずるであろう。新しい日本とは、もっと科学的な頭脳に支えられねばならぬのだ。が、この疑問は、この不安は、捨てられてよい。少年はもっと信じられてよいのだ。例え彼等が、*militarism* に育てられ、一時的に予科練として立つとも、彼等は心の隅の何処かで、そこに含まれた不純さを見抜いているのだ。もちろん、彼等はこれを意識し、これを発展することは出来ぬであろうが、この不純さを感じ取った彼等の心は、彼等の無意識下に、漸次育って行き、何時かは花と咲くのだ。彼等は何時の日にか、突然、その時の気持を思い出すだろう。大人達が寄ってたかつて彼等に予科練志願を強要した日のかすかな心の動揺を。(……)

日本人は、殆んど狂信的に、*marxism* を排している。一つの政策が *marxism* の刻印を押されることによって、直ちに廃せられるのだ。(……)

この戦争を敗けても、守り抜こうとする思想がおまえにあるか。敗戦の後に、これこそ日本を救うものだと、命を賭けても差し出せる思想があるか。少くとも、かかる思想を見出そうとの覚悟を以て、おまえは努力しつつあるか。

この問は、現在戦線を離れて生きる、すべての思想家に提出されている問題である。俺がこれ

から見逃されるわけではないのだ。逃げ腰の思想家は、敗戦さえも信じ得ないし、信ずる資格はないであろう。かかる自信と覚悟とがない限り、おまえはこの戦争で死なねばならぬ。死なねば、既に戦死した同朋に相済まぬ。

(……)

四月六日、ソウイエットは、対日中立條約の延期をしない旨通告して来た。(……)

日本の敗戦気分はかなり濃厚になって来ている。少なくとも研究所に関する限り、出席者は殆んどなく、常務部長以下、自己の安全のみを計っている。研究所が空爆下の東京に止るだけの理山は全然ない。この不合理さが研究員に与える影響はきわめて大きいのだが、そこに敗戦気分から来る秩序無視が加わって、この出席率となっているのだろう。

(……)

戦の初められた時、既にインテリは勝利を信じていなかった。にもかかわらず、この目でみた、この頭で計量した自己の思想を信ぜず、自己を捨てて戦に向かったのだ。文学者はこれまでのあらゆる思想を捨てて、ひたすら航空戦士、予科練出身の若者の眼の美しさをほめたたえた。これまでのリアリズム、自然主義、それは一体、文学者にとって何であったのか。単なる装飾品

であり、思想ではなかったのだ。現実をこの眼でみて、計量し、そこに出了た数字の絶対さを信じ得ぬ思想は思想ではない。

結局、自我、エゴティズムの貧困こそ、日本敗戦の原因なのだ。そして恐らくこれは、あらゆる面での封建的残存勢力に照応するものであるだろう。

(……)

四月十四日朝、東京二回目の夜間都市爆撃。三月十日以来、初めて。相当の被害があり、朝は例の如く、電車が動かない。そこで、高樹町から六本木までどうやら市電に乗ったが、あとは歩く。乃木坂を降りて赤坂見附に出、そこから三宅坂を登って、九段へ抜け、水道橋へ着く。

(……)

途中、赤坂に出る一寸手前で、古本屋が開いていたので入ってみると Karl Adam の *Essence of Catholicism* を売っていた。五円、安いので直ぐ買う。これだけ大きな空襲の後も、本に対する食欲を失わずにいられることを感謝すると共に、こんな空襲で交通が跡絶えでもしなければ、この道を歩くことなど先ず絶対にならないのだから、神のめぐみとばかりに買いつつた。

この前、三月十日の後二週間ばかりは、本に対する食欲をすっかりなくしてしまったのだが、もう、その様なこともあるまい。又、一方、本の背革を見ていないと発展しない様な思想は捨て

去るがよい。

自己の思想というものが常にその立場に規制され勝ちであるということを見せつけられることはない。地域の危険性如何によって火災保険の率が変化する様に、空襲の危険性如何によって人は思想を異にするのだ。

これをつきぬけることは容易の術ではない。が、強ち不可能だとも思われぬのだが。

(……)

四月十二日に Roosevelt は死んだ。

四月十六日、Berlin 十一里のところまでソ連軍は迫っている。

四月十八日、一昨日頃から、沖繩戦で相当航空母艦を沈めている。四月十五日の夜間空襲で敵の失ったB 29の数は七十機にのぼる。

これだけの損害は、敵にしても相当なものだろう。

今年いっぱいには戦争は終るだろう。

ドイツは今月中に終ると思う。

日本はどうするか。(……)

二十世紀の思想はニヒリズムと生物学の臭がすると Varelly は言ったが、戦争は全く生物学的であり humanism の入るすきはない様に思われる。

バルト神学のニヒタステイッシュな面こそ、現実の姿を注視しての教のものであったのか。Catholic 的 humanism、人間の尊厳は果して維持され得るであろうか。

(……)

四月二十四日

赤軍はいよいよ Berlin に突入したと報ぜられている(二十三日)。Berlin が陥落しても、果してドイツ軍はゲリラ的抗戦を続けるであろうか。

戦争上の利、不利を超えて、ドイツ敗戦は何か安堵に似たものを感じしめる。何とかけりがつく、ということのみを、願っているからだ。(……)

(赤軍の Berlin 突入は二十三日以前である。)

(……)

戦争遂行には、民衆の心理上に一つの限度があるのではないだろうか。(……)

心理的にみて——その心理上にあらゆる経済上・政治上の諸困難が具体化して来るのだが——この戦争は今年一ぱいで終りそうに思えて仕方がない。しかも、食糧事情等からしても、今度で終結せざるを得ないのではないかと思う。(……)

ところで、日本にしてみたところが、何とか食えるのは今年だけのことではあるまいか。その今年も、どうやら怪しいのだが。

(……)

四月三十日

とにかく英米ソ軍は、既にベルリン地区で合流したのであり、事実上、ドイツ軍としてまとまった戦線はないのだ。無条件降伏がなされたとして何の不思議もないわけだ。とにかく、此処まで来た。(……)

(四月二十九日仙川移転完了)

五月六日

五月二日(一日か?) ヒットラーは死んだ。

ムッソリーニは死刑にされ、広場にさらしものにされている。

ゲッベルスは自殺したと言われる。



八高時代

この頃の思想的貧困は蔽うべくもない。

予定

○先ず何はともあれ、グルフを完訳すること。

——家で。

○読みかけたチェスタートンを読み切ること。

——電車の中で。

電車の中で

Church Universal の中世史

ラテン

Piers Plawman

History of ancient Philosophy

家で

ウルフ

聖 Augustinus の精神的発展

◎マリタン、形而上学序説

グラーブマン

結局、プラトン、アリストテレス、アウグスチン、トーマス、

これだけの古典を読むこと。

プラトン、アリストテレスは、哲学史参照しつつ、訳本を読むこと。

五月二十九日

とにかく、何も書かないでいる日ばかりで一昨年 of ノートをひっくりかえしてみても、今よりは美しかったと思う。塩川などが居たのだ。いま、いい友達が居ない。(……)

五月二十三日朝と五月二十五日朝に、夫々、二百五十機米襲、東京は殆んど全滅。驚くなから、桜上水あたりから中野まで、つまり郊外までがやられたのだ。それに今日は、B 29 五百、P 51 百計六百の白昼攻撃だ。

然し、このノートを作って書き始めた時は、これに敗戦日記と名付ける心算でいた。この気持は今はない。このような不健全な気持を今では嫌悪している。それだけにこのノートがかえりみられないわけも充分にあるのだ。

ともあれ、敗戦日記が他の日記に変化してゆくとすれば、それはいいことだ。ただ、何も書けないとすれば、それこそ、事実上の私の敗戦ではないのか！

五月三十一日

とにかく敗れるとなれば、インテリは軍部を攻撃すべきでない。むしろ、最初から勝利を信じていないくせに戦争についていったことに罪がある。もし君が、勝利を信じ得なかったとすれば、死を賭して戦争を阻止すべきであったのだ。

もし君が、今更、勝利を信じていなかったと言うなら、先ず恥じろ。

君の思想は、君の思想の潔癖はどこにあるのか。

(……)

日本の精神の何処に一体、戦争への必然性があったのか。

再出発！ これあるのみだ。

(……)

ロシヤは日本に手を出さない。

恐らく、あと一ケ年、ロシヤは日本に対して何もしないだろう。ロシヤは日米が戦っている限り、見ていればよいのだ。両方が傷つく、そして双方が傷つけば傷つく程、ロシヤの發言権は大きくなる。

支那の中共は勢力を増大しつつある。

よしやアメリカが勝とうとも、日本、支那に対する勢力はロシアの下にある。そして、戦争がもし、ソ米間に起ったとしても、ロシアは絶対有利の地勢にあるのだ。

八月十五日

八月十四日、遂に日本はポツダム宣言を受諾した。

この日、前夜から当日の午前まで引続いて来襲していた敵機は、八時、九時、十時と、次第に東京から離れ始め、十二時には、伊豆列島の南方洋上に退いて行った。

そして、十二時、遂に天皇陛下自ら、この和平条件受諾の詔書を放送されたのだ。

空は晴れていた。人々は黙々としていた。昭和十六年十二月八日、ちょうどあの開戦の当日の様だった。然し、あの時よりも、何かしら矢張開放感があった。それが人々の間に感ぜられた。事実は解放ではなかったのではあるが。軍部に代って、日本人ではない、多くの外国人の束縛が、われわれの上に落ちて来たのであるが。

八月十七日

一体、今、この俺は何を為すべきか？

思想と文化への欲求に推されて本箱の前に立ってみるのだが、雑然とならべられた本のどれも

手にとりたくもあり、しかも、それは無用のことと思われて来るのだ。

だが、やっと焼け残った木を前にして、俺達がこれから生きてゆく倫理を思うとき、これらの本から一体何が生まれてしようとの反省が、水底から浮び出る泡のように後から後からふき出て来るのに何の不思議はあろう。俺達のこれまでの *Paradise* など、一体、何程のものであったというのか？ わずかに、政府当局者によって指示し残された地域の上で、根のない文化の歌を歌っていたにすぎないのではなかったか。割り切れぬ気持を無理に殻の中へ閉じ込めた、そこから創造的な——そして、創造的でない限り、文化とは言えないのだ——文化と思想との生れて来よう筈はなかったではないか。一度、根本において、かかる虚偽的態度を受容れた以上、われわれはあらゆる思想に犬のように行つた。しかも、真について行くことさえ出来ずに。わずかに気休めと、ため息のような思想とだけが、われわれのものだったのだ。それは、吹けば飛ぶような造花の如き思想だったのだ。何が是であり、何が非であるか率直に認めることを根本において——根本というのは、思想の基盤である根本行為の上での意味だ——捨てている者が、かかるワナに陥るのは当然のことだったのだ。

このことは、最初、軍部のファッショ的行為を本能的に嫌つたにも拘らず、どうやら理屈をこじつけて、遂に大東亜戦争を聖戦として認めるに至つた文学者・思想家・識者の態度にそのまま現れている。しかも、この軍部のイニシアチブを推し止め得なかったインテリゲンチヤは、今や

この敗戦に苦しまねばならぬという、自らのワナを作っていたのだ。

僕は国を愛した。しかも、その国の指導者及び指導原理と実践とに、何かしら相容れぬものを感じとって、いつの間にか関心は根のない文化に向いていた。しかも、大東亜戦争の意義を論ずるにせよ、徒らなる論理主義の誤謬に陥込んでいた。

思想とはもはや根のないものと化していた。いま、この真に非常の事態に直面して、再び、この数年と同じ態度を取ることが出来ないのが当然だ。この雑然と並べられた本を見て、文化的欲求に推されつつも手を拱ねる所以もそこにあるのだ。

われわれは一体、何を為すべきか。上のことからして必然的に結論されるのは、事実にはまず直面せよ、事実に関しての率直な判断をそのまま掘り下げてゆく習慣を取り戻せ、そしてその事実がおまえにさし出す問題から出発せよ、ということなのだ。そして、この「問題」を地盤としてのみ、真の *pensée* が生れるということである。(……)

弔

辭

本学社会学部教授中林賢二郎先生の突然のご逝去に、驚きとともに、悲しみを禁じえませんが、法政大学を代表し、謹んで哀悼の意を表します。

中林先生は、昭和四十年法政大学大原社会問題研究所に入所され、四十六年からは、社会学部教授として、二十年余にわたって本学において教育研究に専念され、数々の優れた業績をあげられました。その間四十九年から五十一年にかけて大学院社会学専攻主任、五十一年から五十三年にかけては社会学部長として、大学運営に尽力されました。また、五十五年から五十六年にかけては、法政大学ロンドン分室長をつとめられ、国際交流の上でも大きな足跡を残されました。先生は、明朗・快活な人柄と、広い学識に裏付けられた豊富な話題で、多くの教職員・学生から親しまれ、敬愛されていきました。先生の笑顔はたいへん魅力的で、いまでも忘れがたいものがあります。

また先生は、スポーツマンとしても知られ、なかでもテニスの腕前には抜きん出たものがありました。ご子息の賢一さんとのペアで、第一回全法政教職員硬式テニス大会で優勝された時は、先生が結核で長期の療養生活を送られたことがあると聞いていただけに、いささか驚きました。

その折先生が、戦前第八高等学校の学生時代に、全日本ジュニアのチャンピオンであったことを知り、さすがに昔とった杵づかであると感じいったことでした。

先生の学問上の業績は、いまさら私から申し上げるまでもありませんが、ヨーロッパ史を専攻され、インターナショナルの歴史について数々の成果を上げながら、同時に現代の日本について強い関心をもたれ、この方面でも数多くの著作を発表されています。その明快な論理と歯切れの良い文章は、読む者を惹きつけ、多くの研究者に強い影響を及ぼしただけでなく、学生や労働者の間に幅広い読者を得ました。

歴史の進歩への確信に満ち、未来への展望を示した先生の著書は、これからも人々を励まし続けると思います。

また先生は、教育者として、また研究の指導者としても、優れた力量の持ち主でした。中林ゼミナールには社会学部の学生だけでなく、他学部や、他大学の出身者が、先生を慕って集まり、何人もの若い研究者が育ちました。研究の指導者・組織者としての先生の才能は、その数多い編著書にはつきりと示されています。

今、法政大学は、多摩校地への移転の途次にあります。こうした時期に先生を失ったことは、私どもにとって極めて大きな損失であり、まことに残念であります。

心から先生のご冥福を祈り、お別れの言葉といたします。

中林先生どうか安らかにお休み下さい。

昭和六十一年一月十七日

法政大学

総長 青木 宗也

*

昨年の秋から暮にかけて悪い風邪が流行っていました。十月頃、中林先生が、「風邪をこじらせ、せきがとまらない」とのこと、教授会を欠席になり、講義も休講措置をとられるとの連絡を受けたとき、私たちは、中林先生も悪い風邪の被害を受けられたのか、と、当初はそれほど心配しませんでした。

しかし、先生の休みをとられる期間が長引くにつれ、実は、私たちは、小さな声ではありましたが、「先生はだいじょうぶだろうか。最近、だいぶ弱々しくなられた感じだし、肺とか胃を病んだ経験をお持ちのことだし、このさい、慎重に検査を受けるなどされた方がよろしいのではなからうか」などと、語り合っていたわけでありました。

だがしかし、ふだんから、とくに健康に人一倍、気を使っておられた先生のことですから、私たちが心配する以上に、ご自身の健康状態の把握を的確になさっておられるにちがいないと考
え、もし、万一、先生のご不調が単なる風邪をこじらせた症状以上の場合でも、いち早く、先生
はそのことに気付かれ、確実な対応策をとられるにちがいないと、私たちは先生のご様子を、少
し遠くから見守らせていただいております。

期末試験とか、入学試験関係の仕事を、私たちがお引き受けし、四月から再び教壇に立って
いただくよう、三月まではゆっくりご静養をいただくのではないかと、とも私たちは考えておりま
した。

暮に入院されたおりも、検査のため、とのことでしたので、私たちは「お見舞いにあがるのは
もう少し控えた方がよいのではないかと」と、心配と不安の入りまじった気分のまま、依然として
先生のご様子を見守らせていただきました。そして、はからずも、先生のご容態が急変し
た一月十日の夜、奥様に電話で連絡申し上げ、試験の採点等にご指示を仰いだ次第でした。

一月十日の夜七時頃と記憶しますが、そのとき、私たちは、奥様からお話を受けたまわり、先
生が「一週間か十日経てば、身体に元気が戻るの採点など自分でできるかもしれない」とおっ
しゃっておられるとのこと、では、それまでお待ちしようと、なによりも、先生の今回のご病
気が、私たちがひそかに心配していたような重いものではないことに安心し、「よかったではな

いか」と語り合ったことでした。

ところが、その電話での奥様とのご連絡を終えた二時間後に、奥様のところへ病院から「容態急変」との連絡があり、私たちもその知らせを知り、奥様に相前後して、夜遅く、昭和大病院に駆けつけたわけでした。

私たちが、先生の病室に入ったとき、先生は、すでに意識の混濁状態に陥っておられました。奥様の必死の呼びかけに、先生が、酸素マスクの中からせき込むように、そして、声をふりしほるように、しかし、確かに、「ハイ、ハイ」と答えられたのが、私たちが先生のお声を聞いた最後になりました。

先生は、肺水腫状態で、呼吸困難に陥りながら、消えかかりつつあるご自分の意識の最後の状態において、外部からの呼びかけに、けんめいに、「ハイ、ハイ」とお答えになりました。先生は、最後の、最後の瞬間まで、奥様をはじめとする自分以外の人びとに対し、外の世界に対し、思いやり深く、しかも真摯に対応されたのであります。

先生の、あの瞬間の、迫りくる苦しさとたたかいたながら、一つ、一つ、呼吸を自分のものとしながら、そのような状況にあって、呻いたり、「苦しい」というような声をもらされることなく、おそらくは朦朧としつつある意識を、けんめいに呼びさましたながら、外からの呼びかけに「ハイ、ハイ」とお答えになったあの精神力、あえていえば知的高潔さに、私は強い衝撃を受けまし

た。

このような表現は不謹慎かもしれませんが、なにか、西洋の名画を見たときのような、たとえばイエス・キリストの受難を描いた名画に接したときのような、人間が最後まで理知的であることとの崇高さに、私は激しく打たれました。

先生よりはるかに若輩の私がこのようなことをいうのは、おもんばかれるわけですが、あえて言わせていただければ、先生は、生涯を通じて、強い意志力、高度な理性、そして高潔な精神の持ち主であられました。戦時下の悲惨な大学生生活を経験され、大学卒業後も、大学の研究職に直ちにつかれたわけではなく、不安定な経済状態と生活状態をつづけられたにもかかわらず、なぜか、先生には潔癖さが一貫し、卑俗の世界を拒否し、俗物的あり方を嫌悪される知的高潔さがただよっておられました。その精神的な高潔さは、誤解をおそれずに言えば、知的な意味におけるアリストクラシーであると言ってみてもいいと思います。

先生の学問上のお仕事は、社会問題、労働問題を西洋史研究者としてとらえる内容になっておりますが、その場合、すなわち、研究活動の場合、先生の知的な意味におけるアリストクラティックなマインドが遺憾なく発揮されていたことはもちろんであります。そして、そればかりではなく、大学の内部の行政的事務の処理に関して、あるいは学生との関係の設定の仕方において、さらには食事を楽しみ酒をたしなむそのマナーにおいて、先生はつねに、卑俗を排する潔癖な姿

勢を一貫させておられました。

先生の、そのような、精神的高潔さ、言いかえれば知的生活を主とする人間としての誠実さ、あるいは本来のインテリゲンツィアとしての理論的精神生活の形成は、おそらくは、先生の育てられた家庭環境から、あるいは旧制高校時代の学生生活を通じてもたらされたものでありましようが、私は、ここで、先生に関する一つのエピソードを紹介させていただきたいと思えます。

私は、あるとき、先生に、「先生の大学における卒業論文のテーマはなんのでしたのですか」とお伺いしたことがあります。その瞬間、先生は、照れたように笑われながら、「トマス・モアのユトーピアニズム」と答えられました。私は、その一言で、先生の知的生活のあり様について説明がなされた感じがしました。

社会思想史を「空想から科学へ」の系譜においてとらえるその問題意識よりも、私は、先生が、ユトーピアニズムという理念の世界の設定を評価する思想方法に関心をもたれたその知的傾向性に注目させていただいた次第です。私がふだんから感じていた先生の知的潔癖さは、サー・トマス・モアの思考構造に由来するものではなかったでしょうか。あるいは殉教者としてのセント・トマス・モアの人間性へのひそかな傾倒に由来するものではなかったでしょうか。

そのような先生が、理想主義を志向する立場をとっておられたにもかかわらず、研究テーマとしては社会問題・労働問題の研究を選択された経過についても、私は、トマス・モアの影響を充



大学時代（右がわ）

分に考えることができると思っています。よく知られているように、トマス・モアのユトープピアニズムは、理想郷の設定に終わる内容につきるのではなく、まずは現実の世界の明確な把握という基底的分析を控えているものでありました。

先生の場合、リアルな現実認識と、それに対置するイデーの設定、そして両者のあいだの緊張関係の追究が一貫していたと思われるのですが、そのような先生の思考方法に、先生が大学の卒業論文のテーマに選ばれた「トマス・モアのユトープピアニズム」の影響が濃厚であったとするのは私の考えすぎでありましょうか。

私たちは、先生が、法政大学の研究者としての、そして教育者としてのあり様を通じて私たちに残された多くの遺産を、これからゆっくりと考えさせていただき、今後の私たちの研究と

教育の活動に活かすことになるでしょう。さらに、私など、先生の一人の人間としてのあり様を、機会あるたびに思い出し、今後の個人生活に活かしていくことになるでしょう。

私は、研究面で、日頃、先生から親しく教えを受けていた一人として、いま、この瞬間、以上のように考えている次第です。

先生、さようなら。これまでの法政大学社会学部に対するご献身、そして私たちに対するこれまでのご厚情に心から感謝いたします。

一九八六年一月一七日

法政大学社会学部教授

社会学部長 高橋 彦博

*

中林さん、あなたは私の尊敬する学問上の先輩でした。そのあなたが突然不帰の客となられたとは、いまだに信じられませぬ。

最近では学会大会や研究会、講座出版のための編集委員会などでしかお目にかかれなくなりましたが、以前はよく故郷江正規先生と三人で労働講座の講師として、いっしょに旅行しながら列車

内で学問上の議論をしたこと、また私がパリ滞在中、阿姆斯特ダムから来られてパリの街を歩きまわりながら、ヨーロッパと日本の違いなどいろいろな話をしたことなどなつかしく想い起されます。そしてまた、御令息が慶応義塾大学を受験され、経済学部合格されたとき、電話でいかに嬉しそうな声で合格したよと言ってこられたときのこと、それから私たち夫婦の結婚式兼出版記念会に御夫妻で出席していただいて、象牙の箸を贈られて感激したことなどいまでもはっきり覚えています。

ところがこの一月九日に大月書店の佐保さんが私の研究室に來られて、新しい出版の打合わせをして、中林さんが昨年暮に入院されたので退院されてからまたと言って別れたのに、その翌々日の午前零時四十八分中林さんは帰らぬ人となりました。

中林さんは外国労働運動史を専攻されながら、いつも日本の問題を意識され、日本のことをもっぱら研究している私など、その数多い著書、論文を読んでいつも刺激され啓発されてきました。こんど『三田学会雑誌』に発表する論文も、中林さんの『現代労働組合組織論』に影響されたものであり、そのゲラを覗いているときに中林さんの訃報に接したのでした。

中林さん、私たち共に労働問題を研究してきた者にとって、あなたはかけがえのない先輩でした。私たちは労働問題の研究を通じてすばらしい日本、そして世界をきずく展望をきりひらいていくために、あなたの遺志を継いで最善の努力をします。

中林さん、安らかに眠って下さいなどという月並みな言葉など言えないほど、私たちにとってあなたの死は大きな衝撃なので、残された私たちが何をするかいつまでも見守っていて下さいと申し上げて、お別れの言葉とします。

一九八六年一月十七日

慶応義塾大学

経済学部教授 黒川 俊雄

*

中林先生、余りにも突然で私達には先生のご逝去が信じられませんでした。

小平のご自宅での通夜の日も冬だというのに暖かく、テニスラケットを抱えた先生が、「やあいらっしゃい」と、今にも庭先から入って来られるような気がして、しだいに菊で飾られていく柩の中の遺骸はまるで別人のような気がしてなりませんでした。

でも日一日と時が経つにつれ、先生が亡くなられたという冷厳な事実是否定しようもなく、私の心はしだいにブラックホールのような空虚^{うつろ}さが広がり、時折り、茫然とし、涙が滲^{しみ}んで来るの

を抑えることが出来ませんでした。

中林先生、想起起せば私が先生に初めてお目にかかったのは、昭和四十四年の秋でした。私は当時経済学部三年生でしたが、社会労働問題の古典を学びたいという思いに駆られ、同級生の飯島信吾君や佐方三千枝さん達と先生の研究室に押しかけ、自主ゼミ開講をお願いしました。当時、先生は社会学部の教授でしたし大変お忙しい方とお聞きしておりましたので、他学部学生主体の私達のお願いに直ちにお応えいただけるとは、正直思っていませんでした。

ところが先生は、私達の予想を見事にくつがえし、「(1)どんなに苦しくとも続けること、(2)君達に熱意が感じられなくなった時は、直ちに止めても良いこと、(3)師弟の関係ではなく共に学び合う姿勢で接すること」という三つの条件だけで、私達のお願いを快諾して下さったのです。この時の皆の喜びようといったら思い出してもゾクゾクします。恐らく、私達はこの時の興奮や感動を生涯忘れることは出来ないでしょう。

こうして、「労働問題研究会」、別名「どうどうめぐり研究会」が誕生したのです。共に学ぶという先生の姿勢のあらわれとして「研究会」という名が生まれ、「労働問題」という語呂にあって、どうどうめぐりしても最後まで頑張ろうという意味から、別名が生まれたのです。この研究会誕生のことはあつという間に学内外に広がり、スタート時のメンバーは、経済、社会、法学、通教、卒業生、早稲田大学の卒業生と学部、大学を超えた、文字通り開かれたもの

となりました。

そして、ともかく社会労働問題の古典を学ぶということが私達の願いでしたから、エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』から学び始めました。しかし多くのメンバーは、形而上的・観念的な思考方法しか身につけていなかった為、誤読が多く、弁証法的社会発展の法則を身につけるのに多くの時間を費やし、『イギリスにおける労働者階級の状態』を読了するのに約一年もかかってしまいました。

また先生は、学問の場では厳しい方でしたから、私達が誤読していると「何故、どうして」と質問を浴びせ、追及して来ました。私も観念主義の塊りみたいなものでしたから、先生の追及に合うことがしばしばで、研究会に出席するのが怖くなったこともありました。

しかし、そうした中でも、私達がともかく六年間にわたって「研究会」を続け、帝国主義時代の労働問題まで到達出来たのは、先生の科学者としての識見の深さと、やさしく幅の広いお人柄によるものと、私達は思っています。

でも、月二回の夜の研究会はしんどくもありませんでしたが、先生、随分と楽しいこともありましたネ。

岩井海岸、奥多摩御岳山、秩父山麓、水上温泉郷、下総一の宮での合宿、松本楼での先生の還暦祝い、神楽坂でのコンパ、先生のご自宅での新年会等々教え上げれば先生との楽しい思い出は

つきません。

また私達は、人生相談、仕事上での悩み等でも先生には随分とご迷惑、お世話をおかけしました。

でも、どんなに忙しくても必ず時間をさいて、先生は私達を迎え入れ、相談にのって下さいました。

研究会をはじめた頃、法政のある先生が「君達は幸せだねエ、中賢さんは学者としても立派だけれども、学生思いの本当に暖かみのある方だから、大切になさいヨ」と仰られたことがあります、十六年間に振り返り、数々の恩顧をさずかり、今、先生を失ってみた時、ある先生が仰られた言葉の重みがひしひしと感じられます。

中林先生、本当のインテリゲンチヤとは先生のような方を指すのだろうと私達は思っています。

そんな先生がもうこの世にいらっしやらないと思う時、私達は本当に口惜しく残念でなりません。もう先生との議論も、楽しい合宿も、ご相談事も出来ないと思うと淋しくなりました。でも、私達は、悲しんではおられません。

中林先生、先生のご恩とご教授をさずかった中林門下生は、先生のご遺志や学問的業績を引きついで、今後を活かし発展させていく所存です。

ですから、中林先生、他界にあっても、今迄通り、私達をお見守り下さい。

最後になりましたが、先生の奥様、ご家族の皆様、ご親族の皆様にご心より哀悼の意を申し上げます。弔辞といたします。

中林先生、安らかにお眠り下さい。

昭和六十一年一月十七日

卒業生代表 波多野 章

*

謹んで、中林先生の御霊前に捧げます。

生者必滅とは申せ、突然の中林先生の訃報は、私たちゼミ生一同にとりまして、無限の悲しみであります。昨年十一月から御病気にかかっておられると聞いておりましたが、私たちはまた元気になられて、再び、先生の御指導を受けられるものと思っていた矢先の訃報であり、私たちにはまだ信じることができません。

私たちゼミ生との御つき合いは短いものでしたが、先生の優しい御指導は、私たちの理解を深

めるとともにまた非常に親しみを感じさせるものでした。

意欲のある人にはたいへん努力してください、また間違った見解をもった人に対しては、優しく、またある時は厳しく御指導してくださいました。

ゼミでの先生は、外国で学ばれたこと、実際の職場におかれている労働者の状態などの具体的な話などをまじえながら、私たちに熱っぽく語ってください、授業が長びいてしまうことも度々でした。

ゼミ合宿では、いつものように学習にも熱をいれられると同時に、私たちと、山登りをされたり、御自慢のテニスをされるなど、私たちはその御元気に、たいへん驚かされたことも、まだ記憶に新しいことです。コンパにおきましても、先生の外国でのエピソード、若き日の話などいろいろと夜遅くまで語られていたこともありました。

思えば先生は、良き恩師であると同時に良き先輩でした。学生の課外活動に対し好感をもっていただいたり、かつ励ましてくださいました。また授業にかかわらず気軽に私たちとお話してくださいました。

いつの日か、裕福な家庭に育ちながらも社会の矛盾に対し、あれだけのヒューマニズムをもったロバート・オーウェンの生き方が好きだと言っておられたのも、懐かしいお話です。ついつい観念的にのみ考えがちな私たちに、理論的かつ生きた学問を御教授してくださいました。

その先生の温情と、正義を愛する御人格は、私たちゼミ生が尊敬させられるものであり、ほこりでもありません。

私たちは、先生の御遺志をうけつぐべく一層勉学に力を注ぐつもりであります。
先生おん安らかに永遠の眠りにおつきください。

一九八六年一月十七日

中林ゼミ一同代表

社会学部社会学科三年 塚田 成幸

業績をしのぶ

中林賢二郎さんの業績をしのぶ

戸木田 嘉久

去る一九八六年一月二一日、敬愛する法政大学社会学部教授中林賢二郎さんが肺癌でなくなられた。行年六五歳である。日本の労働組合運動が重大な岐路にたたさされている時期に、労働運動分野での指導的な理論家をうしない、ほんとうに残念というほかはない。

この戦後四〇年間、中林さんは社会運動史の専門的な研究者として、科学的社会主義の立場を貫き、日本の労働運動をどう前進させるかという実践的な観点から、多くの著作や論文によってあるいはまた直接に労働講座や学習講演会をつうじて、全国の先進的な労働者に大きな影響をおたえてこられた。ことにこの一兩年間は、講座『日本の労働組合運動』（全五巻、一九八四―八五年、大月書店）の編集代表としても指導的役割を果たしてこられた。

この講座『日本の労働組合運動』は、六〇名に近い民主的な研究者を総結集した、この種のものとしては久方ぶりの大型の企画・出版であった。これは、故堀江正規さんの責任編集で講座『労働組合運動の理論』（全七巻、一九六九―七〇年、大月書店）が出版されてから一五年の歳月

を終った時点で、この間の日本労働組合運動を総括し、「再構築」の方向を探ろうと、総力を結集したものである。

幸いこの新しい講座は、昨今の困難な出版事情にもかかわらず、予想をこえる支持をえて大きな成功をおさめることができた。これは、中林さんの円満な統率力とシャープな理論的指導力によるところが大きい。最近の中林さんの業績として、このことをここにまず特筆しておかねばなるまい。

中林さんの研究上の業績は、代表的な著書を中心に見ると、大きくは相互に関連しあつた三つの分野にわけることができよう。

1、第一は、労働運動史にかんする分野である。中林さんには西洋史学を専攻された歴史家として、なによりも『世界労働運動の歴史（上・下）』（一九六五年、労働旬報社）がある。これは最初の著書であるが、「はしがき」では、その基本的な観点がつぎのように表明されている。

「日本の労働運動は、日本の労働者階級の自主的な運動であるとともに、それはまた世界の労働者階級運動の一構成部分である……。……私たちは、日本の運動もまたその一部分である。この世界労働者階級運動の歴史を、全体としてとらえて、その中に流れている一般的な発展法則をつかみとることが大切で、……日本の運動の経験やそこからみちびきだされた運動発展の諸法則も、世界の労働運動全体の歴史とつきあわせることによって、より明確に、しかも

具体的に理解することができるのです」。

この文章では、中林さんの労働運動史論あるいは労働運動論にたいする視角と方法が率直に語られている。ところで、この文章の文体からも明らかのように、この『世界労働運動の歴史（上下）』は活動家むけの啓蒙書であるが、わが国では唯一の本格的な通史として評価されよう。

2、第二は、労働組合運動と統一戦線運動の関連についての歴史的・理論的検討にかかわる分野である。この分野の代表的な著書としては、『労働運動と統一戦線』（一九六九年、労働旬報社）と『統一戦線史序説 一九一四—一九三三年』（一九七六年、大月書店）をあげることができる。

労働運動と統一戦線運動との関連というテーマは、すぐれて今日の課題であると同時に、その経験と教訓について厳密な歴史的検討をふまえることが要求される。中林さんは、私たちの仲間なかでこのテーマをカバーできる唯一の人であったといえよう。

『労働運動と統一戦線』では、統一戦線の中軸となるべき労働者階級の統一を労働組合運動の合法的発展の側面から確認し、統一戦線の理論的諸問題を解明したうえで、統一戦線の発展過程における労働組合運動の役割、さらに政党と労働組合との関係が論ぜられている。これは先進的な活動家むけに諸論文を整理したものだ、今日でも十分に実践的な意義をもつ理論書である。

これにたいして『統一戦線史序説』は、第一次大戦後から一九二三年五月期にいたる、国際社

会主義運動の組織的分化とその統一戦線へのかかわりを論じた、専門的な研究書である。この時期に、それぞれの国の社会主義運動の組織は、共産主義政党と社会民主主義政党に分化し、後者はさらに左・右両派の政党に分化した。中林さんは、今日まで一貫しているこの国際社会主義運動内における三つの潮流と統一戦線へのかかわりを、それぞれの組織の成立と相互の関係の歴史を分析することによって、「典型的」にとらえることを意図されている。今なおこの本は、研究書ではあるが、わが国の今日の政党状況を理論的に説明する強力な武器を提供するものである。

3、第三は、労働組合組織論にかかわる分野で、『労働組合入門』（一九七四年、労働旬報社）『現代労働組合組織論』（一九七九年、同）の著書があり、また『日本の労働組合運動』第五巻では「企業別組合と現代労働組合運動の組織論的課題」を執筆しておられる。

これら著作における中林さんの特徴は、企業別組合脱皮論の限界を指摘、一貫して労働市場の変化にみあった企業横断的な組織化を大胆に提起してきたことであろう。今日、ME「合理化」のもとで派遣・パート労働者の激増がめだち、中林さんの組織論の先駆的意義がますます確定してきているといえよう。

ともあれ、惜しい人を失った。中林さん亡きあとの空白をどう埋め合わせるか。労働問題・労働運動の分野での、民主的研究者のいっそうの結集が望まれる。

国際社会労働運動史研究について

手島 繁一
五十嵐 仁

私たちは、一九七四年に法政大学大学院に入学すると同時に、先生のゼミナールに参加させていただき学問と研究の手ほどきを受けたのですが、その中で先生の人柄や人間性により多くのことを学んだように思います。自他ともに認める不肖の弟子でありますから、先生の学問の足跡や業績をどれだけ追いかけることが出来るか、甚だ心もとないかぎりですが、先生の晩年の十年余りを身近にあつて教え導かれた者の責務を自覚しつつ、本日は先生の広範多岐にわたる研究領域から、とくに国際労働運動史研究と統一戦線研究の二点に関して報告させて頂きます。

言うまでもなく、先生の長年の研究活動の焦点は、常にわが国の労働運動に据えられていたものであり、労働者階級の歴史的使命への終生変わらぬ信念と、その使命に応えるべく運動の現場で奮闘する人びとへの限らない信頼こそ、先生の労働運動史研究を貫く一本の赤い糸でありました。

一九六五年に刊行された『世界労働運動の歴史』は、〈中林運動史〉の代表的作品であり、世界労働運動史のひとつのスタンダードとしての評価を得ていますが、その中で世界労働運動史研究の目的をこのように述べておられます。

「私達は、日本の運動もまたその一部であるこの世界労働者階級運動の歴史を、全体としてとらえ、その中に流れている一般的な発展法則をつかみとることが大切ですし、……日本の運動の経験やそこからみちびきだされた運動発展の諸法則も、世界の労働運動全体の歴史とつきあわせることによって、より明確に、しかも具体的に理解することができるのです」。

先生は、「労働組合は大衆的組織であるとともに階級的組織である」ことを強調されていますが、その立場からするならば、労働運動史は労働組合の歴史に限定されるものではなく、あくまで階級闘争の歴史として把握されるべきものでした。であればこそ、まずもって階級闘争を貫徹する一般的法則を析出し、それとの対比、比較の中から日本の労働運動の問題性を探ろうとしたのだと思います。

そういう意味では、〈中林世界労働運動史〉は、実は〈世界革命運動史〉であったと言えるでしょう。

『世界労働運動の歴史』については、先生と先生の大学院のゼミナリストンとで、一緒に改訂作業を始めようとのプランがあり、先生もとても楽しみにしておられただけに、あまりに突然な

先生の御逝去が悔まれてなりません。

次に、先生の統一戦線研究について触れてみたいと思います。先生が統一戦線研究に着手したのは一九五八年頃でありました。時あたかも六〇年安保闘争の前夜であり、我が国の統一戦線運動が動評闘争から警職法闘争を経て、新たな前進を開始しつつある時期でありました。こうした現実の運動の要請に依えて、世界の労働運動の歴史のなかで初めて統一戦線論を自覚的に追究したコミンテルンの統一戦線論の形成、展開そして挫折の過程を探究するなかから、統一戦線運動にとっての現代的教訓を導きだそうとする目的をもって研究が開始されたのです。一九五八年に発表された「社会民主主義と共産主義」(講座『現代マルクス主義』第三巻、後に『労働運動と統一戦線』に収録)では、こう述べられています。

「その後相対的安定期に共産主義者の政策のうちに社会民主主義者にたいするセクト的誤りがあらわれた。……誤りの内容は、一九二一年以後の政策転換をあともどりさせ、ロシア革命の経験を一般的に適用するという形をとった。すなわち、社会主義革命の戦略段階においては主要打撃を社会民主主義に集中すべきであるというスターリンの戦略テーゼが一般的に正しいものとされ、社会民主主義のブルジョアシーとのつながりの面だけが過大視され、その労働者階級とのつながりの面が無視された」。「現在、共産主義者が社会民主主義者と行動の統一をすすめるにあたって……なによりも警戒しなければならないのは、……一般的に一九二〇年代後

半から一九三〇年代はじめにかけておかしたセクト主義の誤りをくりかえすことであるだろう。

こうした研究は、例えば岡本宏氏などによって、その先駆性を高く評価されています。

「トリアッチ論文が発表される前年に中林賢二郎氏が、コミンテルン結成からスターリン批判にいたるまでの共産主義者の社会民主主義にたいする認識と評価を概観し、コミンテルンが……統一戦線を提起し、この統一戦線を基礎に……政府樹立の方針を構築したにも拘らず、スターリンの社会民主主義主要打撃論の出現で統一戦線が結成されず、ファシズムの勝利を許したことをコミンテルンの側の誤りとして批判的に抽出したことは先駆的研究として評価される」(岡本宏「統一戦線史序説」、『熊本法学』第三二号、一九八二年)。

コミンテルンと統一戦線に関する研究は、その後、統一戦線の一般理論の究明とその今日的意義を追究した『労働運動と統一戦線』(一九六九年)、コミンテルンによる統一戦線戦術の具体的展開を原資料に基づいて論述した『統一戦線史序説』(一九七六年)、コミンテルンと各国の前衛党の結成を「路線の確立と党建設」という視点から再検討した「コミンテルンの結成」(『岩波講座世界歴史』第二五巻、一九七〇年)などの成果として発表されました。

また、この過程で執筆された「デグラスのコミンテルン資料集とその邦訳について」(『歴史学研究』第四〇二号、一九七三年)、「コミンテルン史研究の現況と『歴史の偽造』——立花隆氏への反

論」(『朝日ジャーナル』一九七六年三月一九日号)は、歴史的事実の曲解や恣意的な資料選択、不適切な訳語などを厳しく批判したもので、先生の歴史研究における実証性の水準の高さを示すものでした。私達自身もゼミなどで、報告や論文の事実根拠や論証の曖昧さを突かれて往生したものでしたが、それも今となっては懐かしい思い出です。

私たちが先生に受けた御恩は口では言い尽くせない程大きなものでありますが、先生が切り開かれた研究の道程を、先生の残された課題を背負って歩み続けることで、些かでも御恩に報いたと思います。改めて、先生の御冥福と御遺族の御健勝をお祈り申し上げます。

(法政大学社会学部講師/法政大学大原社会問題研究所研究員)

労働組合論研究について

木下武男

私は、先生のゼミナールで多くのことを教えられたゼミ生の一人です。先生の思い出をまじえながら、労働組合論とくに組織論の分野で先生が提起された問題を、三つの時期に分けて述べたいと思います。私は、大学院にはいると先生のゼミを受けましたが、ゼミではレーニンの労働組

合論を取り上げたのをおぼえています。そのなかで、学生運動上がりのはやる心の私にたいして「もっとも貧しい、もっとも苦しめられている労働者がまず組織化されるのではない」と話されました。浅学の徒を笑うでもなく、ほほに軽く手を置く先生独特のポーズで、イギリスの労働組合運動における組織形態の発展を順々に語られ、それは、興味深いゼミのひとつときでした。

一 一九七〇年から七五年まで

一九七二年、法政大学大学院の研究集会で先生は「労働組合論（主として組織論）の課題」と題し、主に、企業別組合の組織形態について話されました。なかでも、企業別組合の成立を「出稼型」論のように労働力の質や、あるいは労働市場の閉鎖性といった、全体として宿命的な見方を批判され、「運動の伝統」と労働組合の能動性を強調され、新鮮に感じました。そして、職業別労働組合 craft union の伝統が何故、わが国で弱かったのか、中世のギルド組織の弱さやまた日本資本主義発展の特殊性を指摘され、日本についての歴史研究の必要性を強調されました。

そのころは、まだオイル・ショック以前の春闘の高揚期でした。労働組合論の研究も「形態論から機能論」へと全体の流れが変わり、実際の運動も表面的には春闘の華々しい高揚がありました。そして、企業別組合の組織形態があまり問題にされず、このまま運動が発展すれば、なんとかなるという状況にもみえました。しかし、そのなかにおいて、階級的な団結が築きにくい企業

別組合という形態をあくまでも問題にされたのが印象的でした。私も、運動論・組織論の独自の研究分野の重要性を教えられました。

先生は、企業別組合のあり方を批判するとともに、同時に、それを克服する組織や運動を理論化する努力をなさいました。それが、たとえどんなに小さな芽であろうと探しだし、企業別組合克服の方向として評価されました。その姿勢は、その後も全く一貫しているといえます。

具体的には、当時、二つの事例が挙げられます。

一つは、一九七〇年『金属産業労働組合の組織と活動』でまとめられている全金の地域支部の研究です。地域支部とは、企業の枠をこえて組織されている個人加盟の支部で、それまでほとんど実態が明らかにされていませんでした。全金のこの地域支部は、その後、発展しませんでした。が、「同一産業組織内の地域ブロック組織」という先生の主張に引きつがれています。

それは、企業や単産をこえて、交通や金属、医療などの同じ産業の組合員が共同行動を行うという事です。つまり、わが国の産業別組織は、「企業別組織の産業別勢ぞろい」であり、産業の原理と企業の原理で組織されており、企業意識に陥りやすい。企業意識にとらわれない企業の枠をこえた団結の原理を地域にみいだししておられたわけです。

二つは、一九七四年の「イギリス運輸一般労働組合の教訓と一般労働組合の課題」です。これは、七三年に建設一般ができ、その後、運輸一般などが、組織化の一つの方式としてだしてきた

ものです。先生は、この、一つの産業を基盤にしつつも他の産業をも組織対象とする組織の方向に注目し、イギリスの経験を紹介し、どのようにそれを適用すべきかを、労働組合で精力的に話されました。

この「一般組合」に注目した先生は、その後、さらに発展させ、職能的団結を強調することに なります。つまり、一般組合は、イギリスやアメリカでそうであるように、どんな産業のどんな不熟練労働者もなんでも組織するのではなく、一定の産業や一定の職業・職種を基盤にしつつ、 広げていきます。この職能的な団結を、日本の場合には、企業をこえた結果と、未組織労働者の組織化の方向として、先生は重視したのです。これは、今日、土建の組合や音楽家ユニオン、一般労働のなかで、生かされ成功しているところ です。

この時期の二つの方向、つまり企業別組合を克服するための方策としての、「地域」の重視と「一般組合」や「職能的団結」の強調、この枠組みは、変わらず豊かに発展させられるという経過をたどっています。

二 一九七五年から八〇年まで

思えば、先生のこの企業別組合の欠陥を指摘し、その克服のための方策をさぐるという姿勢は、一貫したものでした。だが、主張の仕方は時期によって異なっていました。というよりもそ

の主張は、時とともにますます強くなっていきました。この時期、私は大学院を離れ先生とお会いする機会も少なくなりましたが、先生が一九七八年、雑誌『労働運動』にお書きになった「組織論的視点の再検討と地域共闘問題」という論文を非常に印象深く思いました。

七五年を転換点にして、日本の労働組合運動は大きく変わり舞台は暗転してしまいますが、この時期の先生の書かれたものを見ますと、次のことを先生は、考えておられたようです。

それは、日本の経済が高度成長から不況をへて低成長になり、労働者の雇用も生活も不安定になるにもかかわらず、ヨーロッパとは全く逆に、労働組合運動は停滞し、むしろ、労使協調的潮流が増大しているのは、何故か、ということでした。そして、この時期、先生は今までの労働組合運動の研究の方法について、再検討し、この論文で「自己批判」という言葉さえ使っておられます。文言は「組織論的視点の軽視についての自己批判」ということですが、内容としては、労働組合運動を研究する場合、組織論が弱かったのではないか、ということですが、先生も参加され、また先生が尊敬しておられた堀江正規さんの編集でなつた講座『労働組合運動の理論』の弱点を、自分の反省とともに率直に指摘されておられます。すなわち、「資本蓄積の問題と労働組合運動の発展の関連を、労働者数の増加プラス貧困の蓄積＝運動の発展という図式化する傾向があり、そのために、資本主義発展の段階に應じて組織化のための具体的条件が作りだされる点に十分に注目していなかった」「そのことは理論家だけの問題でなくて、活動家の問題でもあった」と

述べておられます。これは、これから労働組合の再生を願う場合の実践上、研究上の立脚点ではないだろうかと思えます。

三 一九八〇年から八五年まで

八二年、私は、先生と講座『日本の労働組合運動』で編者と執筆者との関係になり、再び師弟の関係が復活した感じがし、大学のころがなつかしく思われました。このころは、今もつづく、先生がいわれた労働組合運動の「戦後最低の状況」であり、また財界による日本の経営賛美と企業別組合賛歌のときでもありました。また、全民労協もつくられました。先生が亡くなる前年、先生は、この講座の五巻に総論的な論文をお書きになりました。企業別組合の組織形態と労資癒着の組合のあり方について筆鋒鋭く批判されています。それは、今にしてみれば、日本の労働組合にたいする遺言の書ともいえるべきものだと思います。

同じ巻に書いた私の論文を見てもらうために、その年の春、社会学部の研究室にいった時のことです。先生は自分の論文を、体調が悪く、疲れたなかで「はあはあいって書いた」と話されました。また先生は大学の定年まであと二、三年ありましたが、自分は「学校の雑務におられないためにもう辞めて、自分の書きたいものを書きたい」ともおっしゃいました。その疲れは実は病のせいだったのですが、先生は、自分の老いの進行と大学を辞めてまでもやりとげたい仕事のた

きさを考えている御様子でした。

その仕事とは、おそらく、こういうことだと思えます。全民労協が八二年一二月にできて、その直後、岩波書店の『これからどうなる——日本、世界、二一世紀』という本の一つの項目のなかで、先生はこう書かれています。「現在、日本の労働組合運動は戦後最低の状況にある。全民労協の発足はその象徴である。それは資本の側と癒着した民間単産が、さしあたり日本の組合運動の指導権を掌握したことを意味する。支配層はこれで狂喜したとしても不思議ではない。だが、運動がたえず歴史的な生成・発展をとげるものである限り、運動が新しい転機を迎え、目にたえない場所においてであれ、新しい運動の萌芽が準備され、あるいはすでに姿をあらわしてきている」。「支配層が狂喜」するこの事態に、これまでの仕事を反省しつつ立ち向かっていきたい、これが先生の研究者としての最後の姿勢であったに違いありません。

そして、同じくその年の一〇月、小雨の降る日でした。社会学部多摩校舎へ向かうバスのなかでお会いし、バス停から校舎への長い坂道をゆっくり御一緒しました。そのとき「自分の生きているあいだに日本の労働組合の再生をみることはできないのではないか」といわれました。私は労働組合再生の課題の大きさを先生はいわんとしているのか、自分の寿命の残り少なさをもちされたのか、とっさの判断にこまってしまうました。そのころはもう先生は労働組合からの講演依頼は受けず、私にその任を課せられることがありましたので、私は「いま、労働組合は新たな発

展の糸口をみいだすためたいへんに苦勞しているようです。先生にうかがいたいこともたくさんあります」と話したことをおぼえています。具体的には、東京土建の組織が大々的に拡大され、その組織形態が企業をこえて地域で組織されていることや、出版労連や映画共闘などが企業別組合の連合という枠内に、職能的な個人加盟組織をつくり抱え込もうとしていることなどを話しました。

先生は労働組合のこれらの新しい運動に非常に興味をもたれ、そのことについて先生とゆっくりにお会いすることを約束し、別れました。思えばこれが、元気な先生とお会いした最後でした。

いま、日本の労働組合運動は、政府・財界の攻撃や、労働や生活の困難にもかかわらず、七五年以来の「戦後最低の状況」を脱してはけません。先生の切り拓かれた運動論・組織論の分野の発展がいまこそ求められているこのときに、先生は、こんなに大きな課題を残して、急いでいってしまわれました。残された者はなにをすればいいのでしょうか。寂寞たる雪原に立つ思いです。

だが、残された者は、労働組合の再生を願うかぎり、先生の残された課題を背負っていく以外にはありません。それは、労働組合の研究者と、労働組合の実践家とが、協力し、経験をよせあい、総括し、理論化していく作業のなかでなされうると思います。私たち若手の研究者もそのなかで、先生の遺志を継いでいくことを、誓います。

(法政大学社会学部講師)

追悼・中林さん

中林賢二郎君を悼む

高橋正蔵

賢二郎君。昨年の旧制高校OBインターハイテニスに、君が体調が悪く出場しなかったと聞き心配していたところ、本年正月、例年のおり年賀状が舞い込み、一安心したのも束の間、旬日を出ずして、君の訃報に接し、がく然とした。

君とは後述のとおり、愛知一中、八高と毎日テニスを共にしたが、君は東京大学文学部西洋史学科に進み、東北大学へ行った私とは大学時代、東京で度々落ち合い旧交を温めて来た。戦後は年賀状の交換だけでお目にかかる機会もなく三十年余が過ぎ去った。ところが数年前のOBインターハイテニスに君が出場して母校八高のために活躍したことを知り喜んだことであった。そして翌年夏の毎年行つて来た名古屋における八高庭球部OB懇親テニスに君は初めて顔を出し、平松コートで得意のフォアハンドを打ちまくる英姿に接し、昔を偲んで懐かしく思ったことであつた。

そして、その夜、料亭「鳥久」の懇親会々場で久々に楽しく語り合つた。君は法政大学教授と

して社会学を担当して活躍していることを知った。そして、永年テニスと別れていたが、ご子息がテニスを始められたことから、毎日その相手となり、三カ年練習を続けたお蔭で、若い時代ほどには行かないまでも、ようやく人並みに打てるようになったと君が喜んでいたことが印象に残っている。そして毎年この懇親テニスで会うことを約束したのに、翌年から仕事その他の都合で来名されず、遂にこの夜が君にお会いする最後の日にならうとは夢にも思わなかったことであり痛恨の極みである。

思えば、君に最初に会ったのは、愛知一中のテニスコートで一緒に先輩の球拾いをした時であった。爾来、雨の日以外は授業のある日はもちろんのこと休日も朝早くから日の落ちるまで、毎日ラケットを握り、白球を追って脚を鍛え、腕を磨き、競い合ったことであった。一年の時六十八人余いた庭球部員も五年卒業の時には十人となったが、君とは一日として会うことのない日はない愛知一中の五カ年間であった。八高に入ってから三カ年同じテニス生活が続いた。特に八高では、ともに二年間寮に居たし、三年の前半はテニスの合宿で同じ部屋に起居したので授業時間以外は終日一緒にいたわけである。テニスでは私がNo.1、君がNo.2であったが、君は体も大きく知能も発達していたので、私生活では私は何かと教わり、君の方が常に兄貴分であった。

愛知一中五年の時には、東海地方におけるテニス大会の優勝旗、優勝盃を二人で独占し、卒業の時、写真上手の君が撮ってくれた優勝旗と優勝盃に囲まれた写真は、今なお大切に保存してい



全日本ジュニア選手権大会ダブルス優勝（1936年8月5日）、右、高橋正蔵氏

る。

八高一年の時には全日本ジュニア選手権のダブルスで君と組み、優勝し手を取り合って喜んだことを記憶している。

八高ではインターハイ三年連続全国制覇の偉業を達成しえたのも君の力によるところ大である。一年のときは久野辰男（故人）、大竹進、二年の時は滝保夫、豊田幸吉郎、三年の時は豊田幸吉郎、中条良次（故人）の諸兄の力によったことはいうまでもないが、二年、三年の時は君がダブルスNo.1、シングルスNo.2で松山高校の岡本弟君との試合以外は無敵の活躍をしてくれた賜物である。何事も忘れ君と白球を日の暮れるまで追い回した若き日が懐かしく思い出されるのである。

昨年夏にはテニスの恩師長谷川寛治先生を、

秋には宿敵慶応の藤倉五郎君を失い、今また私のテニスの良きライバルであり、良きパートナーであった君を悼む筆を進めるとは悲しい限りである。

心から君のご冥福を祈って筆をおく。

(弁護士)

テニスの中林

寺 沢 恒 信

中林君とわたしは同じ一九一九年一月の生れで、同じ一九三六年に第八高等学校に入学した。中林君は文甲、わたしは文乙だったから、クラスはちがっていたが、二人とも二年間寮生活をしていたから、いろいろなことでつきあいは多かった。

「中林君」と「君」づけで書きたしたが、学生時代からずっとおたがいによびすてでよびあってきたから、「中林君」などというとなにか他の人のことをいっているような気がして調子がでない。「中林」と書かせてもらう。八高時代の中林はなんといっても「テニスの中林」だった。愛知一中時代から高橋正蔵とペアを組んでいて、このペアでダブルスのジュニア選手権をとった。八高に入ってから同じペアでインターハイ三年間連続優勝をなしとげた。高橋はあだ名を

「タコ」といったが、中林にはあだ名がなかった。

シングルスではタコがナンバー・ワンで中林はナンバー・ツーだった。タコのテニスは非常に攻撃的なテニスで、サーブを打つとバットとネットぎわにダッシュして、ヴォレをきめるのが得意だった。中林はスマッシュが得意で、長身の彼のスマッシュがきまる時は実にあざやかだったが、シングルスではあまりスマッシュを打つ機会がなくて、ベース・ラインから深い球を返すどころかといえぼ守りのテニスだった。こうした質のちがったテニスなので、この二人のダブルスは無類に強かった。タコがネットに出てよこをぬかれても、中林がうしろで着実にひろったし、相手がタコのネット・プレーをきらってロブをあげてくると、中林がコートの後半から目のさめるようなスマッシュをきめるといふ、実に華麗なテニスだった。いまでもわたしの目にうかんでくるのはこうしたまことに格好のよい中林である。

だが、われわれが八高の二年の時に中日戦争がはじまり、自由主義者の河合栄治郎までがやられるという状態で、時代はだんだんと暗くなっていった。二人は同じ年に東大の文学部に、ただし中林は西洋史学科に、わたしは哲学科に入学した。ひるま大学に行っている留守に特高刑事が下宿をがさって、『資本論』をもっているというだけでひっぱられたといううわさが流れて、わたしも『反デュリング論』や『自然弁証法』のかくし場所にこまったものである。だれもが船晦や自己欺瞞なしには生きられない時代だったが、そうした条件のなかで中林もわたしも、それ

それがせい一杯に生きてきたのであって、中林とわたしとのあいだには、その後たがいに老年になってからでも、あの苦しい青年時代を共にせい一杯に誠実に生きてきたということが、口では悪口や冗談をいいあっても、無言で認めあえるきずなになっていた。

真珠湾の十二月八日の同じ十二月の二十五日に、わたしは三カ月くり上げ卒業で大学を出た。留年の自由はなく、誰も彼もむりやりに大学を追いだされたのだが、中林はその時ルンゲにかかっていて、幸いにも休学することができ、数年後に病気がなおって卒業した。卒業論文のテーマにわたしがヘーゲルを、中林がトマス・モアを選んだのは、これならばあなた方もわたしを引っぱらないでしょう、という意思表示のおかげでせい一杯の抵抗を示したものだっと思う。その当時すでにその後の研究生活のプランをもっていった、などといえ、美化しすぎたウソになる。故人を追憶しその業績をたたえるのはよいが、美化しすぎると作りものになってしまう。弱さも欠点ももっていたが、ひたすら誠実に生きてきたのが生身の中林であり、それがわたしの大きいな中林である。

(都立大学名誉教授)

わが友ありて

田中 信

一月十一日朝、倭子夫人からのお電話で、旧制第八高等学校で同級以来親しくしてきた中林賢二郎氏の訃を告げられ、思いがけないことだったので、茫然としてしまった。

愛知県立一中卒の彼と東京府立八中卒一浪の私が、はからずもともに八高文科甲類に入学して同級となったのは、二カ月前には二・二六事件のあった昭和十一年四月のことであった。一年生は全寮制ということで、名古屋市内に自宅のあった彼も私も学寮に入り、南寮二階のほど近い二部屋にそれぞれ起居することとなった。一部屋には室長と呼ばれる在寮二年目の二年生一名と一年生五名がおり、全体で三棟三一室あった。

彼は当時の私との出会いを回想して、「古い木造の寮舎に入れられ、味気なさにいささかうんざりしていたとき、廊下を口笛でメンデルスゾーンのコンチェルトのテーマを吹き鳴らしながらゆく男がいたのだよ。それが君だった。救われた気がしたものだ」と、これは戦前にも戦後にも聞いた。私たちはすぐに親しくなり、長期の休暇には、いま何々を読んでいる、何という映画を

みた、などという葉書を交換したものである。

お互いに精一杯の高校一年目を終えてふたたび春を迎えたとき、彼も私も期せずして、かつて彼が味気ないといった木造寮舎にもう一年居残って、こんどは室長として寮生活を続ける道を選んだ。

当時の高校は、旧制中学を終えたばかりの幼稚な若者たちが集まって、それぞれが脱皮するよう人間としての自我に目覚めて、ひたすら自己研鑽に邁進する学園であり、そのためには寮生活は好都合であった。家族などと離れてひとりで生活するのもよいし、そこには代々の真摯な先輩寮生たちがつくりあげ洗練させてきた諸々の生活様式があった。

二年生になると、私は選ばれて学寮委員のひとりとなり、自営炊事部監事を兼ねることとなった。学寮委員とは執行機関の頂点である四人のグループである。学寮委員たちは中林室長には寮務につくことを期待しない意向であったが、これは彼が校友会庭球部の重鎮であって、責任も重かるうし練習もきつかるう、と思ったからである。

彼は一中時代からバートナーの高橋正蔵氏と組んで、東海中等学校庭球選手権戦でダブルスで優勝するなどの戦果をあげてきたし、高橋氏ともども八高に進んでからは、一年生の夏に同じペアで全日本ジュニア庭球選手権大会でダブルスで優勝している。

よい室員に恵まれて、彼は二年目の寮生活を愉しく過ごしていたようである。困ったような顔

を見たことがない。寮会で劇を上演するといえは、進んで熱心に演じてくれたものである。

二・二六事件以来、軍部の暴走により戦火が大陸に広がっていたが、学校全体がついてゆけないという気持でいたのではなからうか。私たちはむしろ学究的で、気兼ねなく自由に書物を選んで読んでいた。

彼は東大文学部西洋史学科に進み、私は同じ文学部の社会学科に進んだ。私は三カ月繰り上げられて、昭和十六年十二月に卒業し、越えて二月に千葉県佐倉町の歩兵部隊に入営した。彼は在学中に肺結核に罹って二年間療養し、十九年九月に卒業している。

八高での同級生たちが三十五年以来ほとんど毎年、家族ぐるみを集会を持つようになっていくが、彼は法政大学に勤務するようになったところからであったろうか、夫人同伴で参加するようになった。五十四年十一月には、彼が幹事役で中伊豆湯ヶ島の温泉宿に集まり、その時に八高在学中から号を重ねていた学級誌『塑像』を復刊することが申し合わされ、これは彼のイギリス留学中に発行されたが、「旅について」と題して、その人柄を偲はせる読み応えのある彼の文章が載せられている。

彼の早過ぎた逝去を悼み、御遺族の皆様の皆様のお祈り申し上げます。

（東京成徳高校講師）『賃金と社会保障』（労働旬報社）一九八六年二月下旬号より）

賢ちゃんとの五十年の交友

川田 祐之

故法政大学教授中林賢二郎先生は、私には賢ちゃんであった。彼に初めて会ったのは、昭和十一年春、旧制八高の寄宿寮であった。五十年前である。彼は文科、テニスの選手、私は理科、ボート部、何ら共通点のないのに、彼とは、その後の五十年の間、親友でありつづけた。

学業、運動練習の暇を見つけて、よく一緒に遊んだ。酒もよく飲んだ。論争もした。彼は、いつわりのない人物であった。

彼の訃報を受け、一月十一日の寒い晩、お通夜のある小平のお宅に向った。お宅は並木路に沿って流れる小川のほとりにあった。都会の喧噪から離れた静かなところであった。歩きながら、ふと思った。五十年前、寒い晩、彼とマントをかぶり、高下駄をはいて名古屋の郊外のこんなところを共に歩いたことを。ここは彼の好きな所なのだ。お宅で奥さんに見せて戴いた彼の死顔はやすらかな仏の顔であった。お通夜の席で聞いた話では、彼は熱のあるのに、自分の受持った授業に出るために、大学に行ったとのことであった。無謀のようだが、教育者として誠実な彼の一

面がうかがわれた。交友の間、私は彼から多くを学んだ。クラシックのシンフォニー、アンドレ・ジイド、ヘルマン・ヘッセ、バレリー、キリスト教と西洋の文明、其の他限りない。

夏の休暇のとき、名古屋の彼の家を訪ね泊ったこともある。彼も私の東京や、箱根の家に来てくれた。冬には一緒に菅平にスキーに行った。腕前は、ほぼ同じであった。

大学時代は戦争が始まっていた。乏しい酒と粗末な肴で語り合った。真理を求めて、共にカトリックの神父を訪ねたこともあった。昭和十八、九年頃、戦果カクカクたるものが報道される中でも彼は戦争を冷静な目で見ていた。戦後は米ソの対立を、両国の建国の思想の違いから説明してくれたのも彼であった。彼とは立派な話をしただけでない。くだらない話、下品なことも、率直に話し合った。

近年よく話題にしたことは、日本は高度成長を遂げ、一人当たりGNPは日本が米国を追い越す。二十一世紀は日本の時代と言われ出したことに對する疑問である。この国はそんなに裕福ではない。この国をつくる思想の基礎は、実体は寧ろ貧しいということ。これに對し、彼と私は同じ考えを持っていた。

彼は社会福祉という点で、GNPが遙かに低いと思われている英国と比較して劣っていることを言っていた。

我々のこれからの仕事は、日本をもっとゆとりのある豊かな社会にするにはどうしたらよいか

という問題の提案であった。これに対して、我々は、五十年前の情熱を以て、考え論じた。その相手の彼を亡くした。私は孤独で問題に向わなければならぬ。彼は教養人、学者として既に成熟した人物であった。私はまだ幼稚である。私は、これから数多くの問題にとりかかろうとしている。

賢ちゃんよ、これからは、天から指導してくれ給え。

賢ちゃんの霊の安らかに眠られんことを祈る。

(カワタバブリシテイ(株)社長) (昭和六十一年八月 山中湖畔にて)

急に消えてしまった友

村 瀬 泰 敏

中林君が逝ってしまってからもう半年以上も経ってしまったのか。

彼と知り合ったのは昭和十一年四月、旧制第八高等学校の文科甲類一組で同級生になって以来だからもう五十年の昔になる。

然し田舎中学出の平凡な私と違って、名門愛知一中出身で、テニスのインタミドルのダブルス優勝者と言う晴れがましいタイトルをひっさげて入って来た彼は、まことに輝ける花形的存在であった。

白ズボンの長身の彼が軽やかにコートを駆け廻っている姿には、五月の薫風のような爽やかさが常時漂っている感じがあったし、最初の夏休みが明けて登校した彼からインターハイ（此の年から八高のテニス三連覇が始まるのだが）終了後過ごした軽井沢での楽しかった日々のお話を聞いてみると、私などとは別の世界に住む、近寄り難いエリートのように思われたものである。

然し教室で一列前の席の彼と時々話を交えるようになってみると、思ったより気さくで勿論センスは良いし、級友の誰彼の特徴をうまく捉えて戯画化して語る彼の話術には巧まざるユーモアがあつて、彼の周りにはいつしか毒舌仲間が集まるようになり、私もその一味として彼を愚二郎と呼んでよくからかったりもした。そうした柔らかなさの反面、時に権威に屈せず、正論を吐いて譲らぬ硬骨漢ぶりを示す事もあり、二年生で学寮委員になった私に良きアドバイスを与えてくれたり、苦境に立った時には温かい支援を送ってくれたりした事もあつた。

戦時中に結婚式を挙げた私が、その披露宴に級友として彼ひとりだけを招いたのは他の悪友連中が概ね戦争に駆り出されてしまっていた事のほかに、心を許して語り合える数少ない友として貴重な存在であつたからでもある。



八高OB「くるみ会」

私達の学友は戦争によって連絡もズタズタに断ち切られ、その消息も殆んど判らない状態が二、三年続いた。そんな或る冬の夜、田園調布の駅前で偶然彼の姿を見かけた時は懐かしさが胸一杯に広がって思わず駆け寄って手を差し出したが、彼が「君、今興銀に勤めているんだってな。金融資本の走狗とは握手できないよ」と言って硬い表情のまま、とっとと足早に歩み去って行った時は、あの心温かい友が、今やどうにも手の届かない遠い所へ離れて行ってしまったように思われて、寒風の中に暫らく呆然と立ちつくしていた。

私達の八高のクラス会は「くるみ会」と称して昭和三十年頃から年一回の家族ぐるみの旅行で親睦を深めている。彼は長年その会に参加しなかったが、去る五十三年十月名古屋で行なわ

れた八高創立七十周年記念祭のクラス前夜祭に初めてその姿を現わした。級友の喚声に迎えられて照れ臭そうに席を占めた彼の顔の眼鏡の奥には、あの普通の優しい眼が帰って来ていた。

その会で、長年さぼっていたから来年は中林が幹事をやれと言う事になり、彼から私に協力を求められた。湯ヶ島の白壁荘を会場と決め、その下見に是非同行をと誘われて、五十四年八月の中林夫妻と私夫妻とで同地を訪れ、その晩、宿の下の清流の音を聞きつつ、人の世の生き方などをしみじみと語り合ったのも今となっては懐かしい思い出である。

八高時代の英会話のミルワード先生を英国滞在中の彼が探りあて、何かと連絡をとり、同先生が叙勲記念に来日されたのを機に当社の寮で「くるみ会」の臨時会合を催したのは五十八年六月の事であった。その際何かと先生の面倒を見る彼の態度には旧師への細やかないたわりの気持が溢れており、本当に昔の中林が帰って来たのだと嬉しくてたまらなかった。

六十年度は何故か皆の都合が悪くて恒例の「くるみ会」も開けないまま、今年一月、彼の奥様から死去の報せを聞いた時は、大切なものがこちらの不注意で気がつかぬ間に突然消えてしまったような驚きで、思わず「しまった」と口走った。

その晩、私は卒業記念のアルバムを繰って彼の写真を探した。八高の裏山の草の上に腰をおろして遠くを見つめている彼の背中の方から冷たい冬の風がひょうひょうと吹いているような感じであった。それをじいっと見つめているうちに、その姿もぼろっと霞んでしまった。

あゝ、とにかく淋しい。

(アブタビ石油代表取締役社長)

夜の立ち話

三 國 一 朗

中学での小林さんは、私の二年上のクラスにいて、いつもテニスの試合でカップをとってくるスター的な上級生だったから、当時の顔、姿かたちは、半世紀後のいまでも忘れない。

その後、旧制の八高の文科甲類（英語）に進んだ小林さんが、規則で一年だけは入ることになっていた学寮（寄宿舎）に二年いて、その二年目に定員六人一室の「室長」だったのは、当時の自宅が東京（八高は名古屋にあった）にでもあったのかもしれない。その小林室長が三年に進級して学寮を出ると、その年八高に私が入るのは、つまり入れちがいったわけである。だから、中学の先輩でもある小林さんの顔はよく知っていても、親しく話し合うようになるのは、私が八高から東大の文学部に入ってからだった。

それは、フランス文学科の主任教授だった辰野隆博士の「十九世紀仏蘭西文芸思潮——フロオベール研究」というタイトルの講義の教室でのことで、この講義はかなり以前からはじまってい

たものらしいが、私が中林さんと席を並べて聴いていたころのギュスターヴ・フロオベール本人は、まだ青年期を脱しておらず、ルーアン近郊のクロワツセの別荘に住み、十一も歳上の女流詩人ルイーズ・コレと恋愛中という時期で、無論まだ『マダム・ボヴァリー』は世に出ていなかった。まさに悠々たる大河の流れのような講義だったのである。たしかにあのころの東大文科は、戦争中とはいえ、のんびりした愉快な雰囲気、まだまだ残っていたものだ。

また、中林さん自身が、一生のうちでいちばん太っていたのもあの時期ではなかったか。その理由は、静養中だったころの中林さんに強引に榮養をつけて太らせるといふ、前ペニシリン時代の治療法にあったと思うが、とにかく、後にも先にも、あんなに太った中林さんを見たことがない。

戦後、中林さんが世田谷の奥沢、私が東玉川という至近の間に住んでいた時期があった。一度私の家の赤ん坊がハシカにかかり、そのハシカのバイキンが連悪くなにかの用で私を訪ねてきた中林さんを媒介として、中林家のお子さんにうつってしまい、恐縮したことがある。

「至近の間」で思い出したが、法政大学教授になってからの中林さんは、いま私が住んでいる一口坂を、いつも大学との往復に通られたはずで、無論私もそれをよく承知していたのだが、いつでも会えるという安心感が却って私を怠けものにし、中林さんという大切な先輩であり友人である学者と話す機会を少なくした、そんな気がしてならない。



八高時代の友人と

一度、夜になってからの市ヶ谷駅前で、大学から帰る中林さんと、駅から出てきた私が、交番の前でばったり出会い、当然そこで長い立ち話をはじめたことがある。そのとき、中林さんといっしょにいた若年の一紳士が、私たちの立ち話を聞いていて、というよりもべらべらやっている中林さんと私を見ていて、おかしくしておかしくてたまらないという態度で笑い出しました。私たちは決して滑稽なことを話し合っているのではなかったが、それなのに傍観者である本人が、とめどもなく笑いこけている、その理由が私にはよくわかる気がした。つまり、傍観者の眼には既存のイメージとしての三國一朗が、他ならぬ中林さんと、親しい旧知として立ち話をはじめた場面ほどショッキングな出来事はなかったにちがいないのだ。その強烈

な矛盾並立感に対応するのに、ゲラゲラ笑い以外どんな手があり得ただろう。私は傍観者に同情し、短い会話で中林さんと別れてしまった。

そしてそれが、中林さんとの永久の別離になった。

(放送タレント)

追憶——中林賢二郎のこと

栗野 鳳

一月一七日は彼の誕生日なのだ、法政大学社会学部の事務の人が教えてくれた。その日に、社会学部葬を催すのだという。そして私に、友人関係の中の同窓生代表として弔詞を読んでほしいと言われた。私は昨年四月から法政大学社会学部で国際機構論の講師を勤めることになったのも、中林が引っぱってくれた経緯によるものだし、次年度の講義を国際平和論に変更したいという私の相談に対して、意外にも病床から返事を貰って（その問題は、私の希望通りになることが決まったが）、近く一度病院に見舞いに行こうなどと考えているうちに、とうとうそれっ切りになってしまった悔いもあるので、右の役を引き受けることにした。

そのため作成した弔詞は、時間の関係もあってあまり長いものは許されないので、その文章を相当大幅に補足・調整して、ここに追憶の趣旨のものを書き綴る。

われわれと一緒に旧制八高に入学したのは、ちょうど半世紀の昔一九三六年であるが、それほどのような時代であったか、その年すでに「二・二六事件」が起こっており、翌年には「日支事変」と呼ばれたが実は全面的な日中戦争、さらに言えば日本の中国への軍事的侵略が始まったことを挙げるだけで十分であろう。

一九三一年の「満洲事変」から「十五年戦争」が始まったという表現もよく用いられるが、そうなると、その初めの三分の一が過ぎたところに当たり、われわれは残りの三分の二も体験させられたわけで、要するに戦中派なのだ。しかし、高校三年間は、まだ人生と世界に希望を抱いてもいたし、学窓の内外で青春を謳歌する時もあった。そのような学生生活の仲間のうちで、中林は常に中心的存在の一人であった。

庭球部を背負って立つチャンピオンとして、毎年インター・ハイで活躍し、秋には真黒な顔と腕を見せていたものだが、そういう面ばかりではない。たくまざるユーモア、ウィットに満ちた彼の話は、いつも皆を楽しくさせてくれた。もう一人のN君が走り高跳びが不得手で失敗ばかりしている姿を中林が活写するときなど、「運動神経が全くない」とか、「あいつの心臓は、ガサ

「ッガサツといっている」とか、辛辣きわまりない批評をするのだが、それが実にピッタリ当たっているので、言われた当のN君も怒るに怒れず、といった調子で、周囲の無責任な仲間どもは、何日もそのことを話題にしたものである。

しかし、中林は、他人を冷やかしたり、皆を笑わせたり、そんなことばかりしていたわけではない。彼が同窓生や寮生活を共にした仲間の中で果たしていた役割には、後から想い出して実に貴重なものがあつた。その点を説明するためには、二年のとき、寮の「室長劇団」と自称したグループがやった劇のことを記さなければならない。それは、寮祭でのことで、ゴリキイの『どん底』を上演したのだが、十数名の登場人物の中でも重要なサーチンの役を中林が演じた。中林のサーチンか、サーチンの中林かと評判になつたほどの名演技だったが、特に、劇の終りの方でのサーチンの台詞に、次のようなものがある。

「(サーチンが指で空間に人物の形を描いて見せてから言う) わかつたか？ それはどえらく大きなもんだ！ その中には、すべての初めと終りとがあるんだ。すべては人間のためにあるんだ……にんげん！ 人間は尊敬しなくちゃならねえよ！ 憐れむべきものじゃねえ……憐れんだりして安っぽくしちゃならねえ……尊敬しなくちゃならねえんだ……」

中林は、この台詞が気に入らしくその後時々口にしてみせたものであるが、いつの間にか、いや、恐らくずっと以前から素地があつたのであろうか。そのような人間観、人間への信頼

や確信といった気持ち、そして人間に対する温かい心が、彼の全身全霊にみなぎるようになっていったように思われる。

日本がついに「大きな戦争」に突入したころ、彼は胸を病んで三崎に転地したり、戸塚の療養所に入ったりして、私も時折り見舞いに行ったことがある。しかし、かつて健康であった時とほとんど変わらぬユーモアをこめた口調で、その土地や周囲の人びとの話をしてくれ、見舞ったつもりが逆に慰められたり激励されたりして帰途につくのが常であった。堀辰雄の小説のことなど教えてもらったのもそのころのことだったと記憶するが、『風立ちぬ』のヒロインの運命に似たようなことにならずに済んだのは、単に彼が幸運であったというだけではなかったに違いない。

最近、未成年からちょうど成人式を迎える年頃の大学生に接する機会が多いが、われわれの同じ年頃においては、良い悪いは別にして、社会も大いに違っていたが、社会と個人、さらに日本社会と個々の日本人の関係が相当異なっていたように感ずる。ただし、私自身のかつての思想や感情は、どうというほどのことはない。私が想い出して、右のように比較して見て、今さらながら驚嘆するのは、当時の中林や、その他数名の仲間の思想の在り方である。その中味の詳細は省くが、社会の仕組み、歴史の流れといった基本的なことに対して、洞察を試みよう、何か把握せずにはおくまい、といった対処の仕方の真剣さ、執ようさに感心する。

そう言っても、中林から特に講義めいた話を聞いた記憶はない。その代り、これという肝心な時・所、ものごとのコンテキストなどに当たって、こう考えるんだ、こう行動するんだ、という実例を、身をもって示してくれた。

具体的には、あまりにディテールにわたることで叙述しきれないが、例えば、やがて戦災で焼失してしまった築地小劇場に私を連れて行って、何を観たらいいか自然に分からせてくれた。ロビーのところに上海で戦死した友田恭助の等身大より少し大きい写真が飾られていたが、それを眺めて考えるだけで、難しい思想書を一、二冊読むよりも多くのことを知ることができたように思う。もちろん、中林が適切に解説してくれたからである。

さて、用詞の終りの方で、私は何と言って締めくくるべきか、いささか迷った上、結局次のように言うことにしたのである。

賢二郎よ——

君がこの地上から無限の彼方に行ってしまったなどと、いまでも信じ難いのだが、それは恐らく、長い歳月のうちに培われて来た、われわれの中での、君の人間の実存の与える存在感といったものがそうさせるのだらう。

これからは、奥さん、お子さん方とも、こうしたものを分かち合っていくことにしよう。だか

ら、私は「きようなら」は言わない。

ただ、終りに、かつて一緒に唱った寮歌の一節を捧げよう。

へ春は日影のとの曇り

藤浪匂ふ鈴鹿山

秋は紅葉の散り敷きて

瀬の音冴ゆる木曾川原

又かぎろひの野辺を歩き

月照る庭に語らひし

.....

我友ありてこの此処に

待つとし言はば帰り来む

待つとし言はば帰り来む

春の海は泡立っているか

— 追憶のなかの中林見

北村 忠 夫

追憶は人にとって、誰からも奪われぬ貴重な、自分だけの財産である。真の "Eigentum" と呼んでよいかもしれない。年をとってくると、その想いは確かなものとなってくる。時の流れとともに多くの人々と出会い、数々の哀歎を重ねてくると、その度に様々な色彩が層をなして記憶の壁を塗りこめていく。それが微かなひとひらの想いであっても、またそれが淡い風花のようなものであっても、それらは哀歎のモノグラムのように、その時々々の斑痕を残していくのである。

それでは私の記憶の層に、彼が刻印したモノグラムは何であったのか。

既に戦争の暗い季節が深まる晩秋の夜、彼は海辺の私の宿に泊まっていった。海際の山裾に尾を曳いていた夕靄が低く沈んでしまうと、濃紫の夜気は海で冷やされるように、急速に冷える。白く灰を吹いて静かにもえる炭火の赤さに、彼がかざした細長い五指は、ほのかに透きとおるようであった。

青山高樹町にあった彼の旧宅を何度か訪ねた。翌年の春まだ浅い夜、ひとつの灯も許されぬ管

制下の暗い東京の街を、一緒に歩いたことがある。遠慮深げに灯をもらす市街電車だけが、古ぼけた木造の車体を軋ませながら、黒い柩のように時折り音をたてて走りさった。ひさしを曲げた学帽を目深にかぶり、外套の襟をたてた奥から、時々、彼は低い声で語りかけ、うなずいてはコロコロと笑った。学士会館での小さな集会で私が話すことになっていたのだが、彼はまるで兄のようにつき添ってくれたのである。その夜、彼の家で枕をならべた。

その頃の研究室では、戦局をよそに文学談議の花が咲く。助手の金沢誠、山上正太郎氏等の仲間にも加わる。プルースト、モーリアック等の作品である。多くを語りぬ彼は、時おり「そうなんだ！ 素晴らしいんだよ」と思いがけぬ大声で叫んだ。驚いて彼を見返すと、眼鏡の奥に微笑をたたえていた。

私より先に入学し、一年遅れて卒業した彼は、その組織の解体の日まで、御茶ノ水の東亜研究所にいた。ついでがなくても山上氏と連れだって彼を訪ねた。敗戦となりあの一帯は焼け残ったが、ある日、山上氏は「もう彼とは共通の言葉がなくなっちゃよ」と漏らした。彼は私からも次第に遠く離れていき、私の前から姿を消してしまったのである。

それでも彼との絆は切れない。

晩かった私の婚礼に彼は夫人と共にきてくれた。寿司折りと果物だけの粗末な宴である。彼の祝詞は忘れたが、胸に抱くようにして手渡してくれた小さな木篋は今も手許に残されている。そ

れは両の掌におさまりそうな、揺籃のように軽く左右にゆれる木の煙草入れであった。五月末の初夏の候である。卓上に撒かれたように自在におかれた季節の花、莓の赤さと、めいめいの前に転がされたような夏蜜柑の黄色——それは少々季節に早いかも知れぬが、私の記憶のなかでは夏蜜柑にしておこころ。

私より晚い山上氏の婚礼には、彼は姿を見せず、日高六郎氏が来た。その後、私は名古屋に移るとともに山上氏とも遠く離れた。その名古屋の寓居に彼は何度か訪ねてくれた。いつも前触れもなく、時にはいきなり縁側に現われて私どもを驚かした。この街に地下鉄が開通して間もない頃であつたらうか。雨もよいの夕刻、私は後向きに掘炬燵に身体をいれて、雪見障子越しに庭を見ていた。縁側の硝子戸の向うで彼は悪戯らそうに笑っていた。「駅を降りたら地下鉄ができているじゃないか。シメたと思つて乗つたら、なあーんだ、二駅きりの栄町までじゃないか！」——彼は腹立たしそうに大声をあげて笑つた。彼が去つた食卓には、カクテルを楽しませてくれた持参の洋酒の、ポケット小瓶がいく種類か立っていた。ペパーミントの甘さと青さが心に残っている。

彼はいつも風のように来て去る。「風のケンシロー」と私どもは呼んだ。ロンドンから風の使りが舞いこむことがあつた。次の機会に旅行の話をしてくれた。上海で旧居をみつけた話、彼に敬礼したピオニールの赤いネクタイと紅顔、復興途上の北朝鮮の国土一杯に咲き乱れるコスモス

——彼は微笑しながらも涙ぐんでいた。「知多半島へ行こう!」、彼がこう言って亡妻もまじえ、車で半島を一周したことがある。この「心」をおき忘れたような名古屋の街は、八高にいた彼にとつては青春の巷であり、きらめく内海うらみの海は目くるめく夏の想い出である。私の不幸の直後にひっそりと弔問に訪れてくれたのが最後であった。ハンチング姿が小粋によく似合ったこの時の彼は、堀辰雄の話をしてくれた。「車中で『風立ちぬ』を読みかえしたら、彼の作品の系譜はみんな解ってしまったよ」。こう言って彼は最後にあかるく笑った。作家の心象風景の綾なす仕組みを解きあかした満足感があった。

彼は以前に自分の仕事の証しを示すように、労働運動史の著書を送ってきた。いつか私とは別の世界へ入っていく、風が吹きぬけるようにと窓をあけて顔を見せてくれた彼は、このとき漸く私の身近に帰ってくれたようである。それはあの海辺の小部屋の世界なのであり、彼と指をかざしあったあの炭火のぬくもりに違いない。

追憶は再び鎌倉の街外れから、岬をひとつ廻った海辺の宿に帰る。「春の海は泡立っているか」——季節の便りの冒頭に彼はこう書いた。春の目覚め、新しい力の蘇り、彼は海底からたち昇る海の激情を想ったのであろうか。それは耳をすませば季節のざわめき、いや彼の心のときめきが聞こえるような「詩」である。厳冬の武蔵野の夜気に凍えながら、上水の堤の木立を急いだ弔問は、屢々その間どり、まで聞かされていた彼の新居への初めての訪問であった。三十六年ぶりの

夫人との悲しい再会でもある。翌朝、久しぶりで再会した山上氏と共に彼の柩を見送った。——
春の海の泡立ちは鎮まったのか。あの「詩」は私の心に刻む彼の墓碑銘である。

(名古屋大学名誉教授)

中林君の生きた時代

上杉捨彦

一九四五年八月六日、広島に原爆が落とされたとき、私は高射砲部隊の一兵隊として、新潟市北方の松林にいた。東京がすっかり焼け落ちて、そこにはもう高射砲はいらない。北からの侵攻に備えて日本海を防備する、という名目であった。私は一九四三年九月に、戦争のための二回目の繰り上げ卒業で大学を出て、日比谷公会堂のある建物の中の東京市政調査会に就職し、一階の書庫にとじこもっては壁ごしにきこえてくる新響の演奏をひそかにきいて、心をなぐさめていたものだ。

一年後の九月に、このひ弱な第三乙種合格の私に召集令状がきて、東京湾の当時一番新しい十号埋立地にある高射砲部隊に連れてゆかれた。それは独立大隊で、大隊長は二・二六事件に参加した『虎』と呼ばれる中佐であったが、特高（特別高等警察）から憲兵隊に連絡があり、一兵卒の私を呼びつけて大声でどなったのであった。おかげ様で私は最後まで兵卒でいられたわけだ。

原爆が世界ではじめて落とされたのは、汐留の駅から貨車で何日かかかって新潟にたどりつい

てから、わずか二カ月後であった。翌日だったか、B 29 がとんで来て、さては原爆、と将校たちはあわてふためいたが、落ちてきたのはボツダム宣言受諾、日本降伏を知らせたピラであった。そのピラを兵隊が拾うことは直ちに禁止された。しかし、私の中隊では兵士の叛乱があり、また朝鮮人の兵隊はさっさと帰っていった。日本の軍隊に拘束されているいわれはない、という至極当然の成り行きであった。

私がこうやって自分のことを書くのは、同年輩の中林君の生きた戦前・戦中の時代を思い起こすからである。

さて、中林君との出遇いだが、それはこういうことである。

敗戦の秋、私は東京にもどって市政調査会に復帰したのだが、ちょうどそのころ、戦争中、陰に陽に抑圧されてきた大原社会問題研究所の再出発の動きがあり、御茶ノ水から駿河台へ下る坂の手前右側の角にある、東亜研究所の建物の一室がその準備にあてられた。戦争に協力したということで同研究所はつぶされ、蔵書の多くはアメリカが持って行ってしまった。大原の部屋はそこだけ緑色の絨毯が敷いてあって、おそらくは東亜研究所の所長室だったのではないか。私はかねてから、大原再出発のさいは、是非そこで働きたいと、大内兵衛先生にお願いしてあったのだが、なかなか事は進まない。

同じころ、その建物に（これはのちに明治大学の生協が入った所だが）、末弘巖太郎先生が所

長の政治経済研究所、有沢広巳先生の国民経済研究所、大内先生の統計研究所があいついで開設された。また、民科（民主主義科学者協会）の初期の事務所もあったように思う。地下のせまい一室には鈴木東民氏夫妻が、コーヒー店（？）か何かをやって住んでおられた。各研究所に集まった研究員は、満鉄調査部にいた人々、あるいは戦前の運動に多かれ少なかれ参加した人々などその他いろいろな人がいた。

中林君はその政治経済研究所のたしか国際部にいたのだと思う。私のほうは、大原はなかなかはじめられないから、とりあえず世界経済研究所に入ったらどうか、と大内先生にいわれ、試験をうけて（もちろんひどい出来であったが）採用がきまった。ところが急転してその翌日、大原の再出発がきまり、私もはじめて久留間鮫造先生に呼ばれて、使っていたくことになった。世界経済研究所の一日所員であった。高野岩三郎先生がNHKの会長になり、大原研究所の委員会とというのが、内幸町の（日産の建物であったか）NHKの会長室で時折り開かれ、私もその末席にすわったものである。

こうして、いわゆる政経ビルの中で、中林君と私とのつきあいはじまった。各研究所のメンバーは、仕事の上での協力のほかに、労働組合の集会やサークルなどでも顔を合わすことが多かったから、みんなすぐ友達になったのである。中林君とのつきあいは、そこでの数年間で終るかに見えたが、のちに私は法政大学に移り（このことは久留間先生にずい分叱られた）、中林君

もやがて、新設の社会学部へ来て、大原の所員にもなり（どっちが先だったか？）法政でのつきあいがはじまった。

今、いろいろ想い出してみると、彼は私などとは比べものにならない多面的な人間でありながら、これまた私とは全く違い自己抑制のしっかりした男であった。彼が酒を飲んで乱れたなどということを、少なくとも私は一度もみたことがない。こういうと、知らない人は面白くもない人間と思うかもしれないが、そうではない。落語の師匠でほんとうの名人は、決して自分は笑わずに人を笑わすのだが彼にはそういうところのある、いわばほんとうの意味でユーモラスな男であったと思う。

私が忘れたたいのは、彼の思いがけない死の前の年、法政の夜の私のセミ生が、良知力という人を知っていますか、ときくので、知っているところではないが、「どうして？」と反問すると社会学部の中林先生が講義で良知先生のことを切々と話されたから、という。中林君が、自分の痛を知った良知君の生きざまを『未来』（未来社のPR誌）一九八五年五・六（No.224・225）号で知り、その話をあの独得の語り口で話してきかせたのだ。私はその時、教師というのはどうあるべきかを改めて考えた。良知君は一橋大を出て法政の経済学部の助手となり、大原の横文字の古典のカードを、久留間先生のもとで作り、教授となって何年かのち、一橋大にもどっていったのだが『未来』に書いたその年の十月に、何とも壮絶な死にかたで逝ってしまった。そして中林君

自身その二カ月後に。

奥さんと子供さんが残された。しかし、二人とも、ちゃんと生きてゆくだろう。彼の死は早すぎたが、しかし、人生をしっかりと生きてきたのだ。

ここで個人的なことを少しつけ加えれば、私の家内の母が死んだとき、中林夫妻が近くに住んでいて、葬式の時だったか、何日か私の小さい息子を預ってくれたことがある。私はある社会的な仕事で葬儀の仕事もちゃんとやれず、田沼肇君ほかの教職員、卒業生らの世話になり、二高の久慈正一君などは葬儀屋の代りまでしてくれたのだが、小さい子供ながらも祖母の死であるショックをうけている息子を見てくれた中林夫妻のことを、いつも有難いことと思っている。ちなみに言えば、奥さんは、一九四八年七月、沖電気労働組合の婦人部長をやめて、大原に入った。前記のような各研究所の交流の中で、中林君と結ばれたのである。

(法政大学経済学部教授、一九八六・十一・十一)

政治経済研究所で

あれは、一九四七、八年頃だったでしょうか。敗戦後二、三年を経て、労働組合の活動に、文化的な息吹きをということで、コーラス、ダンスなどが、あちこちで、始められました。

今はもう、あとかたもなくなくなってしまった駿河台・政経ビルの上階からも、時折、混声のハーモニーや、トロット、タンゴのリズムが、流れるようになりました。政治経済研究所労働組合の青年部が中心になっての、サークル活動でした。

どこからか、埃をはらって、探し出してきたような『リンゴの木の下で』、『奥様お手をどうぞ』などのレコードに合わせ、民主主義文化連盟からみえた先生の指導のもと、それこそ、四つに組んでの、真剣なレッスンでした。何しろ、兵隊ぐつや、長ぐつをはいてのステップでしたから――。

コーラスの指導は、メーデー歌『町から村から工場から』の作曲者・坂井照子さんに、毎週、お願いしていました。

その中心になっていたのは、当時、若手の活動家、中林さん、細井さん、ベック谷さん達。そして、楽譜を準備したり、レッスンの度に、廊下をとび廻って、かり集める連絡係りが、もっぱら、私の役目でした。

教える先生方は、ご苦勞なことだったと思いますが、でも、時の経つのを忘れるような、楽しいひとときでした。

「今日は、新しいステップを仕入れてきましたよ」と、得意気にリードして下さった、中林さんとのタンゴも、懐かしい思い出です。

組合の遠足に出かけて、中林さん、ベック谷さん達とボートに乗り、集合時刻にすべり込みでかけつけて、おじ様ぐみに、「不良少年・少女達が、戻ってきたよ」と、冷やかされたり――。

古きよき時代の、青春のひとつまででしょうか。あれから、もう、四十年近く経ちました。

(一九八六・九・二五)

中林賢二郎さんの人柄

舟橋 尚道

中林賢二郎さんとのつき合いは、かなり若い時分からのことである。私が大原社会問題研究所に入所したのは昭和二三年であるが、その頃中林さんは政経研究所におられた。どちらの研究所も、今は明治大学のものになっている。「政経ビル」の中にあり、同じ屋根の下に同居していた。

大原は、所員が四、五名の小さな研究所であったが、政経研はたしか二十名くらいの大世帯で中林さんはイギリスの労働運動の研究を担当されていた。私が研究所に入りたての頃、中林さん

は四、五年先輩であったから、気軽には口がきけないようなへだたりを感じたものである。

ところが中林さんは、当時大原で会計をやっていた松本倭子さんと結婚することになり、急に身近な存在となって話をする機会も増えた。中林さんが家を建てるというので、私の家に入りに来ていた大工さんを紹介し、家が出来上ってから伺ったことがあった。その時をきっかけにして中林さんの人柄が次第に理解できるようになったと思う。

中林さんの学問研究の姿勢は、原則に忠実でみずからの思想的立場を堅持するという点では厳しい感じさえ与えていた。しかしその厳しさは、もっぱら自らに向けられており、他人の考えには非常に寛容であった。中林さんとは二十年近く研究会などで議論する機会があったが、対立したことは一度もなかった。考え方に違った点があってもお互いに認め合うことが多く、そうなったのも中林さんの人間的な温かさと他人に対する思いやりがあったからだと考えている。

研究所で雑談しているときに、中林さんの人間の本质にふれるもっとも良い機会の一つであった。いつだったか研究所で昼休みにコーヒーの話をしたことがあったが、中林さんはコーヒーの豆を自分でひいていれると美味しいと例のこにこした顔で話された。たわいもない話だけれども、その時中林さんがお宅で精神的に豊かにすごしておられるという印象を受けたことを覚えてる。

コーヒーのいれ方がこっているというばかりでなく、中林さんは趣味の広い人であり、絵など

にも一家言をもっておられた。現代中国における画家の第一人者である齊白石の絵をみせていたことがあつたが、その絵の品格の高さが持ち主とびつたりだと感じたものである。

しかしなんといつても中林さんがいきいきとしていたのはテニスを話題にした時である。旧制高校時代テニスのチャンピオンになった時のこと、また五年ほど前に練習をはじめ、法政大学のテニス大会で活躍したことなどを伺っていると、私より若いのではないかと錯覚したほどである。そんなに元気だった中林さんが急逝されたのは本当に残念だと思つづく思ふのである。

(法政大学法学部教授)

忘れえぬ思い出

岡倉古志郎

中林君と私の最初の出合は、たしか一九四七、八年(昭和二二、三年)のころだったから、もう三七、八年も昔のことになる。

そのころ、神田駿河台の明治大学大学院のビルと道路を隔てた北隣(以前の明大生協、現在富士銀行になつてるところ)に政経ビルという建物があつた。ここは戦時中の東亜研究所の建物

で、敗戦で東研がGHQにより解散を命ぜられたあと、末弘徹太郎先生を理事長とする政治経済研究所がここを接收し政経ビルになった。旧東研研究員だった中林君は、私の高校（旧制武蔵高校）の後輩である故細井昌治君らと共に、政経研究所の研究員になって毎日ここに通勤していた。

このビルには、当時、「大家」の政経研のほか、大原社研、世界経済研、中国研などの研究所、民主主義科学者協会などが「店子」として入っており、一階には日本評論社の販売部まであった。まことに、民主的学術研究機関の寄合い世帯であり、共同研究会などやるには地の利に恵まれていた。各研究機関には労働組合も組織されていたから、ミーデーの時とか、やがて民主主義擁護同盟が結成されたあとなどは、組合間の連絡、協議、組合員間の交流なども活発で、政経ビルはいわば民主的研究者の「梁山泊」であった。

私は当時、平野義太郎先生、小椋広勝先生の下で西沢富夫君らと共に世界経済研究所に籍をおいていたから、この「梁山泊」の日常のなかで中林君たちといつしか知り合うことになったのである。

ところで、この「梁山泊」は、民主主義の熱気溢れる時代のこととて、いくつもの愛とロマンスの花も実らせたが、新進気鋭の青年学徒でハンサムなスポーツマン中林賢二郎も、大原社研に勤めていた、後の倭子夫人と結婚するに至る。同じころ、政経研の同僚細井昌治、大原社研の上

杉捨彦も相前後して同様な「研究所際職場結婚」にゴール・インしたので、たしか各労組共催でこの三組の新婚夫婦の祝賀会を開いたと記憶する。

それはさておき、そのうちに世界経済研究所は『世界経済年報』と題する四季報を編集・発行するようになるが、中林君は各国別政治経済分析編中のイギリスの部を担当し、編集事務を担当していた私は中林君と執筆上の打合せや、全執筆者による共同研究会などでしばしば顔を合わせようになった。この関係は『世界経済年報』が幾多の曲折を経ながら継続していく全過程を通じて続いた。

こうして交際を深めて行くにつれ、研究者としての中林君が原則的だが教条主義的でなく、常に鋭い問題意識を充満させ、かつ柔軟で広角的なアプローチのできる類稀れな研究者であることにますます敬服した。同時に、人間中林賢二郎が一見ひょうひょうとしているようで一本筋が入っており、どんな窮境・苦境でもカンラ、カンラとあの独特の笑い声ではね飛ばす明るい性格、昔風に言えば明朗豁達、当世風なら「ネアカ」とも形容されるような性格の持ち主であることに、文句なしに惹かれた。とりわけ、微笑を浮かべながら口をついて出る、彼独特の、あのユーモラスでパラドキシカルな警句の鋭さは天下一品であった。

十一年前に共通の先学堀江正規さんが亡くなった時、そのお別れする会で参会者にくばるリーフレットにのせる追悼のことは私が、年譜を中林君が分担することになり、告別式のあと私の家の書齋で内容の打合せをしたことがある。中林君が書いた堀江正規年譜は実に完璧で、しかも生き生きしていた。

それから早くも十年経って一昨年の秋、堀江さんの没後十周年を記念する集りで久々に中林君と出会ったら、「あの年譜は不完全だったなあ。堀江さんがマルクス主義思想に傾いて行く動機では、堀江さんの故郷である浜松のあの日本楽器の争議が最大のインパクトをもたらした、と訂正しなければ」としみじみ洩らしていた。労働運動史家中林賢二郎の面目が躍如としていて未だに忘れられない。

(アジア・アフリカ研究所所長)

細く、長い、おつきあい

——中林さんを偲ぶ

小林 勇

中林さんとは、ほんとうに細く、長い、おつきあいだった。

八高時代、かれは私の二年下だったはずで、ほとんど口をきくこともなかったのに、どういわけか、当時の私のことをよく知っているのを、不思議におもったことがある。かれもすでにテニスの選手として、インター・ハイなどで活躍、はなやかな存在だったので、スポーツにあまり興味のなかった私などまで、かれの顔は知っていた。この程度では、とてもつきあいとはいえないかもしれない。

東大に移ってからも、私が社会学、中林さんは西洋史だったから、たまに顔をあわせたときに、あいさつするぐらいのものだった。

そんなわけで、大学を出てからは、つながりはぶつりと切れてしまった。つきあいらしいつきあいが始まったのは、戦後になってからのことである。それなのに、高校時代や大学時代の中林さんの面影だけは、奇妙に鮮明なのである。私自身、人とのつきあいはあまりいいほうではないので、高校時代の知りあいで、戦後もつきあいのあった人は、数えるきりしかないのだが、中林さんはその一人であった。私も中林さんも、戦後は似たような道を歩いてきたせいかもしれない。

国電御茶ノ水の駅近く、駿河台の一角、世界経済研究所のあったビルには、同じような研究所がいくつか入りこんでいて、左翼の研究者の拠点となっていたが、私が世界経済研究所に出入りするようになってから、また中林さんと一緒にすることが多く、いつのまにか一つのグループが

出来あがっていた。そうしたグループの仕事の一つとして、欧米諸国の労働組合運動を研究、紹介した本を出したり、労働運動の雑誌の座談会にご一緒したりしたこともある。

とりわけ中林さんとひんばんに顔をあわせるようになったのは、大月書店発行の『労働組合運動の理論』がきっかけだったようだ。『理論』は、堀江正規さんが編集にあたり、ときおり私も桜上水の堀江さんのお宅にうかがったりして、堀江学校の一員みたいになっていたが、中林さんは学校の支柱のような存在だった。『理論』にひきつづく、やはり大月書店発行の『現代労働組合運動』では、海外労働組合運動の研究、紹介が主ということから、私が編集を仰せつかり、中林さんにはなにかと助けていただいた。

大月書店がこんどは『日本の労働組合運動』全五巻を出すというので、私も編集委員の一人として参加したが、中林さんとまたいっしょに仕事をするというのは、ほとんど十年ぶりのことであつた。この新シリーズでは、編集委員の世話役として、中林さんにはなにかと苦労が多かつたようである。そういうことも、体にひびいたのではなからうか。

シリーズの企画がはじまる直前、堀江さんの十周忌で、偲ぶ会が催されたとき、堀江さんの経歴を紹介したのが中林さんだった。その中林さん御自身もいまはない。おつきあいが長かつただけに、感無量である。

中林さんの研究領域は、組織論から運動論、国内の労働組合運動から国際労働組合運動と、実

にひろかった。私なども関係してきた国際労働組合運動の研究にかぎって見ても、日本の労働組合運動への貢献は大きい。日本の運動が重大な岐路にたつてるときだけに、その急逝はほんとうに惜しまれてならない。

(国際労働運動研究家)

中林さんの思い出

松尾 洋

中林賢二郎さんとの最初の出会いは、何時、何処であったろうか、思い出そうと思っても、なかなか思い出すことができない。そういうとき、必ず私の記憶に浮かんで来るのは、どこか郊外の道を、ふたりで何かしゃべりながら、地図をたよりに家をさがして歩いている情景である。それは、一度や二度のことではなかったような気がする。

その頃、中林さんは、世界労連の機関紙を刊行する機関にぞくし、私は機関紙連合通信社にいた。私たちは、毎月何回か労働組合の統一委員会運動の人たちを中心にする会合に出席し、宣伝活動について討議する、というより情勢についてレクチュアをうけ指導されていたのであった。会合で何が話し合われたか、いまではもう忘れてしまったが、ただ一つ印象に残っているのは、

「重光首班論」が議題になったことくらいである。どんな風に議論されたか、もう記憶にないが『日本共産党の六十年』は、「五三年四月の選挙のあと、自由党の吉田茂と改進黨の重光葵とのあいだで首班争いがおこなわれたとき、総評が、吉田内閣の実現阻止を理由に全野党が重光をおすことを提唱した。共産党はこの提唱を支持すると同時に、独自の首班をおそうとしていた社会党両派を、吉田内閣の成立を助ける分裂主義として糾弾した。この『重光首班論』は、改進黨にたいする誤った評価と、社会党にたいする打撃主義がむすびついてあらわれたものである」と書いている。

会合であまり納得しないまま持ち帰って報告したが、いろいろ説明を加えても、禁錮七年の刑で死刑を免れたものの、A級戦犯のひとり为首班とすることに誰もが疑問を持ち、なかなか支持されなかったのは当然であった。当時、中林さんが、こうした議論をどのように聞き、どのように感じていたのか、私にはよくは判らない。当時、会合に出席しての中林さんは概して無口で、報告や議論を黙々と聞いていたようで、ずっとのちに中林さんは、「あの連中は理論を軽視して困った」とぼつりと述懐したことがあったから、がまんして聞いていたのではなかったかと思われる。

その後、中林さんはヨーロッパから中国などを廻っておられた。私も、三井三池炭鉱から日鋼室蘭製作所、神岡鉱山など、地方の争議を見てまわる機会に恵まれ、例の会合に出ることもなく

中林さんとも会わなかった。

間もなく統一委員会運動などにも反省が加えられる時期が来て、中林さんも帰朝され、また頻繁にお目にかかれるようになった。その頃の中林さんは、煙草をやめるのだといってキャラメルをしゃぶりながら、私といっしょに会合場所をさがして郊外の道を歩いた頃とは違って、生き生きと希望に満ちて見えた。

その後の中林さんが東京都立大学、法政大学と学問の道に進まれ、労働組合組織論、統一戦線論と理論的研鑽を積まれたことは、私などのふれるまでもないことである。私も、ただ闇雲に追いまわしていた労働運動の宣伝活動を反省し、日本の労働者階級が積み上げてきた経験を学び直したいと思つて、ちょうど卒足した労働運動史研究会に入れて貰った。

学生時代からの一貫した歴史研究者であった中林さんには、私が会に出席したのが奇異に見えたらしく、「珍しいひとが来ていますね」といわれた。それから以後、労働運動史研究会の帰りなどに、私が大正期の友愛会や総同盟の運動に心酔しているのを批判されたり、いろいろ助言を与えられたものであった。また、法政大学の臨時講師に推薦して下さったり、大原社研の産別会議研究に参加する機会を与えられたり、いろいろ配慮を得た。中林さんから得た学恩に報ゆる機会もなく、私よりだいぶ若いのに先に逝去され、初めてお会いしてからのことを想い出している次第である。

(労働運動史研究家)

若き日の中林さんの思い出

若林 章雄

若林 しげの

中林さんの死を信じられないままに、やがて一周忌をむかえようとしています。

中林さんといえば、誰しもあのハンサムでノーブルなお顔と、ちょこんと帽子を横かぶりにしたスマートなお姿を思い出すことでしょう。

中林さん御夫妻と私たちのおつき合いは、とても古いのです。

あれは、多くの人びとが戦後の荒廃からやっと立ちあがろうとした昭和二十二年頃のことです。民主主義へのめざめが急激に高まって来た時でもあり、その中で「民主主義擁護同盟」という新しい組織ができました。

何もわからないまま、私たちは大学・研究所といったつながりでその仲間に入れていただきました。それこそ青春の真っ直中で新しい世の中づくりに邁進し始めたのでした。

私たちは、政治経済研究所、国民経済研究所、大原社会問題研究所などの仲間と頻りに集いや、勉強会をもちました。やがてその中で「文工隊」をつくり、日曜、休日にはグループをつく

って働く仲間をばげましに多くの職場や工場を訪ねては、お話をしたり、意見交換をしたり、歌で新しい息吹きを呼びかけたりしました。

その中心的・指導的立場であったのが中林さんでした。私たちからみれば中林さんはその頃、それこそ立派な大人でしたし、彼からは多くのことを教えていただきました。そして女性のあこがれの的であった中林さんが、きわだって美しく知的な女性——松本倭子さんと結ばれたのは二十三年の暮でした。勿論私たちの仲間結婚の第一号でした。今ではなくなってしまった御茶ノ水の政経ビルで仲間の手による会費結婚式が行われました。おそらく会費結婚のトップだったと思われまます。貧しい材料をもちよっての結婚式でしたが、大勢の方々の祝福と羨望の中で本当に美しいカップルの誕生でした。その日のことを私たちは未だに鮮明に思い浮かべることができるので。私たちの職場（中労）からも何人かの友人が思い切り大きな花束をかかえてお祝いに列席しました。誰もあんなに美しい立派なカップルになりたいという思いを胸にひめて、熱いまなざしを送るとともに、自分たちも幸せな気持で一杯でした。それから中林夫妻に触発されてか民衆同の仲間から幾組ものカップルがうまれました。その第二号か三号が経済学部の上杉捨彦教授の若き日のロマンスだと思えます。

しかし、その新しい息吹きも、活動も挫折せざるを得ない反動の嵐が吹きまくって、私たちもいつしかお会いすることがなくなってしまうましたが、その遠ざかった私たちが再び同じ大学で

顔を合わせるようになったのも、何かの因縁があったのでしようか。やがて、奥様がお体の具合が悪く退職されてからは、中林さんとお目にかかる度に「奥様いかがでいらっしゃいますか」というおたずねから始まるのでした。中林さんはいつものあの一寸口ごもるような独特のしゃべり方で、とても心配そうに奥様のことをお話しして下さいました。おやさしい目の奥が思いなしかるんでいるように見えました。「早くお元気になって！」というのが私の強い思いでした。

その後、あんなにお元気で、いつも明かるい笑顔でファイトをもやし続け、多くの方々から親愛されていらった中林さんが急におやせになり、何となくお元気をなくされたのは、昨年の夏頃からでしょうか。廊下でお会いする度にハツとする思いがしました。何処かお悪いのでは？と言葉をおかけすると「たいしたことないんですよ」といつもの温厚なお返事が返ってくるのでした。最後まで強い意志と情熱で多くの研究業績を残された中林さんには、まだまだたくさんのおやりになりたいことがおありでしたでしょう。

そして、あんなに固く結ばれ、先生の陰の力で頑張ってこられた奥様を残されて先を急がれたことが私たちには、とてもとても残念でたまりません。

まだ、廊下で、八〇年館の玄関口でお会いできるような気持をふり切って思い出の一端をのべさせていただきました。今は心から御冥福をお祈りするばかりでございます。

(法政大学通信教育部事務部長)

未来にかぎりなく確信をもった人

門 田 陽 一

中林さんを知ったのは、私が民主主義科学者協会の雑誌『社会科学』の編集にたずさわるようになった、一九四八年一月以後のことです。どちらも勤務先が駿河台の政経ビル（現在、明治大学所有）にありました。当時、私はまだ卒業直前の学生でしたから、話の相手ができるわけではありませんが、きっかけは、たしかにかの選挙のおり、ビル内の“居住者”としても運動をしようと呼びかけたら、政治経済研究所から中林さんがこられたことからだったと思います。

私は、健康上の都合で民科にいたのは一年余でしたので、中林さんとは音信が絶えていました。それが復活したのは、どちらも小平市に住むようになったためですが、ときおり、駅でいっしょになり、新宿までの小一時間、ときには吊り革にぶらさがりながら、話をするところがありました。ほとんど私が中林さんの話を拝聴したように思います。そのなかで印象づけられたことが二つあります。

ひとつは、かれの口から学生の悪口をきいたことがないということです。いろいろな方の名前

が出たように思います。二部の勤労学生をふくめ、かれのセミの方でしょうか、学生のそれぞれにすぐれた点を強調していました。最近、学生、青年の保守化が一部でいわれますが、いま思ひ出すと、中林さんは、そのような論に反撃するかのような勢いで教え子のすばらしさを語るのです。聞く私の方も、それぞれの方について具象的なイメージを持たされてしまおうというありさまでした。

いまひとつは、そのおりおりの問題意識を熱烈な口調で語りかけてきたことです。それも暗い話ではなく、つねに、かれなりに展望をもった話だったことです。月に一、二度くらいしか駅でいっしょにならなかつたので、話題は毎回、変わっていたと思いますが、それでも同じ話題がつづいたのは、イギリス留学後、イギリスの労働運動の動向、分析でした。かれの頭のなかには統一労組懇のことがあったと思いますが、私も対応上、その著書を購入せざるをえなくなりまして。しかし、そのころは、かれに駅で逢うことをたのしみにしていたことを思い出します。

私の家の庭には、柿の木が一本ありますが、この木は、かれが持ってきて、自ら植えてくれたもので、毎年、秋の味覚をもたらせてくれています。

(著述業)

中林賢二郎さんを悼む

塩田庄兵衛

冬休みで年末に東京に戻ったとき、中林さんが体調を崩して入院中だと小耳にはさんだ。夫人に電話で問い合わせると、検査が一段落するまで面会は控えてほしいとの御返事だった。新年になつての夫人の口ぶりから、不吉な予感を抱くようになったが、まさかこんなに急なことになるとは思わなかつたし、またそう思いたくなかつた。授業再開で余儀なく京都に戻つた矢先きに、「危篤におちいりました」、つづいて、「いま亡くなられました」と知らせが飛びこんできた。一月一日午前零時四八分。肺癌であつたこともはじめて知つた。

すぐ東京にとつて返して、安らかな死顔に對面したが、呆然として夢心地であつた。お通夜、密葬のあと、火葬場で珍しいほどたくましい骨を拾いながら、彼が別世界のひとになつてしまつたことを実感した。一七日に法政大学で催された社会学部葬には、京都を離れられない事情にあつたので、改めて弔電を打つた。

「長年いっしょに研究し、議論し、たびたび共同で論文を書き、そして楽しく飲んでしゃべり



塩田宅にて新年会（1977年）

あったあなたが、突然逝ってしまっ
て、私がかぎりなく淋しい」塩田庄兵衛

私たち研究者は当然、共同研究のグループをもち、いっしょに書物を刊行することも珍しくない。私も長年、たくさんの人たちと協力しあってきた。しかし、中林賢二郎さんほど緊密な関係をもった人は他になかった。

私が記憶する最初のもは、一九五七年に雑誌『思想』に発表した「労働組合運動における階級と国民」である。労働旬報社から一九六九年に刊行してもらった私の論文集『現代労働組合運動論』に収録してあるが、それには、「本稿は畏友中林賢二郎氏との討論を基礎にして塩田が執筆したものである」と断り書きがついている。当時労働運動のなかで関心の焦点に浮かび上がっていた、労働組合運動の階級性が国民

的立場なるものとどんな関係に立つかという問題について検討し、いくらかの反響を呼んだ、私にとって思い出の論文である。岩波書店の編集者松嶋秀三氏も加わって、世田谷区奥沢の当時の中林さんの自宅などで長時間議論しあった記憶が残っている。

ところが一方、同じ一九六九年に労働旬報社から刊行された中林さんの論文集『労働運動と統一戦線』のなかには、「もともと都立大塩田庄兵衛教授の助言をうけて執筆した……」云々のコメント付きの二篇が収められている。それは『統一と団結』（学習の友社、一九六一年刊）と題するパンフレットと、「統一戦線と社会民主主義」（講座『現代マルクス主義』Ⅲ、大月書店、一九五八年刊所収）と題する論文である。共通の問題意識で結ばれて仕事していた間柄であったところが改めて思い出される。そういえば、肺結核の再発で国立中野療養所に入院していた私のところに、彼が論文の原稿を抱えてこられて意見を交換し、ついでに結核患者の先輩としての彼から専門家はだしの医学談議を一再ならずきかされた記憶もよみがえってくる。

中林さんは長身で骨太なスマートないい体格をしており、飲むとテニスの名選手であることを自慢するスポーツマンであったが、私に劣らずよく病氣もした。こんなこともあった。藤田若雄・塩田庄兵衛編著『戦後日本の労働争議』（一九六三年、御茶の水書房刊）と題する大冊の実態調査報告書のなかに、一九五七年の国鉄新潟争議を検討した一篇があり、その末尾に次のよう

なへ付記〕がある。

「もともと本稿は、中林賢二郎と塩山庄兵衛との共同調査にもとづいて、分担執筆が予定されていた。しかし不幸にして執筆段階で中林が病気で倒れたので、塩田が全体を執筆したのち、病床の中林の検討を経た。したがって当初の予定を変えて、執筆者としては塩田だけが署名することにした」。

このときはたしか十二指腸潰瘍であった。吐血したときいて病院に駆けつけたときの、病室の殺風景なたたずまいが記憶に残っている。このアクシデントの前、ふたりは冬休みに資料を抱えて、なじみの伊豆湯ヶ島の白壁荘で合宿した。途中で矢内原忠雄前東大総長の危篤が伝えられた。先生に対して私が、特別の恩義を感じ、敬愛の念を持っていることを知っていた彼は、「君はすぐ帰京した方がいいのではないか」と気をくばってくれた。「いや、先生は剛毅強じんなキリスト者だから、きっとクリスマスまではがんばられるにちがいない」と非科学的なことを私は言って、予定の共同作業に区切りをつけたうえで、いっしょに帰京した。幸い東大安田講堂で催された矢内原先生の告別式には間に合うことができた。こんないきさつがあって、「国鉄新潟闘争」の一篇も思い出の論文である。

一冊の本をいっしょに作ったことも何度かある。労働者教育協会の学習テキストとして『学習講座社会科学の基礎』第二巻『労働運動史』（一九六三年、青木書店刊）を作ったときには、日

本を私が、世界を彼がという分担をした。『戦後労働組合運動の歴史』（一九七〇年、新日本新書）は田沼肇さんも加わって三人で討議して分担執筆した。私が編者になっている『労働問題講義』（一九七一年、青林書院新社刊）にも執筆して下さった。一九六四年に労働旬報社から私が『日本労働運動の歴史』を出してもらった翌年に、彼が『世界労働運動の歴史』上・下二巻を出され、姉妹篇のような形になったこともある。この小林さんの本は、日本人の手によるはじめての本格的な通史として、画期的な意義があるという趣旨の書評を私は書いた。

小林さんと私の間がこんなに密接になったのは、一九五七年に労働運動史研究会を組織し、機関誌『労働運動史研究』の編集をふくめてたえずいっしょに仕事をつづけてきたからである。この研究会は多くの研究者や運動経験者との接触・交流をつうじて私を育ててくれたが、そのなかで小林さんから受けた刺激や教示が、私にとっては特別に大きかったと思う。いつしかふたりは私生活についても報告しあい、身の上相談をもちかける間柄に自然にすすんだ。人生で数多くは出会うことのできない親友あるいは心友のひとりだが、私にとっては小林賢二郎さんであった。

私が長年かかえていた『日本社会運動史』（一九八二年、岩波全書）をやっと仕上げたとき、彼は『労働法律旬報』に「塩田氏による待望の『日本社会運動史』がついに上梓された。」待望の“というのは、ほぼ二〇年前から同氏が執筆の準備をしていられたことを知っていたからであ

る」と前置きして、きわめて好意的に書評して下さった。数多くの身に余る書評のなかで、中林さんの文章が私にはとくに嬉しかった。

私が京都に移ってからこの一〇年間は、顔を合わせる機会が減ったが、集まりに上京して「アレ中林さんの顔が見えないな」と物足りない気がする 때가ときどきあり、彼の健康への不安が私の心にかかりはじめた。しかし、まだ別れねばならぬ年齢ではない、と無意識にたかをくくっていた。したがって、こんどの不意打ちには参ってしまった。

いままではすでに一昨年のことになるが、立命館大学での共同作業で「日本の社会運動と国際化」について論文を分担執筆せねばならぬことになり、手紙と電話で資料や論点について相談した。そして彼の助言と、彼が以前に発表した論文にほとんど全面的に依拠して、どうにか書きあげることができた。それを収録した論文集『現代日本社会の構造変化と国際化』（有斐閣刊）がようやく一月二〇日に発行されたが、それを真先に見てもらわねばならぬ中林賢二郎さんは、すでにあの世に行ってしまった後であった。

思い出はつきないが、ここでは彼との結びつきの基軸であった運動史研究でのふたりの関係を中心に語った。しかし、こんな原稿を書くのは、辛くてイヤだ。

（立命館大学経済学部教授）『労働法律旬報』一九八六年三月上旬号より

革命的ロマンチスト

増島 宏

中林さんは、私にとっては、先輩であると同時に、何でも遠慮なく言える研究仲間でもあった。安保闘争の前、一九五〇年代の後半頃から「統一戦線」の研究をしようということになり、中林さん等と私がしばしば会うことになった。僕のうちの書齋に集まることもあった。当時、中林さんは、在野の研究者であったが、コミンテルンの右翼社会民主主義に対する態度をテーマとし精力的に史料の収集を心がけていた。僕は、日本の社会民主主義政党の構造分析と、歴史的特質を分担していた。多くの研究誌や雑誌に社会党論を書いたのもこの頃であった。これらの論文を書く際には、中林さんの鋭い問題意識の一部が役立つこともあったのである。

恐らく、この当時からの蓄積が、中林さんの労作『統一戦線史序説』に結集されているのである。中林さんは、東大文学部の史学科出身であり、手堅い、実証的な手法をもっていた。しかし、僕は、中林さんの本領は、あのロマンチックな、若々しい情熱にあったと思う。「革命的ロマンティズム」とでもいっていいかもしれない。このような、澄んだ、純粋な魂で、つねに日

本の労働組合運動を見つめていた。中林さんの書いたものを見ると、僕は、ツルゲーネフの『処女地』や『父と子』の時代の青年インテリゲンチヤの精神を想い起こすことがある。いま、日本の労働運動の一部を被っている「閉塞の精神」ではなくて、明るい未来への「開拓者精神」である。中林さんは、弱い肉体や逆境にもめげず、いつも、ロマンチックな魂をもちつづけている。この陰には、賢二郎氏をあらゆる面で支えた奥さんの、並大抵でない協力があつたにちがいない。

中林さんが、法政大学の同僚として働くようになってから、僕が一番印象に残ったのは、中林夫妻のイギリス研究生活である。僕はかなりの期間、大学の役員をやっていたので、余りお話しする機会には恵まれなかった。しかし中林さんが、イギリスでの研究生活をする際には、とにかく、一家でイギリスに行くことをすすめた。奥さんの健康を気づかいながら、それが実現する時が到来した時、中林さんは心から喜んでいた。

中林さんの研究成果の一部は『イギリス通信』に書かれている。この中には、イギリス労働運動の経験と實際が、わかりやすい表現で書かれている。しかし、この本の底を貫いているものは労働運動の母国イギリスに対する中林さんの愛情と尊敬ではないか。中林さん夫妻は、イギリス生活を心から愛していたようである。恐らく、夫婦揃って、マイホームのくつろぎを得た数少ない時期のひとつではなかったであろうか。イギリスがテニスの母国であったことも、ウィンブル

ドンが中林さんの家から手の届くところにあつたことも、中林さんの心を豊かにしたにちがいない。

一九八五年七月末、僕がイギリスでの一年間の研究生生活を終わって帰った時、一番先に中林さんとテニスをしながらか最近のイギリスについて語ろうと思っていた。ところが、中林さんは既に風邪をこじらせて元気がなかった。多摩の社会学部の新校舎の前で、「早くテニスをやろうよ」と語りかけたのが最後であつた。

(法政大学社会学部教授)

中林賢二郎さんのこと

二 村 一 夫

一月一〇日午後九時、奥様からの電話で、中林さんの容体が急変し意識が混濁されたことを知らされた。病気がかなり重いことはうすうす察していたものの、それほどまで思っていなかった。愕然とした。旗の台まで駆けつける間、なんとか意識を回復してほしい、なんとかもう一度元気になって欲しいと祈る気持ちと同時に、暮のうちにどうして見舞いに行かなかつたのだろうかと悔やまれてならなかった。

一〇時過ぎ昭和大学病院に着くと、中林さんは鼻から酸素吸入の細い管を入れ、全身の力をふりしほって呼吸し、死と闘っていた。奥様が呼びかけられ、私も二、三回声をかけたが答えはなかった。顔は思ったほどやつれていなかったが、強い黄疸症状が現われていた。そのうち指が異様に太いの気付き、やつれていないように見えたのは、むくみのためと分った。ただ、肩を震わせ胸を激しく上下させての荒々しい息づかいは、中林さんかなりの体力が残っていることを感じさせ、まだ回復のチャンスがあるのではないかと思ってみたりした。だがそんな希望的観測

は、すぐ吹きとんでしまった。中林夫人の弟さん、松本清昭和大学医学部助教授のお話でわかったのは、病氣は癌、それも右肺と肝臓に大きく広がり、さらに全身に転移があつて治癒の望みはなく、死は時間の問題であることであつた。その説明を聞いて二時間と経たないうちに、中林さんの心臓は動きを止めた。一日午前〇時四八分であつた。

翌朝の病理解剖の結果、癌の初発は右肺上部にあり、昨年一二月上旬にレントゲン写真で発見された右肺門部の腫瘍はそこから転移したものであることが判明した。転移は肺だけでなく全身に広がり、なかでも肝臓には大きな癌が数カ所、小さな転移は無数にあり、全体の六〇〜七〇%がすでに癌化していた。ほかにもすい臓、顎下腺付近のリンパ腺、胃の外壁、背骨など各所に転移していた。「こんなに早く成長した癌をこれまで見たことがない」と主治医は言われた。直接の死因は肺に水がたまり、そのための呼吸不全である。これほどの病状にもかかわらず、あまり強い痛みがなかったのがせめてもの救いであつた。

中林さんと最初に会つたのは、一九五七年五月一日のことである。労働運動史研究会が、といつても正式発足直前の準備会時代だが、明治大学大学院の会議室で開いた全国研究者懇談会の席上であつた。中林さんは前年「原爆の凶」とともにヨーロッパや中国を回つて来られたばかりで、主に中国における労働運動史研究の現状について紹介された。私はまだ大学院生で、自分の

研究やボランティアとして整理に当たっていた大原社会問題研究所の資料のことを説明した。研究会の正式発会後は二人とも事務局員となり、よく顔を合わせるようになった。外国史の専門家であると同時に現代日本について研究する人は今でこそ少なくないが、当時では希有の存在だった。中林さんの研究は、一貫して労働運動・社会主義運動の発展の法則性を追究される点にあった。日本の労働運動史研究が論理的把握の点で弱いことに、中林さんは批判的であった。

研究会での明快で理路整然とした発言はきわだち、マルクス・レーニン主義についての深い理解をもとにじゅんじゅんと説かれるところには強い説得力があった。ちょっと議論に行き詰まると皆中林さんのほうを向いてその意見を求め、たちまち会の指導的存在となった。

研究の組織者、編集者としても抜きん出た力量の持ち主で、機関誌の『労働運動史研究』を単行本形式に改め、その評価を高めた。労働運動史研究会は、その後、盛んになった統一戦線史研究、戦後労働運動史研究、とくに占領期研究ではその先鞭をつけたといってもよいが、その研究動向を主導した中心人物は中林さんだった。もちろん中林さんは単なる研究者ではなかった。教育者であり、実践家であった。しかし、それについて語るのは私の任ではない。

一九六五年、中林さんは法政大学大原社会問題研究所に兼任研究員として入所され、翌年には専任研究員となられた。私も一年ずつ後れ六六年に兼任研究員、六七年に専任研究員となって、

二人は一緒に仕事をすることになった。研究所での中林さんは、当時刊行継続が困難になっていた『日本労働年鑑』の編集責任者として、その立て直しに全力を傾けられた。その努力がどれほどであったかは、年鑑第三七集を見ていただければ一目瞭然である。全体の構成は大幅に改められ、とくに第二部の運動関係の章は倍増され、新たに序章をおこして、これまで欠けていた総論部分が追加されている。さらに巻頭には色刷りの統計図表のページが新設され、また各章の冒頭に概要欄を置くなどまさに面目一新である。新しく年鑑の出版を引き受けた労働旬報社の努力もあって、発行部数はすぐに三倍にも達した。

もう一つ中林さんが尽力されたのは大原社会問題研究所の「民主化」である。大原研究所は中林さんが生まれた一九一九年の創立で、長い歴史をもつだけに古くからの慣行もあり、運営にあたって現場で実際に仕事をする者の発言権が強いとはいえなかった。中林さんはその改革の先頭に立たれた。おかげで所内の風通しが良くなり、どれほど研究所の活動が活発になったかわからない。一方、中林さんは自己に対しても厳しく、それまで勝手気ままと言えなくもなかった研究員の勤務状態を率先して改められた。

個人としての中林さんは、明朗・快活、いい意味での育ちの良さをもち、一緒にいるのが実に楽しい人であった。年齢の違いを感じさせず、お互いに遠慮なく議論をかわすことができ、時に意見が大きく違っても後に感情的なわだかまりが残らなかった。話題が豊富で、人の噂話がめっ



大原社研、大島清、齋藤泰明さんの送別会（1983年）

たにでないのも快かった。そうした日々の思い出は尽きない。大原研究所の所蔵図書目録作成のため冬のさなかに暖房もない柏木の土蔵に通った日、暑い夏に『日本労働年鑑』の編集で合宿した時、鹿児島大学での学会の後に二人で回った指宿の旅、リスが跳び回るロンドンの中林家を訪ねた折のことなど、とくに忘れがたい。

一九七一年二月、中林さんは、アムステルダムの社会史国際研究所に留学された。ところがその出発直前になって社会学部教授への就任が決まり、大原研究所は兼任となった。正直のところ、これは私には大ショックだった。研究所のことで何かにつけて中林さんを頼りにしていたからである。いささか遣り場のない思いで、「貴方は我々を見捨てるのか」という趣旨の詰

問をした。いろいろ釈明されたことを理解はしたが、納得はできなかった。だが、今はちがう。

当時中林さんは、自己の研究生活の将来について深刻に考えておられた。それは、『現代労働組合組織論』のへあとがき」に記されている次のエピソードとかかわっていたのである。

「七〇年の一月初め、前年の暮から葉山の大森海岸で仕事をしてきた筆者をはげますために堀江正規氏がわざわざ旅館を訪ねて下さったことがあるが、その日の氏の言葉はいまも私の耳についてはなれない。うらうらと晴れ渡って三浦半島の海はすでに春を感じさせたが、お茶を飲みつつ氏がふともらされたのは、自分に残されている研究時間にはもう限りがある、せいぜい二つか三つの仕事しかできないだろうという意味の言葉であった。私は、愕然としたが、しかし現実はその以上にきびしかった。氏はその二つないし三つの仕事をまとめるいとまもなく、この世を去られることになった」。

ここでの堀江氏の言葉は、そのまま中林賢二郎の気持ちであった。研究者としての出発が遅かっただけに、残されている時間を絶えず意識せずにはいられなかったのであろう。「そろそろ自分を人間関係のこまごまと、煩わしい問題から解放して欲しい。残された時間はもう少ないのだから」。これが堀江氏との会話について語った後、中林さんが私に言ったことである。今となってはようやくその言葉の重みが分かるように思う。中林さんと私とは一五歳違い、彼がこの言葉を発したのはちょうど一五年前のことであった。

中林先生と大原社研

是 枝 洋

中林さんが専任になられたのはちょうど私が大原社研に入った年の翌年であった。専任になった中林さんはさっそく『日本労働年鑑』の改革にとりくまれた。中林改革の意味は当時の私にはわからなかったが、今度の大年表はその成果の一端を刈り取ったものではないだろうか。

そのころはまた、人事が大幅に動いたときでもあった。久留間所長から宇佐美所長への交替、唐谷さんの就任、また、二村さんも間もなく専任となった。研究所は間もなく五十周年を迎えようとしていた。新しい人事はなにかしら活気を呼びおこすものであった。五十周年の記念事業のひとつとして、研究所所蔵の図書のうち、戦前刊行の分の目録を編集しようということになり、中林さんをはじめ研究員も目録作業に参加した。当時、戦前の図書の大部分は研究所が昔あった柏木の通称お蔵においてあり、そこから車で運んで来ては目録をとり、また戻すという今では信じられないような不便さの中で作業がすすめられた。お蔵には図書のほか、膨大な洋雑誌、洋新

聞があり、これを運ぶことは不可能なので、中林さんや、齊藤さんと私は、お蔵に行つてほりにまみれながら、窓からもれる薄明りをたよりに目録をとつたこともあった。こうして、作業とともにしながら私は中林さんから研究所にどういう資料があるかを色々教えていただいた。

こうした苦勞をされていたので、中林さんはこのほか資料に愛着をもたれていたようだ。研究所の閲覧には紹介状を持参することを義務づけようという提案もそうした気持ちのあらわれであった。研究所をもっと広く一般の市民に公開すべきだと考えていた私はこれに反対した。中林さんは君の考えていることはわかっているよと苦笑された。結局この提案は他の職員も反対してうやむやになってしまった。後に中林さんがアムステルダム of 社会史国際研究所にいかれたとき、その研究員が資料を自ら整理した研究者のみがもつ感情をもって資料を紹介してくれたと書いておられるが、これがまさに中林さんの資料に対する思いでもあったろう。

こうした活気に満ちた時期をすぎ、研究所は麻布への疎開という厳しい時代を迎えた。その頃私は研究所での私の仕事になんとはなしに空しさを感じはじめ、大原を辞めたいと訴えたことがある。中林さんは研究所にはまだまだやるべきことがいっぱいあるといわれ、いろいろと例をあげながらその意義を説かれた。そういう話を聞くうちに私の職人的な血が騒いで結局私は大原に留まることになってしまった。

その中林さんが今度は突然しかもわずか五年で研究所から学部に移るといわれたのには皆びっ

くりした。私も正直落胆したが、中林さんは教えることは楽しいことだといわれ、それにはなにもいえなかった。勿論中林さんが学部に移られたのはいろいろな事情があったのである。以後、中林さんは研究所の運営についてはあまり積極的に口を出さないようにされていたのではないだろうか。それでも中林さんがおられるだけで、私達は心丈夫であった。いざという時に相談できるという安心感があったのである。そういう安心感にかまけて、生来怠け者の私は、かつて中林さんがいわれた私のなすべき事をなにとつ実現させないままに時を過ごしてしまった。せめてひとつでもなしとげて喜んで頂きたかった、という深い痛恨の念にかられる。

(法政大学大原社会問題研究所所員)

『日本労働年鑑』と中林さん

早川征一郎

中林さんが、大原社会問題研究所の専任研究員として、研究所の諸活動に従事されたのは一九六六年四月から一九七一年三月までの五年間であり、今、思い出してみると期間としては割合短い。もっとも、その前後、一九六五年四月より一年間、および一九七一年四月に社会学部に移ら

れて以来、亡くなられるまで兼任研究員として研究所に貢献された。

そうした「大原研究所における中林さん」について語られないと、中林さんの重要な一面が欠落してしまう。研究員としての中林さんの活動の全体像を語るのは、もとより私の任ではない。ここでは『日本労働年鑑』に関係することを中心に、私の知っているかぎりで書き記しておくことにしよう。

『日本労働年鑑』は、実は第三六集（一九六六年版）より出版社が労働旬報社に移り、今日に至っているから、その間もう二〇年以上になる。その前、戦後の復刊（第二二集）以来、数回にわたり出版社が移っていることを考えると、相対的に安定した二〇年間であったともいえよう。

労働旬報社に出版社が移る前は、東洋経済新報社であったが、実は『労働年鑑』の売行きはジリ貧となり、最後には発行部数八百部程度にまで落ちこんでいた。これでは、当時研究所で唯一の継続事業も危うくなるとして、なんとか盛り返すべく、宇佐美誠次郎研究員を中心に『日本労働年鑑』の戦時特集版として、『太平洋戦争下の労働者状態』と『太平洋戦争下の労働運動』の二冊が編纂された。戦時下の労働者状態・運動の事実発見と研究の先がけをなしたものととして、この二冊本の意義は高い。だが出版事情は思わしくなく、『状態』は東洋経済新報社が引き受けたものの、『労働運動』および『年鑑』三六集以降の出版は事実上断られたに等しく、とくに『労働運動』の原稿などは一年以上も寝たままであった。

中林さんが兼任研究員として研究所に入られたのが、ちょうどその頃（一九六〇年四月）であった。以来、労働旬報社と『労働年鑑』の結びつきが、中林さんをつうじて出来はじめた。もちろん中林さんと労働旬報社との友好的なつながりがあってのことである。当時、労働旬報社社長であった木槍哲夫氏との古くからの交遊もあずかって力があつたであろう。また一九六五年には、『世界労働運動の歴史（上・下）』も労働旬報社より出版されていた。

年鑑戦時特集版『労働運動』の出版につづき、『日本労働年鑑』第三六集、第三七集は労働旬報社をつうじて出版された。また戦後の『労働年鑑』の復刻版も後に同社から出された。こうして、出版社問題はここに解決をみたのであった。

中林さんの『労働年鑑』への貢献は、出版社問題だけでなく、年鑑の内容の改善でも大きなものがあつた。とくに第三七集の改革は大きく、第二部、労働運動が大幅に拡充されただけでなく一層現実の運動状況に適合したものとなった。さらに毎年、年鑑の執筆や編集に当たり、春期を中心に運動当事者からのヒアリングや執筆のための検討会なども積極的に組織された。地味なことながら、これも重要であつた。以上のことに鑑みると、『労働年鑑』に関し、中林さんは文字どおり「中興の祖」であつたといつても過言ではないであろう。

内容の執筆分担についても一言ふれておこう。中林さんの年鑑分担執筆は、研究所へ入る前から始まつており、「国際労働組合運動と日本」は中林さんの分担執筆部分である。また研究所へ

入って以降、イギリス留学時など年によって例外はあるが、「労働組合の組織現状と組織運動」、「国際労働組合運動と日本」はずっと中林さんの執筆によるものである。その他、第三六集、第三七集などの第二部、労働運動のいくつかの項目も中林さんが執筆されている。今日、必要があって以前の年鑑を参照する時、中林さんが克明かつ客観的に「事実」を記録しており、きわめて良く眼が行き届いていることに、私などは再三ならず舌をまくことが多い。

『労働年鑑』は現在、八〇年代後半以降の中期的な展望に立って、大きな内容改革期にさしかかっている。この時にあたり、中林さんの洞察力ある改革提言をもちや、うかがうことができな
いのは、誠に残念でもあり、かつ痛手である。

(法政大学大原社会問題研究所教授)

一回だけほめられた労働者から

西村 なおき

中林さんとはまだ木造二階建ての産別会館の二階の隣りあわせの部屋で仕事をしていた一九五三～四年からのおつきあいであった。

五年のソ連の革命記念日に、産別事務局と周辺の勤務員がそろってソ連大使館にお祝いを述べに行った。たしか吉田資治さんの発意だったと思う。その帰りの都電のなかでいかにもしみじみと、三〇歳も半ばをすぎると徹夜がこたえるようになってねえ、と中林さんは私に語りかけられた。これが奇妙に強烈に私の記憶にある。当時、全日本金属は組合員の激減のために私の賃金がしょっちゅう滞る財政状態だったので、私はガリ版を切るアルバイトを書記局の器材を使ってよくやった。それは、夕方たのまれた仕事を翌朝印刷物にして渡すのだから、徹夜をいわば常態とした。私は二一歳だった。そんなときにしみじみと徹夜がこたえるといわれ、強烈に記憶に刻印されたのかと思う。

都立大当時に、全国金属の青年の学習会で中林さんは、臨時工、パートなどの立場に立つこと

の意義を強調され「私も講師、大学の臨時工なのです」といわれた。これがもう一つ、強烈な印象で私の記憶にのこっている。

その小林さんに、一回だけほめられた。

七五春闘のあと、『賃金と社会保障』（六七五号）に工藤光喜の筆名で「企業主義を克服し、国民春闘をとりもどすために」という一文を草した。

七四春闘ののち、日経連は常任代表理事制を改めて、会長、副会長、専務理事制をとったこと。経団連は植村甲午郎氏から土光敏夫氏へ会長をかえたこと。経団連を頂点に日商・同友会・日経連の副会長人事が相互に兼任しあうものとなり、経団連が一つものごとを決めると、財界四団体の意志が基本的に同じベクトルをとる仕組みがつくられたこと。その体制下で、土光氏が自民党への献金に疑問をなげ、日経連トップセミナーで桜田氏が公然と自民党批判をおこなったこと、するとこれに応えて、副総理の三木氏が閣外に去り、保利氏が続き、田中内閣は陣笠のみがのこったこと。まさにそのとき『文芸春秋』が田中金脈をバクロしたこと。以上の事実からして、七四春闘で統一戦線が形成されるような状況を許した植村・山中ラインは、財界奥の院によって首を切られたのだと主張したのである。

これを「いい指摘だよ」とほめられた。のちに早川征一郎さんも何かの論文に私のこの小論の一部を引用されていたから、それなりにマトを射た春闘総括になっていたということかと思つて

いる。

一度、白井泰四郎さんのゼミの学生に調査をたのまれたことがある。内容は、職能給は社会的必然であるということを労働者にいわせるような誘導尋問だったので、職能給の提案を苦勞してはねかえした職場に依頼して、白井さんの思惑とちがう答がでるように仕組んだことがある。中林さんにこういふ協力はつらいですといったら、言下にそういうのはキッパリことわれといわれた。そんなことのあと、嶺さんが私のところにこられた。白井さんのことがあったので中林さんにたずねたら「ぜひ協力してくれ、私からも頼む」といわれた。そこで嶺さんと一緒に工場見学などもしてまわった。のちに「第一組合」となる嶺さんのお仕事のはじめだったように思う。この話、嶺さんには知られなくなかったことだが、学者としてつねに労働者の側に立とうとされた中林さんの考え方をよく示していると思うので、あえて紹介するしだいである。

お知りあいになった頃、賢一さんがうまれておられ、その頃、徹夜はこたえるといわれたこと、やはりあの頃は生活も仕事もいろいろとときつかったのだなと思う。私は一回だけしか中林さんにほめられなかったが、その一回がいまも私をばげましており、これからもきっと私を励まし続けることと思う。

(全国金属東京地本調査部長、労働者教育協会理事・出版委員)

同志は斃れぬ

佐藤 一晴

中林先生の訃報を新聞紙上で知ったとき、驚きとともに、鋭く胸を突いて浮かんできたのは、「同志は斃れぬ」という詩句だった。

「同志」呼ばわりは、おこがましいのかもしれない。こちらの一人よがりでは、先生が知られたら迷惑といわれるのかもしれない。しかし、私にとっては、まぎれもなく「同志」だった。同じ戦線で、共通の敵とたたかっているという実感があった。それだけに、こんどことは、悲しいというより、痛手だった。

中林先生に直接お目にかかるようになったのは、経済学者・故堀江正規氏を通じてである。一九六〇年代後半のことだった。当時私は長期争議の当事者だったから、さきが見えなくなると先生方にぶしつけに御意見を求めたりしていた。

長い争議を通じて、企業内従業員組合主義を克服することこそ、日本の労働組合運動の戦略的

課題だと確信するにいたった私は、堀江先生とたまたまの雑談のおり、ちょっとその考えを開陳したことがある。堀江先生の反応は拒否的で、話はすぐ他に移ってしまった。私はすこぶる落胆した。

ところが一九七一年末、病軀をおしてその堀江先生が組織された学者、労組幹部の研究チーム——そこに中林先生も私も含まれていたが——に示された指針の文章「現代日本における労働組合の機能」の研究は、企業内組合の客観的条件を日本資本主義の奇形的発展形態と労働者階級の意識、社会的慣行から明確に規定されており、私はすっかり嬉しくなって、そのうちぜひ堀江・中林両先生とこの話をしたいと考えた。しかしそれは永遠に実現しないことになる。

長かった争議もやっと終わり、私はこの頃音楽家のユニオン運動に参加して企業内組合克服の実践にとりかかっていた。そして一九七五年四月一日、労働運動史研究会にまねかれ、東京争議団共闘の運動について報告する機会をえた。この研究会の中心メンバーの一人であり、当日司会もされた中林先生からぜひ原稿にまとめると激励され、早速執筆にかかった。なんとかまとめたのが、「東京争議団共闘の十五年」という小論であり、『労働運動史研究』五八号にのせていただき、中林先生はその序文で「こんごの労働運動の発展・強化の道についていくつかの示唆をくみとられるものと確信する」と評された。

この小論は、争議団共闘の運動の軌跡とその成果が示すものは、企業内従業員組合主義の克服



どうどうめぐり研究会（1972年）

過程だ、と結論づけたのである。ものを書くのは本職ではないし、未熟なための言い過ぎや脱線も多々はらんでいて舌足らずでもあったが、自己批判を基礎に運動の内在的批判と再構成をおこないえたのは、さいわいだった。ただ痛恨事は、報告をし執筆に入った直後、七五年の四月一〇日に堀江先生が急逝されたことである。私はなによりも堀江先生に読んでいただきかけたのだ。

四月一九日に千日谷会堂でおこなわれた「堀江正規さんとお別れする会」では、中林先生が堀江さんの経歴を紹介された。中林先生の声調はすこぶる凜としておられたが、ときどき語尾がふるえるのを押さえかねるようにも感じられた。

一九七八年、中林先生は「組織論的視点の再

検討」を提起され、七九年には『現代労働組合組織論』を刊行されて、研究者、活動家に衝撃を与えた。論争もおこったが、私のように現場で悪戦苦闘しているものには、「百万の援軍」を得た思いだった。

一九八〇年から八一年にかけてイギリスに留学された先生は、『イギリス通信』をだされた。この本のあとがきにもあるように、先生の研究テーマは、企業別組織の弱点克服という視点からの労働組合の基礎組織の比較とされていた。

一九八二年、私は民放や映画の先輩・友人とともに、職能組織研究会なるものをはじめた。この会の理論的指導者は中林先生を置いて他にない、というのが議論するまでもない私たちの共通認識だった。先生はこころよく引き受けて下さった。毎回の講師の方々も先生と御相談し、先生の御紹介で来ていただいた。もちろん中林先生御自身でも何回も講演され、毎回のように助言、コメントもいただいた。

また手まえ味噌になるかもしれないが、私がこの研究会をはじめたのは、職能的結集を各産業分野にひろげようということとともに、中林先生をはじめとする研究者のかたがたを、運動の現実で激励し、さらに大胆に論を推しすすめていただきたいという願いからでもあった。この願いは、『日本の労働組合運動』シリーズの第五巻中林賢二郎編集担当の『労働組合組織論』で果たされた。中林先生はこの本の序言的文章や「組織論的視点の再検討」などの論文で、自らもその

執筆者であった堀江正規責任編集『労働組合運動の理論』全七巻（一九六九年）が組織論を正面からあつかわなかった点について、自己反省にたつ内在的批判を加えられている。それは、まさにこの双書刊行後の堀江先生の、さきにふれた「組合機能論」にむいた関心を背負ってのものとおもわれる。

私が中林先生に最後にお会いしたのは、一九八五年四月、「あれから一〇年、堀江正規さんへのぶ会」の席上である。先生はそのとき「堀江正規さん——その人と仕事」という講演をされた。まさかそのあと一年もたたず、中林先生御自身が逝ってしまったられるとは。

なにか因縁めいたものも感じないわけではない。高く、広く、豊かな、堀江山脈、中林水系のさまざまな面のうち、この一つだけは私が受けつこう。といっても理論作業ではなく運動の実践でと考えたりもする。

私たちの属するマスコミ共闘もマスコミ文化情報労組会議と名称もかえ、職種の結集へむけてあらたなたびだちをすることに決めた。いま中林先生に去られたのは、かえすがえすも残念だ。しかしなげくまい。

先生、私にもあと一〇年も残っていないかもしれませぬ。涙は流しませぬ。向こうで堀江先生にお会いになったら、及ばずながら私も、なにほどかのお手伝いはしたとお伝え下さい。なお私はひとりでも、いや、必ずあらたな援軍をえてたたかいつづけることを、お信じ下さい。さよう

なら。

(元東京争議団事務局長・日本音楽家ユニオン事務局次長)

「中林教室」をつくりたかった

栗山 嘉明

「中林先生が亡くなった」という大原社研の大野喜実さんの知らせにびっくり。組合では、失対事業から七〇歳以上の就労者二万五〇〇〇人の排除がきまり、組織の立て直しをせまられている時で、先生の助言を受けたらと相談していた矢先だったからです。

その大野さんも、先生のあとを追うように他界されてしまいました。組合の歴史的資料の多くは大野さんの努力によってまとめられていました。先に湯浅克孝さんを失い、いま続けて二人のよき組合の理解者を失ったことは大きな痛手です。

全日自労が中林先生の援助を多く受けるようになったのは、一九七一年ごろからです。そのきっかけは緊急失対事業法の改悪によって組織的打撃を受け、新たな組織方針を確立する必要にせまられていたときでした。

組合では、①失業者、②高齢求職者、③建設労働者、④下請・中小企業の不安定雇用労働者の結果という四つの組織方向をきめていましたが、これらの労働者をついに団結させる組織形態をどのようにしたらいいか、何回か先生のお宅を訪問して助言を受け、そこでイギリス運輸一般労働の教訓を学びました。

このなかで、国家独占資本主義段階での資本再編、技術革新の進展による産業構造の変化や新しい業種の出現に柔軟に対応していく組織形態、中央本部の機能と産業別部会の運営、労働組合の中央が右傾化しても復元力を示す職場委員(ショップ・スチュワード)の役割を分析しました。

「建設一般」の組織方針はこうして出来上がったのですが、私たちは「産業別結集」という基本原理に、臨時労働者を組織し得ない日本の労働組合運動の現状を考慮に入れ、建設産業別一般労働組合をとりましたが、先生の発想の中には「産業別」組織形態にはそう神経質にならず、資本の政策によってあらわれる新しい労働者層を思いきって結集できる一般労働組合の形態としながら、運営の中で「産業別機能」を発揮していくように考えておられたのではないかと思われるふしもあります(イギリス運輸一般労働は多産業労働組合といってもいい)。

先生には、組合の交流集会や研究会に何回か来ていただいて、講演や助言をお願いし、また酒をくみかわして、私たちの話を聞いてもらいました。なかには「イギリス運輸一般の組織化にはときにはサイの河原の石積みのような時代があった」という講演を聞いた生徒が、「サイの河原

の石はどのように積んだらいいのですか」と質問して、先生を困らせたこともありました。

私には先生との話の中では、二つのことが印象に残っています。ある講演の昼食時に、『一工場（企業）一組合、一産業一産業別組織、一国一センターを』というスローガンは有名ですが、『二企業一組合を』というところで、企業別組合の理論的根拠になっていますが、どう思われますか」と聞いたところ、先生は『を』は『へ』と訳すのが正しく、一つの工場の中にいくつもある組合を、一つの組合に結集していく統一のスローガンで、誤解を受けるように訳した我々に責任があるね』と言われました。私は納得するとともに、たった一字の翻訳のちがいが労働運動に影響を与えることもあるんだなと思いました。

また「企業別組合でも正しくたたかいたかいを發展させれば階級的に強化できる」という企業別組織擁護ともとれる議論がでたとき、私たちの中では「おかしい」という意見が強く、先生とも話しあったことがありました。

石油ショック後の事態の進行は、企業別労働組合という組織のあり方に明解な答えを出していたわけですが、先生はこのとき「これまでの日本の労働組合運動では闘争課題については、かなりつつこんだ研究がされてきたが、組織論については軽視されてきた。研究者の責任として努力してみたい」といわれました。

私たちの、ときにはむちゃと思われる意見が、先生の著書『現代労働組合組織論』として実を

結んだことをうれしく思っています。組合では「建設一般」の立場に立った活動家をたくさんつくる必要を感じ、「中林教室」をつくりたいと先生に相談していたときでもあり、早すぎた先生の死をほんとうに残念に思うものです。

(建設一般全日自労中執・教宣部長)

中賢さん——すがすがしい民主主義者

柳 沢 明 朗

中賢さんは実にすがすがしい民主主義者であった。労旬とは昭和三二年前後から三〇年のおつきあいで、論文・評論など『労働法律旬報』、『賃金と社会保障』をはじめ多数、単行本も七冊をこえる。『世界労働運動の歴史』には、私も担当に参加させてもらったが、＼すでに古典だ＼といわれる名著である。

もとよりそうした学者としての理論的格調や魅力にうらうちされたものだが、私には先生のまごとの人間というか、人格が私たちに残されたものが大きかったと思える。いつだったかの年賀状に、若かった私は＼レーニンのようだ＼と自分の尊敬の思いを書いたことがあった。私ばか

りでなくそんな影響を受けた若者が多い。先生はどうせ、肩をゆすって失笑されただろうが。

ナカケンには青年を夢中にさせるそんな魅力があった。清潔で、実に謙虚だった。何でも知りたいたと挑戦する先生のワクワクする思いが周辺に伝わってくるのだ。若かった私たちにも増した“青年”がいつも息づいていたと思う。

話していると、歴史や時代を、その担い手のことを手品師のように切りとってみせたりするの
に、大先生は、背のびした私たちの“批判”や思いつき、なまいきいっぱいの未熟な見解に真正
面からかかってきてくれた。だから話すといつも楽しく勇気が湧いた。だから社員は皆、ナカケ
ンと仕事をしたがっていた。クセのある一家言をもつ社員たちが、心からそう思った。

“大先生”のクセして、闘争の現場には電話一本で気軽に最優先してきてくれた。たたかう労働者と一緒にいること自体に喜びを持っていることがシカに伝わってきた。“総括だから”とい
つてはだまして、小から大のさまざまな会合に参加してもらった。こんしんの力をこめて、また
心からの尊敬をこめて、ナカケンがたたかいに参加していることが、いまでも鮮烈に浮かぶ。

そのときの姿勢は、露店のギョーザの汚れた店の時代から、やがて、会社も社会も“豊か”に
なってレストランに変わっても一度も変わったことがなかった。高級なワインの飲み方も選択も
できる“貴族”なのに、ラーメンでも世界を語れるネなどといっからかうと“戦友だものネ”
といってくれた。

いまでは笑い話だが、はじめてトラック型の小さな自動車を社が購入したとき、例のごとく川崎が運転して家まで送った。ヒーターなどなくて、毛布をかぶって私たちの話はずんだ。『日本の民主出版も自動車を持ったネ』と私たち以上に先生ははしゃいだ。ナカケンには運動の財産がふえたことがうれしかったのだ。

戦時中、発禁本を高級官僚で税関ノーマークのお父さんのカバンからみつけて読んだ話とか、東京の初空襲警報の時に、ちょうど古本を買ってきたときで、銀行の階段にうつぶせになりながら、願った本を抱いて死ぬるのなら死んでもよいと思った話など、ロマンにあふれた話が自然に口をついて出ながら、リアルなたたかひの激しさ、厳しさも語るナカケンは、青春のまま、生をまっとうしたように思えてならない。先生に育てられた社の『戦友たち』も、それぞれにナカケンをひきついで時代と切り結び、さわやかな民主主義者として生きていこうと思う。

(労働旬報社社長)

組合活動家との議論を好んだ中林先生

芹沢寿良

鉄鋼労働組合運動のなかで書記としての仕事をしていた私は、かなり以前から中林賢二郎先生の労働組合運動の歴史と理論の研究分野における活躍については知っておりましたが、——先生がお書きになった小冊子『学習テキスト・統一と団結』を何回となく読み、多くの組合活動家のみなさんに必読書として勧めたことが思い出されてきます——先生との出会いは、たぶん『労働・農民運動』誌における仕事がきっかけで一九七一年八月に伊豆・長岡町で開かれた「夏の労働学校」に参加した時ではなかったかと思えます。

中林先生の講義を直接お聴きしたのもたしかこの時がはじめてでしたが、「労働貴族と国際労働運動にかんする質問について」答える形式をとった講義は私にとって非常に明解で、そこから労働組合運動における右翼的潮流とのたたかいにさらに確信と展望をもつことができたと思えます。

講義の後の夜の交流会で先生とお会いし、鉄鋼労働組合運動の右翼的潮流をめぐってご意見を伺いましたが、なによりも先生の穏やかで優しく包容力のあるお人柄につよく引き付けられたのを覚えています。

それからときどきお会いする機会に恵まれ、その都度、労働組合運動の諸問題があれこれと話題となり、先生はいつも前向きな積極的なご意見をのべられました。先生の深い歴史と理論の研究成果に裏打ちされた洞察力にはただ敬服するばかりでした。



学部・院生ゼミの合同合宿（1978年）

先生は、私たちのような労働組合運動の実践部隊で働いていた者たちと議論することがお好きであったように思います。それは先生が戦後のきびしい一時期に国際労働運動にかかわるお仕事につかれ、また労働者教育運動にも献身的に参加してこられたキャリアーからきたものではないかと思っています。そんなときの「仲間」に話しかけるような親しみをこめた先生の雰囲気をお忘れできません。

十二、三年前に、全造船機械の小川善作さんや電機労連の石垣辰男さんらの発案で、西武線の沿線に住む労働運動関係者——当然労働問題の研究者やジャーナリストも含めて——が年に一、二回集まり、酒を酌み交しながらの懇親の機会をもとうということになり、中林先生は真先に賛成されました。先生は体調がよければ都

合のつくかぎり出てこられました。そんなときに先生のチニス自慢もたっぷり聞かされたものです。アルコールがまわり過ぎて些細なことではげしい口論がおこなわれたこともいまはなつかしく思い出されます。

私は、このような機会における議論を通して先生のきびしい、頑固な傾向もしばしば見たような気がします。

この西武線沿線の懇親会は、いまでもときどきもたれているとのこと。

鉄鋼労連から労働者教育協会に移った私は、勤労者通信大学や出版部の仕事の合間で先生の多大の御協力をいただき、また統一労組懇など階級的な労働組合運動の学習集会などでお目にかかっていました。

一九七九年四月に私は高知に赴任し、はじめて大学という世界に入りましたが、社会政策の講義を担当するようになったとき、社会政策学会への入会手続きで推薦人となっていただいたのが中林先生と塩田庄兵衛先生でした。学会で高知においていた先生が、温かく激励してくださったことをいまでもうれしく思っています。

高知に赴任してから先生とは学会その他の場所できたまお会いする程度となり、大月書店の『日本の労働組合運動』の執筆に参加させていただいたとき、編集委員としての先生に二、三回お会いしたのが最後となりました。そのさい私たちがおこなった運輸一般の組織と機能に関する

調査と分析について、不十分なものであったにもかかわらず「よい仕事をした」とお褒めいただいたことを忘れることはできません。

中林先生の御遺志を継ぎ、日本の労働組合運動の「戦後最低の状況」を転換させ、階級的民主的な発展のために、研究者の立場からひきつづき努力していきたいと思っております。

(高知短期大学教授)

中林氏との討論

犬丸 義一

私が、中林賢二郎氏と親しく意見を交換し、討論したのは、『労働運動史研究』五一号—一九七〇年一月刊行の『国際労働運動の歴史と現状』の「特集Ⅰ コミンテルンの成立」で、同日本支部を書いたときであった。これは、中林氏の「コミンテルンの成立」を総論に、各国支部の成立をあつかい、日本を私、イギリスを中林氏、フランスを大森弘喜氏、アメリカを平岡真政子氏、の諸氏が担当したものであった。

理論的枠組みは中林氏の論文「コミンテルンの成立」中のⅡ「党建設」の意味、Ⅲ各国支部に

おける「党建設」、IV党形成史の視点で扱われている。とくに、IV党形成史の視点は、ハーム・ダットや、クラグマンの指摘を引用しながら、「レーニン主義の理論をまだ身につけていない革命的諸潮流が、各国でコミンテルン支部を形成したのち、それがレーニン主義党にまず自己形成をやりとげていく苦難にみちた過程の問題に目を向けること」(二三頁)を示していた。中林氏は、何度かの研究会でこの視点を強調し、各執筆者は、それを各自で具体化することを、教示された。私は、一九五九年以来、日本共産党の創立史の研究に取り組んで、いくつかの論稿を発表していたが、理論的視点が定まったのは、この研究会であり、この時発表した、「コミンテルン日本支部の成立」は、私の研究の理論的確立となった。その後、十二年後の一九八二年に『日本共産党の創立』(青木書店)という一書をまとめ得た基礎は、この研究会での中林氏の指導に始まった、といっても過言ではない。史料の山の中での実証的な泥沼から、抜け出せるいと口は、この時の中林氏の理論的示唆であった。

この時は、中林氏の自宅に行き、ずいぶん長時間討論した。私は、困難をあげて、執筆を断ったが、中林氏からは、日本が欠けては、特集の意義がなくなると強く説得され、小林英夫氏の原稿の清書の援助もあって、やっと執筆した、という難産であったことを、なつかしく思い出す。しかもなお、この時の私の論文は、中林氏の提言を生かしているとはいえず、実証的に日本共産党創立の歴史的過程を叙述するの追われる、という限界をもつものであった。理論と実証の肉ば

なれ現象であり、発表後、中林氏から指摘されたのは、その点であり、その後の課題となり、やっと、右の著書で果たすことができたのであった。

この事実を示されるように、中林氏は、常に、理論的にシャープに問題提起をする人であり、労働運動史研究会での中林氏のイニシヤーチヴは、そこにあった、といえよう。塩田庄兵衛氏の人格と中林氏の「挑発者」ぶりとが、ひと頃の労働運動史研究会を支えた、といってよいであろう。中林氏の早逝は、その意味で、大きな損失である。

(長崎総合科学大学教授)

告別のことば

——墓前で朗読にかえて

ゆかわ やすお

中林さん

あなたが亡くなられたのは、ぼくの「最終講義」の日でした。もう十カ月近くもまえのことになってしまったのに、いまだにそのことを実感できません。隣同士の研究室だったけれども、二人とも同じ頃に研究室を去ったために、へあなたはもう隣室にいない、ということを実

際に経験することにならなかったからでしょうか。

去年の十一月頃だったかと思いますが、隣の研究室にも来ておられないようだし、教授会も二回続けて見えなかったようだし、……と、そんなことが気になってお宅へお電話したことがありました。寝てるわけじゃないんですが、声が出にくいので……ということと、病院で検査をうける順番を待っているということをお奥さんからお聴きしました。しかし、その後は、気になりながらも、様子をお聴きすることはひかえていました。もし、へその後の経過はあまり思わしくありません、というような返事をおっしゃったり、お聴きしたりしなければならぬ、そんなことが起きないともかぎらない、そういうおそれの気持がはたらいていたせいでもあったかと思いますが。

そして、一月十一日の晩、最終講義もパーティーもすべて終って帰宅の途次、多くの疲労をおもんばかって同行してくれた息子から、あなたがその日の夜明けまえに亡くなられたということをはじめ聴いたのでした。最終講義まえのわたしの気持に動揺を与えないようにという同僚たちの配慮から、あなたが亡くなったことをあえてわたしに知らせないでいたのだということもあわせて聴きました。

あなたが亡くなったということ聴いて、真先に直観的に感じたことは、奥さんがどんなにほげしいショックをうけられたことか、ということでした。数年まえにあなたから直接お聴きしたことだったかと思いますが、一年に何回か、奥さんの健康のための静養かたがた、一、二泊の小

旅行、あるいはホテル住まいをされるといふことでした。そして、奥さんがどんなにはげしいショックを……と思ったのも、この小旅行の話へ何となくいい話だな〜と違って聴いていた、そんなことも影響したのかもしれない。そして、そんなことをお悔みの挨拶かたがた……と思ったりもしました。しかし、お悔みに行ったときにも、お葬式するときにも、とても言葉に出す元気は出ませんでした。いや、あいさつの仕事として奥さんの顔を見ることができてきませんでした。頭を下げるだけで、意識的に無表情に通り過ぎたんじゃなかったかと思えます。

中林さん、ぼくがこんなことをどれだけ言っても、あなたはもう聞こえない。ぼくはそのことを知っています。しかし、それでも、そのことをすることによって、ぼくはぼく自身をあなたに結びつけている。それだけは確かだと思います。

それから、二年くらいまえのことだったのでしょうか、民主主義にかかわるこんな本があるんですよ、というほどの意味で、一冊のイギリスの本をちょっと見せて下さったとき、ぼくがあなたに著者がどんな人かということをお聴きしたところ、(ぼくも一冊頂戴していながら、まだ読んでいなかった)『イギリス通信』にも出ている人ですが……と言われて頭をかいたことがありました。そして、そのとき、その本のはじめの数ページをせっかくコピーさせていただきましたが、これもまだ読んでいないんです。それから、やはり、コピーさせていたただいたイギリスの詩の朗読のテープも……。そして、ほかに、ぼくがまだ読んでいない本やテープがいっぱいある

わけですが、そのことはまあ別にして、あなたも、ほくも、ヘイギリス大好き」という小児病にかかっているのかもしれない。しかし、お蔭でぼくは、今度、一人旅をするとき、列車のなかで『イギリス通信』を読んであなたと対話し、宿で朗読のテープを聴いてあなたと一緒に英詩を鑑賞できるだろう、そのことを楽しみにしています。

最後に、お詫びかたがた一言。隣同士の研究室にいた頃、とりわけその後半期に、あなたから夕食に誘われながら、授業の準備に追われて（むしろ、追われている）というノイローゼ気味の心理状態のゆえに、お断りしたことが際々あったことをほんとうに申し訳ないことをしたと思っています。お許し下さい。

（法政大学名誉教授）

同僚としての中林さん

土 生 長 穂

昨年の丁度今頃（十一月初め頃）多摩校舎から帰路の車中で中林さんが風邪がなおらないので困っていると言われたことがあった。その時はおそらくご本人もたいしたことではないと思って

おられただろうし、私もありきたりの応えしかなかった。ところが、十一月末頃具合が悪いので今日休むのでよろしくというお電話があり、ふだんお丈夫な中林さんだけにどうされたかと思っただが、お電話のお声はお元気だったので、そんなに大事になるうとは思ってもみなかった。そして、十二月中頃検査のため入院することになったというお電話を頂いたのが中林さんのお声を聞いた最後になってしまった。その時、なんの検査ですかと聞いたところ、それには答えられずに「うかつだったよ」といわれたお声がいまでも耳に残っている。新年早々にお電話したときには、丁度一時帰宅されていたが、電話にはお出になれない状態とのことでお丈夫だった中林さんがそんなに弱られているのかなと驚いたが、しかしそれでもなお大変な事態になるとは思わずそのうちにお見舞いに伺おうなど思っていた。突然の御訃報に接したのはそれから間もなくのことであった。お見舞いに伺えなかったことはいまでも心残りになっている。

中林さんが社会学部にうつられてから十数年の歳月が流れてしまったが、その間いろいろなこととお世話になったり、ご迷惑をおかけしたりした。とりわけ、多摩校舎に移転したのは、一年目は同じクラスの基礎ゼミを担当していたし、二年目も演習を隣りあった教室でおこなって一緒に帰ることが多かったので、親しくお話する機会も多くなった。そのほとんどは雑談の域を脱しなかったが、しかしそのなかでもいろいろ教えられることが多かった。稀には学問上のことや困っている問題について相談したこともあったが、そんな時には中林さんはいつも親身になっ

て考え、適切で有益な助言をしてくださった。その点では、中林さんは本当に頼りがいのある人であった。

多摩校舎から帰るとき、国立でバスの待時間があるときがあり、なにか喫茶店で過ごしたり一、二度ささやかに飲んだりしたことは、忘れぬ思い出である。そして、そんな折りに中林さんはよくお孫さんへのお土産と称してケーキを買われていた。もちろんお孫さんはケーキなど食べられる年齢ではなかったのだが、中林さんによると間接的にお孫さんへのお土産になるとのことであった。中林さんはいつもお身体の弱い奥様のことにいろいろ気をつけておられ、雑談のはしほしにもそのことをうかがい知ることができた。

中林さんは長い間具合が悪かった胃も快癒されて、私などよりはよほどご丈夫ではないかと思っていただけにご急逝が惜しまれてならない。そして、日本企業が本格的に海外への進出を強め労働運動がそれへの対応を迫られている現在、中林さんがご存命であったならば労働運動の新たな発展のためにどんなに大きな役割を果たして頂けたかと思うと残念でならない。連帯運動にたずさわっている私も、この問題にかんじてご教示をうけなかったことを悔やんでいる。亡くなられて一年近い歳月が流れた今、中林さんが社会的にも私個人にとってもどんなに重要な人であったかをあらためて痛感させられている。主のいない研究室の前を通る度にこの扉を開けると中林さんがいつもの温和な笑顔で迎えてくれるのではない、そして、そんな日がもう永遠に來ない

ことをおもいしらされている。

(法政大学社会学部教授)

研究テーマに反映した豊かな人間性

嶺 学

中林賢二郎先生が、突然じくなられた。まったく突然であった。悲しみにたえない。

一二月一八日に、大原社会問題研究所の定例の会議があった。そこでお目にかかるはずであった。風邪をこじらせているという話は何となく聞いていたが、何か気がかりであった。後でわかったことであるが、その二三日後に入院され、あつという間にガンがひろがったとのことであった。亡くなられたとの知らせを聞いて驚き、そして本当にお別れしたのだと感じたのは、一月一七日、法政大学社会学部葬で清楚な花に囲まれた、にこやかな先生と写真で対面した時であった。身近な、そして大きな存在が失われた空虚感のみがある。

御遺族の悲しみもいかにばかりであろう、おくやみ申し上げる。

中林先生とは、学部で十数年のおつき合いがある。詳しく言えば専門は違っても、同じ労働問



法政大学硬式テニス総長杯優勝カップを手に（盛田，中林，江川，岡本）

題を研究している関係上、親しくしていただき御意見をうかがうこともあった。そのようなとき、先生は論文の場合と同じように、論理一貫、確信をもって、複雑な関連を解き明かそうとされてきた。しかし、温かい人柄がそこに滲み出て親しみもてた。冷たい論理ではなく、温かい心情との確な判断で説得されようとした。

一九七六年度、七七年度の二年間、先生は社会学部長の役をされ、私はその補佐役を命じられた。他の大学からは姿を消したヘルメットの人たちが相当数いたこともあって、その対応に神経が休まることがなかったし、また教育に関するアドミニストレーションも、やってみるといろいろな困難があった。この二年間は、週に何回も電話で打ち合わせた。それは夜で、長い時間話し合うこともあった。十分な補佐ができ

たとは思われないが、学部長としての先生は、むずかしい問題に筋を通した判断をなさり、要所では確信をもって自ら責任を引き受けられた。学部長としてなされた決定のいくつかは、ほぼ一〇年後の今日までひきつがれており、学部の歴史のなかに先生の御苦労が記録されることと思われる。

研究者、また労働組合運動のオピニオン・リーダーとしての先生の業績は、まことに大きい。先生は多数の著書、論文を書かれた。世界の労働組合運動史、労働組合の理論、労働組合組織論等の分野で著作を発表された。『世界労働運動の歴史』は、労働組合の活動家などに広く読まれこの問題の教科書的な位置を占めるのではないかと思われる。私自身は、大月書店から出た以前の講座（『講座・労働組合運動の理論』）のなかの、マルクスやレーニンの労働組合論からたびたび教えられたし、労働組合組織論における問題提起に刺激を与えられた。

先生は、西洋史の研究から社会労働運動の歴史に立ち入られたが、マルクス主義歴史観に立ち、さまざまな史実も、また日常の複雑な事柄も、歴史的な展望のもとに位置づけられた。先生の著作における明確な論理も、このようなところに由来しているに違いない。また先生は、戦時、戦後の激動期に研究者として立たれた。壮大な歴史の発展のなかで事柄をとらえる先生の視点は、この経験とも分かち難く結びついているのではないか。先生の現実への実践的関心も、これらのことと関連しているのであろう。『日本の労働組合運動5——労働組合組織論』（大月書

店、一九八五年）を読む人は、間違ひなく先生の強い実践的関心を感じ取ることであろう。この実践的関心が、中林先生の豊かな温かい人間味に由来しているであろうことも、先生の身近に生活した者として疑うことができない。

（法政大学社会学部教授）『賃金と社会保障』一九八六年二月下旬号より

中林先生のこと

——人柄と業績

相田利雄

一月一日の未明、社会学部教授中林賢二郎先生が亡くなられた。あまりに急なことでいまだに信じ難い思いである。残念で仕方がない。

先生は社会労働問題の著名な研究者であり、学部長を勤められるなど学部の中心的存在の一人であった。また社会的には労働組合運動に対する有力な助言者でもあった。

先生は処女作『世界労働運動の歴史』を著わしてから、晩年に至るまで精力的に著作活動をつづけられた。先生の著作はどれも読者を強く意識して判り易く、また事実の詳細な分析をおし、歴史の発展法則を発見するという研究スタイルであった。

先生はまたスポーツマンでもあった。旧制八高時代に全日本ジュニア・テニス大会でダブルスで優勝して以降、テニスは先生の良き友であった。先生は生れからする貴族的な上品さと経験によって鍛えられた峻厳な姿勢を合わせもつ、不思議な魅力の持ち主であった。ワインにまつわるさまざまな話と物事の道理や原則をはずした言動に対する痛烈な批判の聲が、私の耳にこびりついている。そして日焼けした顔でにっこりと笑いかけられると、心がなごんだことを想い出す。

人生の過程で心身ともに人並み以上の苦勞を重ねた先生は、「雑務」の多い大学を、近いうちにやめて、余生はフリーの立場でやり残したことをやりとげ、言いたりなかったことを言い切りたい、と御家族や教え子たちにもらしていたという。だから我々は先生に「さようなら」は言わないでおこう。先生の著作をじっくりと読み直し、行間に隠されている、先生が真に言いたかったことを汲みとり、我々の手でそれをさらに発展させようではないか。

〔法政大学社会学部教授〕『キャンパスライフ』法政大学多摩広報委員会刊、第一〇号より〕

厳しさと優しさと

私の見る中林先生は、いつも若々しく、生き生きとしていた。その先生が永眠されたとは、どうしても納得できない。今でもニコニコと現れて、「やあ富沢君」と呼びかけて下さるような気がする。

いまあらためて思い返すと、私は先生に見守られて育ってきたような気がする。先生は、いつも私に夢と希望を与えてくれた。困難な問題にぶつかると、どちらに進むべきか明確な展望を示してくれた。革命的楽観主義とはこういうものかと、私はいつも感じ入っていた。

先生は、教師が持つべき厳しさと優しさを一身に兼ね備えておられた。先生と私の最初の出会いは厳しいものであった。一九六〇年代末、大学紛争が激しかった頃、私は大学の教職員組合の執行委員であった。伊豆の長岡で開かれた『労働・農民運動』誌主催の第一回労働学校に生徒として参加した私は、中林先生の講演について質問をした。「日本の独占大企業の労働者は、一般的に言って、労働貴族的地位にあるとみなしてよいか」というような問題を、質問用紙いっぱいにぎっしりと書いたものであった。先生は激しい口調でこの議論に反駁した。先生の力いっぱいスマッシュをどう受けとめてよいか、私は目がくらむほどであった。

数年後、先生とはじめて直接に話し合う機会に恵まれたとき、自己紹介をしながら私がこの話をする、先生は言われたものだ。

「あれは富沢君の質問だったのですか。トロツキストかと思って、思いきり反論したのです

よ。その一方で、レーニンのイギリス労働運動論に関する富沢君の連続論文を大学院のセミナーで読み、労働貴族論について勉強していたのですから、面白いものですね」。私たちは大笑いした。とても優しい第二の出会いであった。

一九七四年のイギリス留学の際には、イギリス労働運動のいろいろな側面を見てくるようにとロンドンのすばらしい活動家デアさんを紹介して下さった。先生とデアさんは親密で、資料の交換のほかに、最近まで国際電話で情報交換などもなさっていた。先生は外国の友人もたいへん大切にする人であった。昨年ロンドンでデアさんに会ったとき、先生の活躍ぶりを伝えたばかりなのに、先生の永眠をデアさんにどう伝えたらよいのか、私はなかなか言葉を見つけることができなかった。先生ご自身であれば、このようなときには、英語で詩をつくって書き送るかもしれない、ふと思う。先生は文学の素養も豊かであったからだ（デアさんは、一月二五日付の『モーニング・スター』紙に、つぎのような追悼文を掲載し、先生の死を悼まれた。「弔詞。法政大学教授であられた中林賢二郎氏は、一月一日に死去されました。享年六六歳。デア一家の哀悼の言葉を、しずこ夫人と御親族の方々に送ります」）。

先生はまた、すごい勉強家でもあった。一九八〇年四月から一年間イギリスに留学中、先生は専門領域の学問だけでなく、英語の個人レッスンも受けて、英語の詩などをつくっていたのである。六十の手習いと言うべきか。なんとも旺盛な勉強意欲である。

後進の指導にも熱心であった。私の論文も原稿段階で読み、ご自宅で適切な批判を下さったりした。しかも、そのようなときには、たんに論文のコメントにとどまらず、話題は縦横に広がるのがつねであった。そして、その話のなから私は教えを受けることが多くあった。

『現代労働組合組織論』以降、私は先生の御著書の書評をさせていただくようになったが、何度読み返しても、その深い内容は十分に汲みつくすことができず、またいつ読み返してみても、先生の主張はその時々で生き生きとしていた。

いまあらためて先生の御著書を手にするとき、私は先生のあたたかさを肌を感じる。先生がここに生き続けていることを感じる。ニコニコしながら、「頑張れよ」と言っている声が聞こえる。

(一橋大学教授) 『賃金と社会保障』 一九八六年二月下旬号より)

中林君との奇遇

矢嶋悦太郎

中林賢二郎君がわが国労働組合運動の学問的指導者であることは、余りにも有名である。この

点については、多くの人が同君の功績を讃え、いろいろ紹介されるだろう。私はここで、忘れがたい思い出である同君との奇遇について、少しだけ述べておきたいと思う。

中林君との最初の奇遇は、昭和五十二年に鹿児島大学で開催された学会へ偶然に同行したことである。その日たまたま私は同君と羽田空港で一緒になり、全日空のトライスターに乗り、二人だけで鹿児島まで行った。飛行機が早く着いて時間が十分余っていたので、同君と相談し、更にタクシーを雇って桜島を見物した。同君と私とは年輩が違っているのでこれまで余り深く付き合うことがなかったのだが、この日は一日中同行している話し合い、同君の稀にみる優れた人柄にすっかり魅せられてしまった。中林君が中学生の頃テニスの全日本ジュニア・チャンピオンになったことも、この時はじめて知った。桜島での一日は懐かしい思い出で、私はこの時一緒にとった写真を今でも大切に保存している。

私は以前から長野県の蓼科高原にささやかな別荘をもっており、毎年夏をここで過ごすことにしている。昨年の夏、蓼科高原のバス停でバスを待っていたら、思いがけなく中林君に出会った。同君は三年前、ここの城の平という場所に別荘をもたれ、そのとき、友人の車を待って一緒に帰るところだった。私は数年前に学界を引退し、社会政策学会の定期大会にも出席しなかったので、近頃同君と会わず、このことを全く知らなかった。聞けば同君は身体の弱い奥さんのために、健康地に温泉付きの別荘を求め、結局この場所を選ばれた。その日は同君とそこで別れた。



矢嶋先生御夫妻と（1985年、蓼科にて）

翌日私は花の好きな家内のために、村の人に頼んで沢桔梗の群落地を案内してもらったが、その途中でまた偶然にも中林君に出会った。中林君も花の愛好家で、この花の群落地は同君の別荘の近くにあった。そこで私は村の人を帰し、同君にそこへ案内してもらった。そして、勧められて同君の別荘へおじゃました。全くの奇遇である。

中林君の別荘は、北八ヶ岳の奥深い、しかし見晴らしの良い場所にあった。立派な別荘の廻りには、オダマキやフシグロセンノウなどの高山植物が沢山植えられており、また白樺の苗が何本か大切に育てられていた。中林君は御夫妻とも花が大好きで、ここに別荘をつくられたのもそのためであった。ここの高山植物や蓼科周辺のいろいろの土地のことなどについて、私達

の間に話はずみ、尽くるところを知らなかった。ただ同君は生憎所用があつて翌日帰京される。それで、折角山でめぐり会つたのに、僅か一日でまた来年会うことを約束して別れた。その時知つたのだが同君は今年六十六歳で、やがて法政大学を定年退職になる。その後は蓼科高原にゆくり滞在して、この地の生活を娛しむと言つておられた。私も今年から大学勤務をやめ、今後は蓼科高原に籠つて念願の本を書く予定である。小林君は私より十二歳若いし、スポーツマンでもあつて長生きするだろうから、今後はここで同君と長く親しい付き合いをすることが出来る。私はこの地に良い友を得たものだと思ひ、蓼科高原の今後の生活が非常に娛しみになつた。

ところが、今年の正月、私がロスアンゼルスLos Angelesの長男の所に行つていたとき、日本から送られてくる日本経済新聞に小林君の死亡記事が載つているのを見て、一瞬眼を疑つた。昨年の夏に同君との幸運な奇遇をよろこび、老後の娛しい付き合いを期待していたのに、当時の奇遇がそのまま同君との御別れになるとは、誠に残念である。私はしばらく呆然としてしまった。早速私はロスアンゼルスから奥さん宛に弔電を打ち、深く同君の冥福を祈る他はなかつた。

第三通信

高橋 彦 博

先生の社会学部葬の日の前夜から暁方にかけて、私は市ヶ谷の大学の周辺で、徹夜の学部長会議に出席していました。学費値上げ問題で、いまだき珍しい「大衆団交」を開く一歩手前の状況へ、大学は追いやられていたのです。さすがに、大学人としての良識と、冷静な判断力を保持されていた若手同僚達の努力で、この危機は回避されました。あのとき、あのままズルズルと「大衆団交」に入っていたら、今頃、法政大学多摩キャンパスの「自主管理体制」はどうなっていたか、思い出すと慄然とします。

その徹夜の学部長会議の席上で、便箋に走り書きしたのが、社会学部葬における学部長名の申辞でした。ずいぶんと異例の内容になっていると思いますが、あの場合、あのような形で、ふだん、先生について考えていたことを心情吐露させていただくほかに方法がなかったのです。失礼の段、ひらにお許しください。

社会学部葬における弔辞を、私の第一通信とさせていただきます。『賃金と社会保障』（一九八六

年二月下旬号)の「追悼」特集欄における私の発言「伺っておきたかったこと」は、私の先生への第二通信でありました。

第二通信で、私は、先生にご教示いただきたかった労働問題に関する三点ほどの論点を挙げさせていただきました。先生のゼミナールの出身である梅田俊英氏の「現代社会問題研究の課題と方法」(『大原社会問題研究所雑誌』一九八六年七月号)は、私の先生への疑問提出に対し、梅田氏が先生に代わって答えてくださったように読みました。先生、ご安心ください、先生の「お弟子さん」たちは、相変わらず、ワイワイ、ガヤガヤと、賑やかに勉強をつづけているようです。

本日のお便りは、私の先生への第三通信になります。先生の『イギリス通信』のような、実証主義にもとづく歴史家としての通信を意図しているわけではなく、例によって、思い付きが先走る軽薄な議論の、しかもその予告篇だけをお聞かせしようとしているわけですから、そのつもりで、ちょっとだけ、耳を傾けていただければ幸いです。

今年の夏は、二週間ほど、東京を離れて、集中して本を読む機会を作れました。そのとき思い付いたのは、次のような新たな議論の展開です。

先生への第二通信で、「私は、ある方向の運動の低迷は、その方向を示唆した分析と理論の不完全性からもたらされたものであると認める率直さを、われわれは持つべきだと思ふ」と述べました。この論点は、労働問題の領域に限定される性格のものではないのでしょうか。日

本の戦後政治史関係の本をまとめて読みながら私が思い付いたのは、ちょうど、衆参同日選挙の結果が出た直後であったこともあり、われわれは、保守対革新の対抗図式が終わったとされるこの時点で、われわれなりの「戦後政治の総決算」をすべきではないかということでした。

革新派を評価する立場で議論をしてきたわれわれは、階級的民主的労働組合論についてだけでなく、たとえば、革新自治体の崩壊因について、あるいは、高度経済成長過程の把握について、いま、それなりの理論的総括をすべき時機に立っているのではないか、と私は考えるのです。朝鮮戦争開戦経過の事実認識とか、六〇年安保闘争の大衆運動の戦後史への位置づけとかについて、われわれの理論的整理にはずいぶん不備があったように思われます。

そのうち、これらの論点について、私なりの思い切った議論を展開してみようと思っ
ています。私のそういう議論を、私の先生への第四通信、第五通信として受け取っていただければ幸いです。その際、先生からのご批判をいただけないのが残念です。

私の先生への第三通信を、先生を追悼する議論展開の予告篇として終わらせていただきます。

(法政大学社会学部教授)

ある夏の日の中林先生

久松 妙子

二時限目の終了チャイムが鳴り終わる頃、静かだった校内には学生たちのざわめきが広がり、資料室も授業を終えた先生方の出入りで、にぎやかになります。

中林先生も、授業のある日はよく資料室にお見えになって、私共と一緒に昼食の時間を過ごしておいででした。

或る日、先生はいつものようにコーヒーとサンドイッチを召し上りながら、「この間、しばらくぶりでテニスをしてね……。ずい分やっていたのに結構打てたよ。昔やったことは憶えているものだね」と、再びラケットを手になされた想いをかみしめるように、しみじみとおっしゃいました。

先生が、高校・大学時代にテニスの選手として、数々の賞を獲得なさったことは有名ですが、戦後はお身体を悪くなさって長い間、テニスから遠ざかっていらっしやうたということですから、感慨もひとしおだったのでしょう。

その翌年の頃、先生は「夏休みになったら、みんなてテニスをやりましょう」とおっしゃって、先生が入っていらっしゃる立川のテニスクラブのコートを借りてくださいました。その日は七、八名が集まり、早速、テニスウェアに着替えてグラウンドで練習開始です。

テニスは、はじめての盛田先生、江川さん、片野さん、私など初心者、先生をお手本に、まづラケットの持ち方から入りました。次にフットワークを交えながら素振りの練習です。先生はかけ声をかけながら、基礎は大切だからと一人一人のフォームに目を配って下さいました。

となりのコートでは、広田先生と寿福先生ご夫妻が、先生の坊ちゃん（コーチの応援として参加して下さいました）と、ネットをはさんでストロークの練習に余念がありません。

初心者の私たちも、何とかラケットで球を打ち返せるまでになりました。

西陽の差しはじめたグラウンドをあとに、帰る道々、先生が「よかったら家に寄っていらっしやい」と誘ってくださるので、みなで邪魔しました。ビールで乾杯して、奥さまが用意してくださったテーブル一杯のご馳走をいただきながら、練習の感想など話はずみました。

先生も、今日の練習の成果にニコニコされて、とくに盛田先生の上達ぶりには目を見はり、「盛田君はほんとうにはじめてなの？ それにしてものみこみが早いなあ」と、しきりに感心していらっしやいました。

この日をきっかけに、学部内のテニス熱は高まる一方で、先生の指導を受けにコートに通う方

や、地域のテニスサークルに入って腕をみがく人等々。

折りからのテニスブームで、昼休みの話題も先生を囲んで試合のことなどにぎやかでした。学内でも、学部対抗のトーナメントがさかんに行われるようになりました。

社会学部は、先生方の活躍で何度も優勝カップを持ち帰るほど、実力派に成長しました。日焼けしてお元氣そのものだった先生とすごした、十年余り前のあの夏の日のことは、いつまでも忘れられない懐かしい思い出です。

友情

堀江 鈴子

私が中林賢二郎先生を存じあげるようになったのは、堀江正規が亡くなってから後のことでした。七五年四月十九日の堀江の告別式のアルバムに、ひどく悲しそうな顔をなさった中林先生のお写真が残っております。そして、この年から毎年、堀江の命日の四月十日には、生前親しくしていただいた方々が私の家に集まって下さるのが慣例になりました。お世話役の辻岡先生とお話し上手な中林先生が中心になってくださるのです。中林先生はお宅がご遠方なのに、いつもおそくまで賑やかにつとめて下さいました。八一年四月、中林先生は留学先のイギリスからお帰りになったばかりでお忙しいから、今日はお見えにならないだろうと思っておりましたところ、夕方になって、いつものにこやかなお顔でわが家に現われて下さいました。うれしゅうございました。

堀江の著作集が編集された頃は、編集者のお一人としてしばしば相談会にいらっしゃって下さいましたが、あるときの会で、著作集の解説の中で堀江を何とよぶかが問題になり、「堀江先生」

「堀江さん」など賛否の議論がつづきました。ずっと沈黙していらっしやった中林先生が突然、「早く堀江さんと呼びたいよ」と仰言ったのには驚きました。そのおっしゃりかたが、いかにもその議論によって堀江への先生の自由な思いがさえぎられてしまっているかのような、そしてそれを悲しんでいらっしやるかのような、そのお声の調子は十年余り過ぎたいまも、私の耳もとに残っております。

七六年の秋頃でした。中林先生にお目にかかった折おっしゃいました。「堀江さんの原稿を編集者が僕に返してくれました。見にいらっしやい」と。先生ははっきり「見にいらっしやい」とおっしゃいました。私はそのお言葉どおり原稿を見せていただきに先生のお宅へ伺いました。

それは中林先生の『労働組合入門』を書評した堀江の原稿でした。七四年十二月号の『学習の友』に載ったものでした。この書評は堀江が自分から志願して書いたもので「たたかう労働者としてせひとも知っていなければならぬ問題のすべてが、理路整然とのべられている。これほどよくできた入門書はめったにない」と、堀江は賞讃しています。その堀江の原稿が、黒い表紙のクリアブックに一枚一枚ていねいにおさめられていました。当時すでに眼を悪くしていた堀江がサインペンで書いた大きな字の原稿でした。その原稿と私を残して、中林先生は部屋をたち去っていらっしやいました。

あとに残された私は、その原稿の前に、ただ涙、涙、その大きな文字もたどることはできませんでした。やがて私の涙もおさまった頃、先生は部屋に戻っていらっしやいました。そして静かにお茶をいただきました。二人とも無言のままです。

八〇年の春、先生からロンドン大学にご留学のことを伺いました。そして先生は、「あちらでは家を一軒借りますから遊びにいらっしやい」とつけ加えなさいました。

一瞬、げげんに思われたそのお言葉の意味がわかったとき、私はまったく驚いてしまいました。なんとなくあとに残されるような者への、先生のなんとやさしい御配慮でしょう。先生のあのまろやかなお声とともに、「遊びにいらっしやい」とおっしゃって下さったおことばを私は生涯忘れないでしょう。

先生は堀江の五年忌、七年忌にもいつも記念になるお話をして下さいましたが、八五年の十年忌には堀江について、「その人と仕事」と題してお話し下さいました。そのなかで、堀江が自分について書き残した少しの文章と、先生がお調べになった当時の社会的背景とによって、堀江の青年期の思想形成のあとをたどり、それにつづく彼の精神的苦闘と、その発展とをいねいにたどって下さいました。中林先生の堀江に対する深いシンパシイの感じられる文章です。先生は、

ご郷里であり、お好きな海のみえる横浜にわざわざ滞在なさって、この一文をおまとめ下さったのだと奥さまから伺いました。

そんなにまでしていただいて、中林先生、ありがとうございました。

中林さんのこと

高木 督 夫

変ないい方になるかもしれませんが、中林さんの訃報を聞いたとき、心に浮かんだのは「彼が生きていたらどんなふうに答えるかと考える場合が、これから度々あるだろうなあ」という思いでした。事実、労働運動をとりまく情況が厳しさを加えるなかで、このような感慨にふけることがしばしばあります。

実は、同じような思いを過去にも一度経験したことがあります。一九七五年の春、堀江正規さんがなくなられたときのことです。堀江さんは中林さんの師に当たる方だし、中林さんは戸木田嘉久さんとともに堀江さんの高弟、正統的な継承者と目されていた方です。私にとっても堀江さ

んは師でした。私が師として仰ぐ方は何人かいますが、そのなかで最も強烈な影響をうけたのが堀江さんです。

といっても、堀江さんから具体的に論文執筆上の指導をうけたという経験はほとんどありません。研究者とすれば当然のことかもしれませんが、私には時々理論的に不安になる、あるいは自分の考えが疑問に思えて仕方がなくなるといった癖みたいなものがあります。不安や疑問が高まってくる、よく堀江さんに会いに行きました。そうして質問というか、議論を吹きかけました。随分失礼なことをいった記憶もあります。堀江さんはいつも強靱な思想に支えられた原則的な理論で対応してくれました。いまでも、有難いことだっただけです。私が曲りなりにも研究者としての道を自分なりに歩んでいくうえで、堀江さんの折々の陶冶が大きな支えになっていることは疑いありません。

中林さんのことを書きながら、話が堀江さんの方に移ってしまいました。実は私には中林さんと堀江さんが二重写しになって見えるのです。堀江さんは一九六九〜七〇年『労働組合運動の理論』全七巻（大月書店）を責任編集され、そのために命を削られました。

中林さんは一九八五年、堀江さんの講座を継承した『日本の労働組合運動』全五巻（大月書店）の最高責任者として骨身を削られました（ちなみに私はこの二つの講座に参加した一人です）。そうして二人とも強靱な思想の持ち主であり、最後まで人民解放の立場から理論構築を続け、わ

が国の正統的な労働運動の理論に大きな貢献をされました。

しかし、私にとっては、お二人の共通性は右のような公的なことだけではありません。堀江さんの場合と同様、理論的な不安や疑問が高まると、私はよく中林さんに質問をしたり議論を吹きかけたりしました。いろいろな機会がありました。回数も多くいちばん記憶に残っているのは国電中央線の中です。中林さんが国分寺、私が東小金井ですから、都心との間にはかなりの時間があるわけです。

電車内での論議は多岐にわたりましたが、やはり労働組合運動論、ことに組織論をめぐってのものが印象に残っています。中林さんが雑誌で私を含めて何人かの研究者を、きわめて紳士的にかつ痛烈に批判された点も論議の種でしたし、全民労協や統一労組懇をめぐる理論問題も、また場合によっては、労働組合をめぐる生臭い話も論議になりました。時には早口のかなり激しい応酬になった記憶もあります。

中林さんは、堀江さんがそうであったように、理論的原则を正確にふまえ、歴史的長期的な視野をもってものごとを把握する方でした。中林さんのおかげで自分の理論の未熟さや不十分さを反省させられた点が随分あります。そういう意味では、中林さんは私にとって、まさしく堀江さんの後継者だったわけです。いいかえると、なによりも信頼できる研究者であり、研究グループに原則的観点にたつ指針を提示できるすぐれたリーダーでした。いまさらながら、冒頭に書いた

感慨が身にしみます。

中林さんを失って本当に残念です。

(法政大学工学部教授)

ご遺志をうけついで前進を

辻岡 靖 仁

中林賢二郎先生が亡くなられて、すでに九カ月。先生のを追うように大野喜美さんも。

『日本の労働組合運動』第五卷「労働組合組織論」の第一論文が中林先生、第二論文が大野さんである。

改めて同書のページを開きながら、人間のいのちのはかなさに、しばし、ため息がでることを禁じえない。

同書が出された日は一九八五年六月一〇日。わずかに一年三カ月前のことにすぎない。

『日本の労働組合運動』全五巻は一五名の編集委員の共同責任のもと、八三年秋から八五年春にかけて八〇回に及ぶ研究会を開催、その成果を集約し、編集・発行したのだが、その代表世

話人が中林、戸木両先生と私の三人。そして、中林先生は代表の代表であった。中林先生は自ら進んで、数多くの研究会に出席され、討論の指導にあたった。また、先生は、ご自分の原稿執筆のほか、「刊行にあたって」の起草、全五巻のすべての原稿に目を通されて適切な助言をのべる、などシシフンジンの活動をされた。

この間、私は先生から多くのご教示を得ることができた。

先生は、対話を楽しむという、すぐれた資質をもっておられた。紳士的で、静かなかたり口の中に、青年の情熱をあわせもっておられた。先生は、相手は誰であろうと対等・平等。私のような、はるか後輩で浅学のものにも、わけへだてなく論争をいどまれ、自説を情熱的に展開された。私もそれにつられて、しばしば反論を試みたが、そのつど論ばくされた。

私が先生から学びとったのは次の二点。

第一は、労働組合運動の理論的把握にあたっては、つねに社会変革をめざす労働運動の一構成部分としての観点を堅持しつつ、しかも、それに解消することなく、労働組合運動プロパーの問題を独自の追究する視点をもつこと、第二は、労働組合運動の歴史的叙述にあたっては、あくまで実証的で、正確なものでなければならぬこと、である。

八五年五月はじめ、全五巻の編集を無事に終了し、中林・戸木両先生と私の三人は、ささやかに祝杯を上げながら「九〇年代のおそくない時期にもう一度、まとまった理論的作業を」と話



労働運動史研究会メンバーと

し合った（この点、戸木田先生起草の「あとがき」に明記）。だが、中林先生はもういない。

先生を失ったことは、わが国の労働組合運動の発展と、それに寄与する理論陣営にとって、あまりにも大きな損失である。

だが、私たちは、それをのりこえて前進しなければならぬ。

あれから九カ月たった今日、中曽根反動政府は自民党三〇八議席を背景に「八六年体制」を豪語し、「戦後政治の総決算路線」の一層の推進を図り、それに呼応して、全民労協を軸にした労働戦線の右翼再編も、さらに急ピッチに進行してきている。

私たちは先生のご遺志を受けつぎ「独占資本と、それに癒着した労働組合運動の右翼的指導勢力の企図に対抗して、労働組合運動の企業

別・資本別分断、資本への癒着を克服して、組合運動を真に労働者階級と国民の利益にそって発展させる」(第五卷、中林論文) ために、政策論・組織論の両面にわたる課題の解決へむけ、理論的・実践的に一層の前進をなしとげなければならない。

幸い、中林先生の展開された組織論の方向にそって、統一労組懇は八六年総会で「一〇〇〇万人運動」を提起、広範な未組織労働者との対話運動・組織化運動に本格的に取り組むことを決定した。

私たちは、これに協力し、その成功に寄与する理論活動を一段と強化することによって先生のご遺志にこたえなければならない。

(労働者教育協会理事長)

中林賢二郎さんの思い出

北 田 寛 二

中林賢二郎さんにはじめてお会いしたのは、講座『現代日本のマルクス主義』の執筆の打ち合せであったか、それとも労働者教育協会の集会のときであったか、いずれにしても一九六〇年代

の半ばごろのことであった。

それ以後、『労働組合運動の理論』『現代の労働組合運動』『堀江正規著作集』『日本の労働組合運動』などの編集にかかわる会合や研究会で度たびお目にかかる機会を得た。

中林さんからはこの二〇年を通じて、ヨーロッパの労働運動の歴史や実情について、また現代日本の労働組合運動の諸問題について、とくに組織問題に関して教えていただいたことは数限りない。

とくに印象にのこっているのは、労働組合の政党支持の問題についての第二インターナショナルのシュトゥットガルト決議に關してである。

現在でもまだ実践的には解決されていない問題であるが、労働組合の機関決定による特定政党支持の是非をめぐって、六〇年代から七〇年代にかけて、はげしい論争がつづき、総評をはじめ総評傘下の主要単産の大会では毎年のようにこの問題が論議の的となっていた。

労働組合の社会党支持を正しいとする論者のうちのある人びとは、社会党がマルクス主義政党たることをめざしている社会主義政党であり、労働組合が機関決定で社会党を支持するのが当然であると主張し、その論拠に一九〇七年の第二インターナショナル・シュトゥットガルト大会の決議とそれに対するレーニンの評価をあげていた。

周知のようにこの決議は社会主義政党と労働組合の関係について、「一致した共同活動によら

なければ成功をおさめることのできないプロレタリア階級闘争の分野が存在しており、たえず拡大していること」を確認して、「労働組合と党組織との関係が緊密であればあるほど、プロレタリアートの闘争はそれだけ効果的になり、有利になる」ことをのべていた。レーニンはこの決議を「労働組合の政治的中立」を否定するものとして高く評価したのである（レーニン「シュトゥットガルトの国際社会主義者大会」）。

このシュトゥットガルト決議が「特定政党支持」を肯定しているものでないことを、中林さんは折にふれて指摘しておられたが、それをまとまった形で発表されたのは、『労働法律旬報』の一九七四年九月下旬号であった。それには次のように述べられていた。

「日本では、第二インターナショナルの各大会でどんな論議がされたか、ほとんど誰も知らないから、そんなデマゴギー的な主張も一時的にはったりがきくようなものの、事情にくわしいヨーロッパの階級的労働運動内でそのようなことを主張すれば、ものわらいの種をまくだけである。というのは、シュトゥットガルト大会では、組合を政党の支持団体にすべきだといふベルギーやスウェーデンの代表の主張が拒否され、労働組合は政党と組織上のつながりをもつべきでなく、事実の上で協力関係に立つべきだという主旨で、あの決議が採択されたのだから、わが国の特定政党支持論者のような解釈は成り立つわけがないのである」。

この中林さんの論文の発表以来、すくなくとも、シュトゥットガルト決議を論拠として、労働

組合の機関決定による社会党支持を正当化する主張は力を失った。

当時、一部の論者が、マルクス主義政党たることをめざす社会主義政党であると主張した社会党と、社会党一党支持の総評指導部が、今日どのような道をたどっているかは周知のとおりである。

(労働者教育協会副会長 一九八六・九・二五)

中林さんとの出会い

竹内真一

中林さんとの出会いは、いつのことだったのだろうか。

一九六六年三月に、青木書店から『統一戦線』(『現代日本とマルクス主義』第二巻)がでてくる。その執筆者の終わりに、中林さん、田沼肇さん、重富健一さんらの諸先輩とならんで、私も名前を連ねている。はっきりしていることは、それだけである。

しかし、中林さんとの出会いは、もっと以前のことだったように思う。国鉄労組の中央労働学校であったか、労働者教育協会であったか。おそらく、後者でのことだったのだろう。対という

より、これはいつものことだったが、会合のなかでお知り合いになったように思う。だから、中林さんのおつきあいは、安保闘争後に始まったと考えてまちがいない。

『現代日本とマルクス主義』は、私の狭い知見によれば、一九五〇年代前半に岩波書店から出版された「資本主義講座」以来久方ぶりに、マルクス主義研究者が集団でまとめた講座であった。それから大月書店発行の『労働組合運動の理論』（一九六九～七〇年）にかけての時期は、革新民主勢力の昇り坂の頃であり、堀江正規先生を囲んでの研究討議も熱を帯びたものだった。中林さんとひんばんにおつきあいたいだいたのも、この頃のことだった。

すでに、警職法闘争に關する『思想』誌上の論文でそのお名前は存じていたが、中林さんから直接有益な助言をうけたのは、『労働組合運動の理論』で「婦人労働者と労働組合運動」の執筆を引き上げたときだった。この章ははじめ青年・婦人を同時にあつかう予定だったが、途中で婦人だけに変更になったので、どこから筆をおろすかでずいぶん悩まされた。そのあげく、中林さんを国分寺の飲み屋か喫茶店へ御足労願って、職業別労働組合から産業別労働組合への移行と婦人労働者について短い講義をいただいた。最後には、少しビールもはいて、いい気持ちになって帰宅したことを記憶している。このときいただいたヒントが、章節構成のうえでたいへん役にたった。あまりいい比喩ではないが、堀江先生をマルクス的だとすると、中林さんにはどこかエンゲルスの味があった。

中林さんもお酒がすきで、アルコールがはいるとおおいに談論風発する方で、レッド・パージ後の試練と苦難をくぐりぬけてきただけに、ときにはなかなか頑固で、特に、全造船の小川さんとの口角泡を飛ばす大激論は、労働組合運動の古強者ならではのものがあつた。ああいう剛直な議論は、最近ではあまり聞かれなくなった。と同時に、中林さんはやはり「紳士」であつた。堀江先生も衣食にはずいふんとこつていたが、中林さんの日常のパーフォーマンスもなかなかのもので、テニスの腕はもちろん、在外研究先のイギリスでの日常生活には、他人の追隨を許さないものがあつた。

戦後、社会政策学会が労働組合研究の中心だつたこともあつて、日本の労働組合研究者には経済学分野が多く、その研究成果が労働組合運動に裨益したところが大きい。しかし、労働組合研究がそれにつきるものでないのは、もちろんのことである。労働組合研究が経済構造主義的な狭さに陥らないためには、政治学、社会学、歴史学をふくめた学際的な研究が必要なことはいうまでもない。奇しくも私は、中林さんのイギリス滞在と一部時期を同じくしてイタリアで在外研究をつづけ、イタリアからみた西欧の労働組合運動についていくつか知るところがあり、その一部を『経済』の「世界と日本」欄に書いたこともあつた。そのこともふくめて、労働組合研究の方法について中林さんと「剛直な」議論をお願いしたかつたが、それもいまでは叶えられぬ夢となつた。

(明治学院大学教授)

大阪の労働者教育と中林賢二郎先生

吉井清文

大阪における労働者教育の分野で、中林賢二郎先生は、労働組合とその歴史の研究者としてきわだった役割をはたしていただきました。その第一にあげることのできるのは一九六五年に先生がだされた『世界労働運動の歴史』上・下二巻（労働旬報社）をとりあげた学習です。関西労働学校の一教室として、この著作をテキストとする学習がおこなわれたわけです。

一九六〇年安保闘争のあと、ケネディ・ライシャワー路線を軸とする労働職線の分裂と右傾化がすすみ、原水爆禁止運動でも意見の対立が表面化していくような状況のもとで、中林先生は労働組合運動発展の法則性を活動家につかんでもらうことの重要性をつよく意識され、労働者にとりつきやすい形の歴史書をと、精力をつくされたようです。分裂と右傾化の一中心地であった大阪で、わたしたちはこのような先生の意図を積極的な共感をもってむかえることができ、テキストにとりあげることになりました。各国の運動史の一貫性は犠牲になるけれども、労働組合発展の法則性を大きくつかませることに重点をおくということを書かれたこの学習の学習は、同じよ

うな主旨のもとに同じ時期に同じ出版社からだされた塩田庄兵衛先生の『日本労働運動の歴史』をテキストとする学習とならんで、大阪での労働組合の階級的民主的強化をになう活動家の養成に大きな足跡をのこしたわけです。

中林先生の御功績としてもう一つ大きくのこっているのは、『労働組合入門』（労働旬報社、一九七四年初版）がテキストとしてくりかえしとりあげられたことです。これは重版がつづいているように、わたしたちの分野では今日もなお類書の白眉として現役書にふくまれています。これを取りあげた講師や事務局の人たちをとくに感服させているのは、政党と労働組合の關係の緊密さをめぐる論議の解明のためにおこなわれた先生の海外での研究（第二インターナショナル・シユトットガルト大会での論争議事録の研究）の成果がこの作品で紹介され、混迷が一挙に払拭されていることです。担当講師の一人であった猿橋真氏（統一労組懇代表委員）は——こんな大事な研究成果を学術論文にしないで、実践部隊の入手しやすい入門書にとり入れてもらって——と感嘆の言葉を惜しんでいません。

中林賢二郎先生とは労働問題の研究や執筆、普及の面でも、直接に交流し御教示をうける機会をもつことができましたが、先生ののこされた印象はきわだった誠実さ、理論的な一貫性へのつよいこだわりだったように思います。そして先生はそれとあわせて日本と世界の労働者階級が闘争の渦中でしめす戦闘性や連帯心へのあふれんばかりの心情的な共感をいつもかくそうとはされ

ませんでした。労働者のしめす「ひよわさ」についても、それを歴史の制約としてとらえておられ、われわれのまわりにしばしば散見されるようなこの階級への不信は、先生には全く無縁だったのではないでしょうか。先生が歴史を本当に深くつかんでおられたことの、これは一つの表出だったように思います。

とくにわたしがよく印象づけられたのは『堀江正規著作集』の編集作業でしめされた、先生の理論面での一つの誠実さでした。堀江正規著になるマルクス『労働組合——過去・現在・未来』の解説の中で、マルクスの原文にたいする解釈に、先生は一つの疑義を表明されました。先生は、たんなる膨大な著作からの選択と配列という編集作業のわくをこえて、その内容の是非、評価についても、編集者集団の責任をできるかぎり全うされようと思われたのでしよう。大阪の労働学校で、最近この堀江正規さんの解説書をテキストにとりあげた講座を担当する機会をあたえられました。当該箇所での中林先生の指摘をあらためて検討してみても、妥当なものであったといえるように思います。

このようにふりかえてみてつよく感じるのは、先生の御逝去があまりにも早きにすぎたということです。労働問題研究の数少ない大ベテランが六〇にかかられたところで逝ってしまったわかれるというのは、なにか強引に大切な方をつれ去られてしまったという印象をまぬかれません。

大原社研の一員でもあられた先生は、直接に先生の名を冠した著作を数多くのこす機会をおも

ちにならなかったようです。先生の謙虚さと慎重さも多少はあずかっているのでしょうか。しかし歴史に対してできるかぎり謙虚にのぞもうとされた先生の、数少ないかもしれない御労作は、あらためてよみかえし研究してみる必要があるものではないかというのが、この「思い出」を書かせていただいたうえで痛感していることです。

(関西勤労者教育協会会長)

プロフィンテルンの「社会保険についての決議」をめぐる

坂 寄 俊 雄

中林さんには研究上で三〇余年大変お世話になった。特に、プロフィンテルンの一九三〇年第五回大会での「社会保険についての決議」をどう評価するかについて問題を話して意見を直接きき、また、梅田美代子訳『プロフィンテルン小史』での中林さんの「解説」を参考にさせていただいた。

二人で話しあった主要点は、この決議を各国の労働組合運動とのかかわりでどう評価するかということであった。それはこの決議で、「第五回大会は、社会保険が労働者大衆の生活のなかで



大原社研の懇親旅行（1968年）

果たしている大きな役割にもかかわらず、大部分の国でプロフィンテルンの擁護者が社会保険にこれまで必要な注意をはらってこなかったこと、またこの問題にかんするプロフィンテルン第三回および第四回大会の決定を實踐してこなかったことを確認する」としているからである。

もう一点は、当時の反ファシズムの統一戦線運動と社会保険のたたかいがどうかかわってなされたかについてでした。

このような点について話し合いを通じて、私は一九一二年のロシア社会民主党第六回全国協議会で決議されたレーニンの社会保険綱領といわれているものを、プロフィンテルンは各国の労働組合運動の中に実践化しようとしたものであるとの考えをもつようになった。これは私の社

会保障研究に大きな影響をもった。

プロフィントレルンの「社会保険についての決議」についての私の研究は現在も不十分な段階にあるが、中林さんとの話し合いを振りかえりながら、社会保障研究を進展させることが、中林さんへの御恩返しだと考えている。必ずなしとげるように致したい。

(立命館大学名誉教授)

本を読んで埋めます

鈴木 木 ふ み

このところ数年、先生はかなりお忙しかったようで、いつもいくらか過労気味に見うけられました。ちょうど、イギリスの炭鉱労働者の最大なストライキ（一九八四年三月から翌年三月にかけて三五八日間）があり、この争議についての資料や新しい新聞をお借りしに、私はこの頃、何度も先生のところ（主として市ヶ谷の研究室）へ押しかけましたが、よく、私の前にもあとにもお客がありました。大月書店の佐保さんとも、そんな具合で一度ならずお会いしたとおもいます。

あれはたしか、八五年の四月のおわる頃ではなかったでしょうか。たぶんその日、大月書店か

らの『日本の労働組合運動』の最終巻「5」が完全に先生の手をはなれ、本としての出来上りを待つだけになったのだと思います。ノックして入っていくと、先生は一人で、安堵した、しかし輝いた顔をしておられました。そしていきなり、「終わったんですよ。とうとう終わりました。たいへんだっけどねえ、しかし実にたのしかった。いいことができました」と、一気に言われました。それから、ちょっと間をおいて、「議論をするということはほんとに素晴らしいことですね、はじめはみんなかなりばらばらでね。それが、何度も何度も議論をくり返す過程で、お互いが共同の目的意識に集中してきて。六〇人が、八〇回もやったんですよ。じつにすばらしかった。どうしても、今の段階でやり上げなければならなかった仕事でした。ついに終わりました」と朗々と言われました。

それにつづいてたしか先生は、これで、いまの段階としては、いつ死んでもいい気持だという意味のことを言われ、私は、先生がそのような究極の問題も視野に入れつつ学習し生活しておられるのだなと思ひ、こころの引きしまるのを感じたような、同時に、そのように悔いなく仕事をされた先生をとて羨ましく思つたような気がしています。ただ、一月一日のことがあまりにも近くにおこりすぎて、その後、なぜか私はあの日の先生のことばのこの部分だけは、ほんとうにきいたのか、空耳だったのか、まったく確信がなくなってしまいました。

ほんらい、お正月すぎには「検査入院」から帰宅されるはずでしたし、すごい大忙しは当面は

過去のものでしたから、こんどは適當なときゆっくり、イギリスのストの諸問題について、先生が少々うるさがるうと、わからない諸点の片づくまでガンバロウト、私としてはたくらんでいたつもりでした。

で、いまはしかたなく、本を見て埋めあわせることにしています。イギリスの労働組合運動についての先生のいちばん新しい本——『イギリス通信』（一九八一年九月刊、学習の友社）は、じつにやさしい文章の手紙体なので、前に読んだときには、その平易さにつられて、中味もやさしいし、先生も楽な気持ちで書いたのだらうと思つたものでした。しかし、いま読んでみると、やさしいどころではなさそうです。

いまのイギリスの階級関係、その中におかれてゐるそれぞれ独自の歴史をもついろんな労働組合組織、それらのそれぞれの日常生活、闘争時の動き、あるいは政府の動き、社会の他の諸部門の動き、イギリスの諸政党などについて、あたかも日本の現場の組合員の眼を借りたような角度から、先生のそれまでのイギリス研究の蓄積をかたむけて、解剖して見せてくれている、というのがこの本の中味らしいと今は思っています。

じゃあ先生、もう原稿用紙がなくなりました。

早かった死

渡辺菊雄

昨年秋、「非核の政府」の問題が提起されて間もなくのところ、「日本共産党を支援する東京の学者・研究者の会」の事務局で、この「非核の政府」をめぐる諸問題についてシンポジウムを開く計画を話し合っていた。

それまで革新陣営のあいだで政府樹立の問題は、革新三目標をかかげる民主連合政府の問題として運動が展開されていた。この三目標は周知のとおり、①日米軍事同盟（安保条約）と手をきり、真に独立した非核・非同盟・中立の日本をめざす、②大資本中心、軍拡優先の政治を打破し、国民のいのちとくらし、教育をまもる政治を実行する、③軍国主義の全面復活・強化、日本型ファシズムに反対し、議会の民主的運営と民主主義を確立する、であった。

これにたいし「非核の政府」は、①核戦争阻止、核兵器廃絶を緊急課題として追求、②非核三原則の厳守、③日本を核戦場化に導くいっさいの措置に反対、④国家補償による被爆者援護、⑤原水爆禁止世界大会の積極的伝統を生かしての国際連帯、の五目標を目標にする政府の樹立であ

る。この両者の関係には解明すべき政府理論の問題があり、これに造詣の深い中林さんに報告者のひとりになっていただき、シンポジウムを開こうというのが、その計画のとき話し合われたことだった。しかしその後、中林さんが入院されたということが判り、この計画は、実を結ばなかった。だが、その直後に訃報を聞くことになるのは誰が予想できたであろうか。私はここ一二年のあいだに師と仰ぐなんんかの先生と世を異にする悲しみを味わった。しかし、同世代の先輩、友人の訃報には暗然としたつらさがあることを味わわれている。しかもこれからの歴史に起こる複雑な問題に立ちむかえるすぐれた同世代人の死には惜しむ言葉もとどえる。

中林さんとの出会いは御茶ノ水にあった政経ビルだった。この政経ビルに民主主義科学者協会のほかに中国研究所、世界経済研究所、産業労働調査所、家主といふべき政治経済研究所などの民主的諸団体があつた。その団体が「ビル懇」という連絡会をつくっていたが、その会であつたとおもふ。運動の未熟さよりもさらに未熟さをもっていたが若々しい熱情で学問の研究、政治の变革に活動していた私たちのなかで、中林さんはひかえめではあつたがもう理論家であり「ビル懇」でも指導者のひとりであつた。「ビル懇」は間もなく消滅し、中林さんとの交友もあまり発展しなかつたが、中林さんは久しぶりにどこで会つてもへだたりや氣のつまる思いがなく会話ができるフランクな人柄の人であつた。中央線東小金井駅が間もなくできるころ、電車の先頭車の一箱まえて線路をみている中林さんに会つた。そのとき中林さんは「中央線で唯一の九〇キロが

でる区間がなくなるのは残念だ」といって九〇キロのスピード感を楽しんでた。東小金井駅ができて中央線は——その当時——九〇キロのスピード感を味わう区間はなくなったが、中林さんは充実したかがやくその人生をスピードでいってしまわれたようにおもわれてならない。

早かった死、それでもなお、安らかにお眠りくださいと言わねばならないのでしょうか。

(歴史学者)

真の教育者中林先生

田 崎 信 子

私は中央労働学院の学生として一九六二年に先生と出逢い、以来人生の師として御指導を受けた者です。私達夫婦を結びつけてくれたのも先生でしたが、この場では「中労生にとって先生がどんな存在だったのか、どんな係わり方をして下さっていたか」について書く事で、先生の全人格丸ごと真の教育者であった事を記したいと思います。

中央労働学院は三、四年前まで三田にあり、政経科と文芸科各々一年で本科を終えるように組まれ、さらに研究科、ロシヤ語科、資本論研究など講座が開かれておりました。先生はそこで理事を務め政経科の講義やゼミも持っておられました。

文芸科の私が先生と親交を持てたのは紛れもなく先生の人間らしい温かさからでした。

朝鮮大学との交流、全学ハイクや学園祭等の行事に、ある時は御子息の賢一君を交えて参加して下さったり、ある時はお宅を開放し、食糧、お風呂まで提供して貧しい夜学生に人の温もりを与えて下さったりしていました。二年間の通学中吉祥寺に下宿していた私は、帰りの電車でもよく御一緒出来たので、健康・栄養問題から始まり、授業で納得ゆかない問題はもちろん、社会問題、職場問題、恋愛、親の問題に至るまであらゆる問題の悩みや疑問をぶつけ、相談にのっていただき、生き方、考え方の方向を提示御指導いただけました。“人間なんてどんなに繕ってみても所詮一人ぼっちで利己的、変わりようのないもの”と退廃的だった私に、人の生き方、考え方はその環境によって作られてゆき、成長、変化しうるのだと教え、仲間と共に手を結んで人間性を高め合い、よりよい人格を作り、よりよく生きるために何をしなきゃいけないのか、何が問題の根元なのかと、自分の内面にしか向かなかった目を社会へと広げて下さいました。先生の偉大さは学問・理論からばかりでなく、全人格をもって人間的な温かいふれ合いを通してこの理論を教授してくれた事だっただけだと思います。

先生との豊かなふれ合いを持って生きていたのは私ばかりではありません。一昨年十月、二十年ぶりに同窓会を開き仲間が集い、近況や問題を語ると共に、中労時代の思い出を語りあいました。誰からも先生との豊かな人間関係が語られ、そんなふれ合いの中で自らを点検し、高めて



蓼科、八島湿原にて（1985年、田崎信子さんと）

こられたのだろうと感じさせられる語らいでした。

この会以来私達は楽しいロマンを共有していました。厳しく苦しくなる現実の中で、時に立ち止り心身を休め、友と語り、再び闘うエネルギーを生み出せるような充電の場が欲しい、そんな私達の館が。「それはいい。奥多摩の土地を提供しよう、二百坪余りあるがどうだろう」との先生の御提案で現実的、具体的な夢になってきました。仲間に測量士、設計士、建築家もいて話は進み、中林記念館にしよう、資料室、宿泊、会議室と大きな風呂を作って——と夢は膨らみました。後日奥様も御同伴なさって、紅葉まっさかりの美しい奥多摩の土地検分にワイワイ出かけ、プランを練ったりも致しました。奥多摩湖が一望出来る高台の土地に立ち「この

大パノラマの中でユツタリ風呂に浸りたいと思つて購入したのが分るだろう」とおっしゃっていた先生でした。そんな私達の夢の館を実現させる事も出来ず、先生は去つてしまわれましたが、私達の中に先生の育ててくれた無形の金字塔はしっかり建てられようとしていると思ひます。

先生が全人格をもって教えてくれた「人間らしい深い愛と豊かな深みのある人間性を培つて仲間と共に手をつなぎ、しっかり社会を見つめ理論を学び、愛あるゆえ厳しく闘える強さの持てる人間へと成長してゆきたい」との思いをあらためて決意し、先生への追悼の誓いにしたいと思ひます。

中林先生の思い出

黒部 清明

私が勤務している、京都府農協労連の結成二十周年レセプションが開催されたその日の晩、中林先生の訃報がとどいた。

そのつい一カ月半ほど前にお宅を訪問し先生にお会いしていた私にとっては、何とも信じ難い報であった。

そもそも私が労働組合の書記として働くことを決意し、その機会を得ることができたのは先生のおかげであった。

学生時代を、多くのことを吸収し、そのなかから自分の価値感と行動基準を形成する時期とするならば、私にとつての学生時代は、中林ゼミそのものであったといえる。

私が中林ゼミに入ったのは、先生がロンドン大学の客員研究員として、一九八〇年三月から一年間ロンドンで過ごされ、ちょうど法政大学に戻られた年である。

先生は、いつでもひじょうによく学生の話に耳を傾けてくださった。同時に、どんな内容の話であれ、ものごとを一面的に把えることを厳しく戒められた。

特に私などはゼミに入ったばかりの頃、主観的で独善的な傾向を色濃くしていたのであろう、ある時、先生からその誤りについて鋭く指摘されたことがある。それは確か神楽坂でのゼミの交流会の席であったと思う。先生と私が周囲の状況とは全く無縁に延々と「議論」をし続けたなかでのことであった。

そのあと飯田橋駅まで歩いていく途上で先生は私にこういわれた。「既成の権威に反抗し、一生懸命考え、行動しようとしている君のような学生が好きだ」と。先生から厳しい指摘を受け、かなり気が沈んでいた私にとつてこの言葉は本当にうれしかった。と同時に、先生のゼミでもっと頑張ってみようという気持ちを抱かせた。

そんな私が卒業を控え、就職のことをも考えなければならぬとき、先生に自分は労働組合の書記としてやっていきたい、と決意を伝えた。その一週間後、先生は「全農協労連、組合員十万人。やってみるか」と、書記の話をもってくださった。

事情があつて私が東京から京都の農協労連へいくときも、その報告がてらいろいろと相談にのつてもらつた。その帰りがけに、「企業別組合を脱皮していくなかで、君らのような書記の役割は増していくからがんばりなさい」と、励ましていただいた。

私も労働組合運動のなかに身をおき、それなりの経験をすするなかで、先生が多くの著書でいわれていることを多少なりとも現実的に、自分のたずさわる運動のなかで理解できつつあつたし、また、これまで以上に先生に聞きたいことがたくさん生まれてきていた。先生とお会いできる機会を楽しみにしていたのであるが、そうしたときに先生が逝去されたことは、本当に残念でならない。

先生は、企業別組合の連合体としての既成単産を、真の「産業別組織」に移行させるうえでの課題として、職場組織の確立と、産別組織内における企業の枠をこえた地域における統一闘争と共同行動の強化、それを環とした他産業労働者や地域住民を含めた「地域共闘」の継続化などを指摘している。そして、その具体化は労働組合運動の活動家の、経験の積み重ねによるしかない、とよくいわれていた。

私たちは先生から直接教えを受けることはもうできない。しかしながら、先生の業績と淡々とした口調で教えられた多くのことは、今後とも私を励ましてくれることだろう。

私にとって、中林先生は人生を大きく決定づける人であった。いま私は、在りし日の先生を偲び、「学ぶ」姿勢を、そして現実の組合運動の中にこそ希望と確信をふりおこさせるものを見いだす姿勢を持ち続けながら、今後の運動に力を尽くしていく決意を新たにしている。

(京都府農協労連書記)

中林賢二郎先生を偲んで

岸田 修

中林賢二郎先生が逝ってしまった。一月十一日、享年六十六歳だった。

運輸一般のモデルとなったイギリス運輸一般を研究されていた先生からは、全自連から運輸一般への切り換えのときにも、さまざまな助言をいただいた。また、運輸一般の研究集会、幹部学校などの講師、『月刊TGU』への執筆も少なくなかった。運輸一般の取り組みについて助言と外部への紹介も惜しみなくされた。

十一月中旬、咳がつづいて風邪だと思つて自宅療養されていたが、思わしくなく、十二月中旬に自らカバンをもって入院され、その一カ月後、帰らぬ人となった。肺水腫（肺ガン）だった。それは、あまりの急逝だった。

中林先生は、法政大学社会学部教授、同大原社会問題研究所研究員、日本女子大学兼任講師の現職についておられた。西洋史研究の蘊蓄うんちくから世界労働運動そして日本労働運動の研究をされ、『現代労働組合組織論』『世界労働運動の歴史 上・下』『イギリス通信』『岩波講座 世界歴史』など多数の書を著して、理論的貢献をされたのだった。

私は、法政大学二部社会学部在学中、中林先生のゼミナールに所属し教を乞うた者として、また今日運輸一般本部に勤務する者として、運輸一般とのかかわりの深かった先生の死去は二重に悲しいできごとだった。

在学時代、法政大学を巣窟すくにしている中核派暴力集団の大学支配を許さぬために、大部分のエネルギーを学生運動に費やしていた私は、中林ゼミ生としては、十分な予習もしないままたくの劣等生だった。ある時、エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』をテキストにゼミ学習をしたとき、解釈的（主観的）な報告をした私に、先生は、「なぜ」「どうして」と執拗に質問をされた。そして、先生は、いまもって、こうした古典を読むときは、たいへんな時間をかけていることを述べられ、また、そこになにが書かれているのかそのものを正しく読むことの大切さ

を指摘されたのだった。

先生は勤労学生をそして労働者を愛した。二部のゼミは夜の八時過ぎからはじまって十時過ぎまでつづく。おおかたそれでも終わらずに場所をかえてノミナルとして続行することしばしばだった。そして、二部のゼミを担当するのを敬遠する傾向が教授陣のなかにあるなかで、先生は勤労学生の勉強意欲と問題意識を尊重し、学部長という激務についた時以外はかならず二部を担当し、かつよほどのことがない限り欠席はされなかった。また、労働者にわかりやすい叙述に腐心されていた。

先生は、誰に対しても区別なく誠実な態度をとられる人だった。学生の発言に丹念に耳をかたむけ、しかし、同時に先の例のように非科学的な態度には、容赦なく厳しい意見をされた。そして、よく「ハ、ハ、ハ」と、めがねのなかの目尻を下げておおらかにやさしく笑っていた。写真が好きだった先生は、ゼミ合宿でも自分でカメラをセットして写し、焼き増しして学生にくれたものだった。

思い出は尽きない。一月十七日におこなわれた法政大学社会学部葬に参列した私は、教え子代表の方々の弔辞を聞いているうちに、自分の体験が折り重なってひとしきり頬を濡らさずにはおれなかった。

しかし、多摩の校舎を背に先生にお別れしたときは、私は、一種の幸福感を感じていた。それ

は、中林先生と社会科学を学ぶ時を共有できたこと、同時にその人格にふれることができたこと、そして、先生の「労働者階級の解放のために」という志を職業として実践的に引き継ぐことができる立場についていることの幸せを、あらためてかみしめていたからだと思う。

ヒューマンでかつ高貴で、イギリスをこよなく愛した中林先生——心からご冥福をお祈りいたします。

(運輸一般本部書記局) 『月刊TGU』一九八六年二月号

中林先生の思い出

俵 博子

(旧姓 皆川)

中林先生とゼミの仲間は列車に乗って待っているはずでした。ところが、立川の駅前で買物をしてホームに戻ると、すでに列車は発車していて、先生とゼミの仲間がホームに立っています。友人と私の二人が発車時刻になっても戻らないため、全員列車から飛び出したとのこと。先生の帽子だけが青梅まで一人旅。網棚に置き忘れた帽子が我々より先に目的地に着いていたんです。

先生曰く、「我々のゼミは頭が先行しているらしいな！」

その夜の御岳ゼミは、大いに語り、笑い合い飲みました。もちろん、酒の肴は私達二人になつてしまつたのですが。

先生は下町をこよなく愛されておりました。門前仲町でゼミの忘年会を開こうという意見がまとまつたのも、そのことと無関係ではありません。学生の忘年会に使うには、少し高級だつた、「二力」^{いぢりや}。値段交渉は私の役目です。ご主人と会い、会費のこと、ウイスキー等の持込みのこと等、等しい分と注文をつけたのですが、ご主人は気持ちよく引き受けてくれたのでした。

この時の忘年会はちよつぱり優雅な気分です。スタートしたのですが、会は盛り上がり過ぎて大騒ぎ。やっぱりいつものどんちゃん騒ぎになりました。でも、何故か一力のご主人は我々のゼミが気に入つた様子でした。それはとりも直さず、先生のキップの良さに負うところが大きかつたので、今では考えています。

その後、「一力」は店をたたみ、その跡地に今はマンションが建っています。時の流れとは言つても、何だか悲しい気分になつてしまいます。

先生との思い出は、酒のことばかりです。毎週ゼミが終ると、決まって飯田橋の「たる八」^{はち}へ直行。多少のシレンマも先生の魅力と酒の誘惑には勝てず、「ほんの一杯だけ」で三年間。

本当のところ、私はゼミの勉強はほとんどしませんでした。先生と会えること、先生と話せること、仲間と語り合えること、そして何といつても酒を飲めること。これらが私の学生生活のす

べてだったという気がします。

大学生活五年目に、先生から、

「おい、もう卒業するか？ 卒論はまだだけど、卒業してからボク宛に何日の日か必ず卒論を提出してくれよ」

お蔭様で無事卒業ということになったのですが、遂に先生との約束は果たせませんでした。私の結婚式にご夫婦で出席して下さい、

「君の結婚がボクにとっての君の卒論だと思う」

そうおっしゃった先生。

私は人並みに結婚して、二児の母親となり、仕事に家庭に、皆に助けられて頑張っています。そうした忙しさの中にあっても、先生ともっと話し合いたいという気持ちは今も昔も変わりません。

先生、天国で私の母と下町の移り変わりを嘆いているんじゃないやありませんか？

奥さまのことは余り心配なさらないで、いつもの笑顔で、どうぞ私達を見守っていて下さい。

さようなら、申林先生。

大学院での中林ゼミ

佐々木 太郎

法政の市ヶ谷キャンパスを歩いていると、校舎の影から、中林先生がひよいと現れるような気がする。例によって、少し前かがみでシオルダーバックを背負い、帽子をかぶっている。そして、「ヨォッ！ 佐々木君、元気かい？」などと、笑いながら声をかけてくれるような気がする。中林先生が逝ってしまったのがあまりに突然だったので、まだ、そんな気持がしてならない。

不肖の弟子たる私は、先生に迷惑や心配ばかりかけ続けたが、先生から学んだものは実に多い。一九七〇年代半ば、学部の中林ゼミは社会学部の中でも活発なゼミの一つだった。ゼミ生も三〇名以上はいたのではないだろうか。なかなかの女傑のゼミ生もいた。私が初めてゼミに参加したとき、すぐに『コミンテルン史』のレポーターをさせられた。これはテストなのかもしれないと思い、ムキになって報告した覚えがある。中林先生のテキストをのぞくと、実に詳細に精読されていて、ラインとメモで真黒になっていたのに驚かされた。七〇年代末から八〇年代にかけての大学院のゼミでは『マルキシズム・ツデー』などを読んだ。毎週一本の英文の論文を訳出



大学院ゼミ合宿、房総白浜（1979年）

し、報告するのに、とても苦しんだ覚えがある。それでも、次第に慣れてくるとジャック・ウオデイスやホブスボームの論文など西欧のマルクス主義理論の展開に新鮮な刺激を受けた。また、この授業は語学の弱い私の指導のためでもあった。

現在の大学院のゼミは、他専攻の人も含め六人ほどで開いていた。テキストは、二年続いて、ソ連科学アカデミー『国際労働運動史』（国際関係研究所訳、協同産業出版）で、八五年度は、第二巻と第三巻にとりこんでいた。中林先生がこのテキストを選ばれた理由は、何よりも、世界の労働運動全体を詳しくかつ統一的にとらえようとする科学的社会主義の立場からの研究であったためであり、また、私たち若手の研究者とともに『国際労働運動史』を近い将来、書き上げようとする準備のためでもあった。

毎週、一章か二章をレポーターが精読し、報告す

る。先生は、しばしばレポーターよりもじっくり読んでこられ、英語版のテキストと照合しながら、訳語についても発言された。討議も三時間を超えることがたびたびあって、夜間の教室利用の院生や先生にせつつかれることもあった。

学部の中林先生の教えの一つは、テキストを正確に読みとれ、ということであった。学部のゼミ生の指導においても、他人の論文からの切り紙細工の卒論などより、たとえば、エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』を一冊、何カ月かかろうとも読みきってまとめることができれば十分だとよく言われた。中林先生は、この『国際労働運動史』のテキストをじっくり読むことによって、国際労働運動史の方法、その基本的分析視角を学びとることを考えておられたようだ。少々、ドグマチックで重いテキストというイメージではあったが、始めてみると、かなりおもしろい題材を提供してくれた。一八四八年の革命、第一インタナショナル、パリ・コンミュン、第二インタナショナル、労働貴族の出現、帝国主義の成立、一九〇五年の革命、第一次世界大戦という時代を最後のゼミでやったことになる。私は、一九世紀末、二〇世紀初めの西欧の労働運動において労働貴族が出現する条件、日本の労働運動史との比較、さらには、現代日本における労働戦線右傾化との関係や労働運動史上における「民族」の問題の進化と発展といったところに関心があり、くりかえし質問をし、議論をしかけた。

レーニンの「ヨーロッパの労働運動における意見の相違」や一九〇七年の「ジュトゥットガル

トの国際社会主義者大会」での発言などは何度も議論された。後者の「広範な植民地政策がとられた結果、ヨーロッパのプロレタリアは、社会全体がプロレタリアの労働によってではなく、ほとんど奴隷化された植民地土着民の労働によって養われるという状態にある程度おちいったのである。……こういう諸条件のもとで、一部の国々では、その国のプロレタリアートに植民地領有的排外主義を感染させる物質的経済的基礎がつくりだされている」という意味は、今日の日本の労働者階級の一部にあてはまるものか、それとも全体にあてはまるのかという点でも論じあった。

先生はゼミで煙草をすわれた。長い討論のあと、実にうまそうに煙りをくゆらせた。あとでわかったことだが、奥さんの前では禁煙されていたようだ。

十月末のゼミで、蓼科の別荘で秋を楽しんで来られたというおしゃべりをされた頃、少々、咳こんでおられたので、「カゼには気をつけた方がいいですね。結核の再発などということもありませんから」と言ったところ、先生は、「なかなか、カゼがぬけないんだ。ほくは結核についてはプロだから、再発などということはまずありえない」などと、二〇〇三〇分、明るく「結核病理学の講義」をされた。「禁煙」などは、必要とあらば、いつでもできる意志力をもっているし、また、胃潰瘍の治療のためにしたことがあるというのが、自慢のようであった。

十一月末のゼミの日、院生はゼミ室に集まってきたが、先生は来られなかった。先生が私たち

に無断で休まれることはなかったので不思議な気がしてならなかった（これは事務室のミスだったのだが）。それが最後のセミの日であった。

考えてみれば、私は何一つ、先生にお返しもできていない。もう少し、もう少し、生きていてくれたなら、と思えてならない。でも先生は笑いながら「ちょっと疲れたよ。佐々木君。ここからは自分一人でがんばってみなさい」と言っているのかもしれない。先生の遺志に報いるためには、誤りをおそれず、精一杯、研究を続けていく以外ないのだろう。

（法政大学大学院）

ひとこと

鳥居俊夫

小林先生には、同先生が、「中労」に長くかかわっておられただけに、いろいろと思ひ出があります。

お人柄についての印象は、一つのことがらに、情熱をこめて打ち込まれる態度と、論理が明快で、強い説得力を持っておられたことのように思います。

一九六八年頃、中央労働学院政経科の生徒の中に、「全共闘」的思想に傾斜していた人（もちろん他にも何人もいた訳ですが）がいましたが、中林先生の講義を受け、その直後の個人的な質疑応答をおこなうなかで、すっかり、それまでの見方、考え方を変えて、後に積極的な活動家になった事例もあります。

また、映画などもよく見られたようで、或る日『アルジェの戦い』を観てこられた時、その映画のもつリアリズムのすばらしさを観てきたばかりの感動をそのまま打っつけるように話をされたことを印象深く覚えています。

中央労働学院は、一九八一年、校名を「東京文科アカデミー」と改称し、さらに、八五年五月、校舎を武蔵野市に新築移転しました。

中林先生は、新築後の最初の評議員会（五月）に数年ぶりで出席をされ、積極的に発言してくださいました。閉会后「また来ますよ」と一言いわれて帰られました。これがお目にかかった最後でした。

御冥福をお祈りいたします。

（中央労働学園専務理事）

弟・賢二郎のこと

中林哲太郎

弟の賢二郎は昨年（一九八五年）の暮れ、昭和医大附属病院に入院したが、少し落ち着いた頃とあって、今年の一月六日、家内と一緒に見舞いに行った。

思ったより元気そうなので、これなら暫く入院して治療を続ければ元気になるのではないかと希望が湧いた。

その時、弟は、現在ニューヨークにいる私の子供のことをしきりに尋ねるので、最近子供が寄せた手紙によって近況報告をしたら、大変楽しそうに聞いていてくれた。

余り長くいて疲れてはいけないと思い、その話がすむと、また来るよと握手をして別れたが、意識のはっきりした弟に会ったのは、それが最後になった。

一月十日夕刻、「急変した」との義妹からの電話で、夜おそくかけつけたが、ほとんど意識はなかった。そして一月十一日の未明になくなった。

まだ当分来ることがないだろうと思っていた嵐が突然やって来て、弟はその嵐と共に何処かへ

行ってしまい、嵐が止んで静かになった時には、いなくなっていた、という感じが、今もしきりにする。

一月十六日の朝、ニューヨークの子供から電話がかかってきた。今まで買ったことのなかった邦字新聞を、ひょいと買う気になり、開いた頁に「賢二郎叔父」の死亡記事を見つけたが、ほんとなのかとびっくりして確かめてきたのだった。

「賢二郎叔父」の亡くなったことを、どう知らせようかと思案していた時で、思案の手紙を書く必要はなくなったが、子供は事実と知って、思いがけないことに大きなショックを受けたようだった。

一月六日の弟との病院での会話と、子供がニューヨークで邦字新聞をはじめて買う気になったこととの間に、つながりがあるとはもちろん考えられないが、それにしてもこの「不思議なつながり」を私は忘れることがないであろう。

私共は三人兄弟で、賢二郎はすぐの弟。その下に妹がいる。父は官吏で日本と中国の間の転勤が続いたので、私は北京生れであるが、弟は横浜、妹は上海と、それぞれ出生地が違う。

当時は現在のような單身赴任など考えられない時代だったから、二、三年に一度、父の赴任地

が変ることに、家族はみなそろって、父について行った。

父は名古屋勤務の時、民間に移り、名古屋在住が長くなったので、小学校を三度変った私とちがって、弟も妹も名古屋で小学校に入り、転校の体験はしないで済んだ。

転校とは関係ないかも知れないが、私は人見知りをする方で、新しく人とつき合うのが苦手の方だが、弟は人なつっこい性質で私ที่บ้านにつれてくる友達の誰ともすぐ親しくなり、可愛がられた。

私も弟も中学、旧制高校は名古屋で、二人とも運動部は庭球部を選んだ。弟はジュニア・オール・ジャパンのダブルスの選手権をとり、また、インターハイでの全国優勝が毎年続いた黄金時代の八高庭球部のプレーヤーだった。

私が昭和十五年に大学を卒業して社会人として大連に赴任する時、弟は一家を代表して神戸まで見送ってくれ、六甲のホテルでの私の内地最後の夜をつきあってくれた。

戦争末期に私の一家は渋谷から世田ヶ谷のはずれに簡易疎開をしたが、弟は、召集中だった私に代って、その音頭とりをしてくれた。

このように思い出していけばきりが無い。私も弟も、大学の学部を選択、卒業後の方針等は自分できめてお互いに干渉することはなかったが、お互いにバックアップして力になりあった。

終戦後の混乱と困難な時代をようやく越えてきて、これから余暇の楽しめる生活が送れると思

っていたのに、兄弟の一人が欠けたのは誠に残念である。

(一九八六・九・九記)

思い出の記

松本 清

私は思い出の記として義兄の中林賢二郎氏との三五年間のエピソードを記してみようと思う。彼との最初の出逢いは私がまだ中学生の頃で、私の姉と結婚して二年目の頃、すなわち昭和二五年一月二七日品川駅の東海道線プラトホームであった。その頃私と母は九州の豊後竹田で生活していたのだが、東京での食糧事情がよくなってきたので、すでに上京していた父、姉、兄と共に一緒に暮らすことになり上京してきたわけである。出迎えてくれた時の彼の恰好は長髪でソフト帽を被っていたのが印象的であった。その年の六月に朝鮮戦争がはじまり、日本経済は潤い、金へん景気といわれ、くず鉄がもてはやされた。

その頃はまだ住宅難で、どこの家も何家族も同居しており、我々も四家族が同じ屋根の下に住んでいた。

昭和二六年の春のことだったと思うが賢二郎兄と自由ヶ丘に散歩に出た時、急に彼は材木屋に入り、長い角材と数枚の板を買った。何しろリヤカー等もないところで、私も手伝って二人で肩にかついで帰宅した。大分前から計画していたのであろう。さっそく彼は寸法をとり、カンナをかけていくつかの木片に切った。その後、日曜日ごとに材木屋通いをくりかえし、部品をふやしていった。とうとう手製のダブルベットをつくってしまった。彼の自慢は中央の支えの部分の両端よりやや低めにしており、体重の重みで板がそるとこれがバネの役割をするというしかけてあった。クリーム色に仕上げられたこのオール木製のベットはその後数年は使われたと思う。

その頃、彼は大工仕事に意欲を燃やしていたのか、もう一つの手製品がある。銀杏の木でつくった懐中時計立てである。これも日曜日になつて彫刻刀でけずり、占めかしい色に仕上げた。懐に入っていた。これは今でも残っていると思う。

思春期の私は、その頃彼の話を聴くのが大変楽しみであった。手廻しの蓄音機をかけて、クラシック音楽の説明もしてくれた。その中でボロディンの『中央アジアの高原にて』はラクダの隊商の描写がすばらしく、私の音楽の目を覚まさせてくれた。その後、数年は音楽が私にとってすべてであった。これは、彼の影響が大きかったのだと思う。また映画もよく一緒に行った。その頃話題となつたレジスタンス映画『無防備都市』等も懐かしく思い出される。

同居していた関係で、自然と彼は私の家庭教師でもあった。文学書、歴史書の事を教えられた



大学院ゼミ生などと新年会

が、何ととっても英語の教え方は上手であった。難しいところがあると、まず辞書を引かせて、いろいろな意味のその中から一つを選び出させて納得させる方法は長く頭に残った。彼は大学卒業前後に近くの女学校で英語を教えたということだった。十数年以上たった後日、その当時の教え子より、その夫の出版した英文学関係の本を数冊贈られたときいている。

昭和三六年に小平に家が出来て引越す時、近くの鼠^{ひき}貞の古本屋の親父が、好意的に不意に手伝いにきてくれた。その頃、近くの雑木林より集めた植物類はすっかり大木になり、時の流れを感じさせる。昭和三七年の夏に彼は出血性胃潰瘍で吐血した。原稿書くと胃の具合がわるいといながら、朝鮮人参入りの焼酎を愛用していた。

病院に見舞いに行くと、「清君、棺桶に片足つつ込んでいるよ」と鼻に入っている胃ゾンデを触りながら、弱々しくいった。私は「若いからじきに治りますよ」となぐさめながら「人参入り焼酎がよくなかったですね」とつけ加えた。その時彼は、「子供は残酷だね。賢一が僕の吐いた血をみて、汚ないといって跨いで出ていったよ」と納得しかねる顔で語った。それはおそらく子供と一心同体と考えていた彼の、はじめての離別の現実ではなかったかと思う。

よく彼は、大学時代の休学したいきさつを話してくれた。八高から東大に入った時、テニス部の勧誘があったこと。プロテニスに入るのをすすめられたこと。テニス練習中に悪寒におそわれテニスをやめたこと、湘南での闘病生活の様子等は、実に細かい描写であった。

療養所より帰宅を許されると彼は闘病生活のつらかったことや自分の体が弱いこともあり医者になって、体の弱い人のためになりたいと思うようになっていた。結核は治癒とされてから、彼は文学部をやめて、医学部に学士入学したいことを父親に話したら、「勘弁してくれ、うちにはもう金はないよ」といわれて、断念せざるを得なかったことを話してくれた。彼は医者になっても、科学的な頭腦の持ち主であったことから、きつと名教授になっていただろう。

再び胃潰瘍より立ち治った彼は、テニスをはじめようになつてから体重もふえ、元氣そのものとなった。

昭和五五年、彼がロンドン滞在中に、私はリハビリテーションの世界のメッカで、ロンドン近

郊にあったストークコンデビル病院を訪れた時、彼と酒杯をかわした。

その折、私は道中でトランクの鍵を失くしたため、トランクの縫目を切るはめになり、代りのカバンを買いにケンジントンのカバン屋を案内してもらった。気に入ったカバンが見つかったのだが、少し汚れているので、もっときれいなはないかという時、その中年の店員は、やおら指先につばをつけて、汚れをこすった。その時、賢二郎兄は大声で笑ってしまった。くだんの店員はハツとしてバツの悪そうな顔をしたが、私もいきがかり上、そのカバンを買うはめになった。その帰り道でも大笑いし、途中立ち寄ったハイドパークホテルでの紅茶のうまかったことが、昨日のように思い起こされる。

昭和六〇年一二月のはじめ、賢二郎兄が結核で臥していることを姉の電話で知り、都内の某大学院胸外科での診察をすすめられた由であった。その夜、息子の賢一君が、彼の胸部写真を私のところに持参した。私はその写真をみるなり、全身の血が引いていくのがよくわかった。それは丁度、右肺門の中央に直径三センチの円状の陰影が認められた。それは肺癌症例のうち、もっとも手術困難な場所のものであった。それからは病状はみるみる悪化し、検査にも耐えられない状況にまでなっていく。そして誰もこのようなはい経過をたどるとは思ってもみなかった結果となった。

彼は荒い呼吸でも意識ははっきりしていた。お見舞いにみえた実兄の哲太郎氏から御令息の純

君がニューヨーク大学で指揮学を学んでいることを聞き、その後顔を見せた私に、「清君、我
我一族よりクラシックの指揮者が出るぞ」と嬉しそうな顔をしていたし、「今日来た若い女医さ
ん、君の教え子だってネ」といったり、蓼科の山荘のことをいって、溜息まじりに、はやくいき
たいなとつぶやいていた。そして、亡くなる数時間前には一緒にロンドンで私と共に訪れた友人
が見舞いにみえ、帰られる時に、「蓼科で又逢いましょう」と右手を高くあげました。本当に惜
しい人物を失ったと、かえすがえすも残念でならないが、今になって、私は義兄を私の勤める病
院で最後をみとれたのは望外の幸せであると思う。

(昭和大学脳神経外科助教授)

父の思い出

中 林 賢 一

去年の秋頃(であろうか)、居間の本棚に立ててあった一葉の写真に目をとめた時、私自身と、
私の祖父の思い出の写真を見たような暗い気持ちに襲われた。

庭先のテーブルに座っておどける私の息子を、父が後ろからささえて、微笑んでいる写真であ

る。この世に生を受けて間もない命と、老い行く命、その鮮烈な対照を感じさせずにはいられない写真であった。父、六六歳、息子が生後九カ月余りの初秋の頃である。

それから半年と経たずして、この写真が、父と私の息子の思い出の写真になるうとは……。

私が幼かった頃の父は、その仕事柄か、やや日本人離れしたわし鼻のせいも、怖くて、近寄り難いという印象が強かった。いつも机に向かっていて、その横顔を見ても、つい声をかけられずに、後ずさりしてしまうという事が、何回もあったように思う。暑い夏の夜、白いシャツを腕まくりして、机に向かっていている父の姿を、一種畏敬の念をもってながめていたものである。私に対してその愛情をそのままあらわし、投げかけてくれた母に対し、父はいつも遠くから一步距離を置いて、私を見ているようなところがあった。ただ、私に向かって、大声を出したり、手を上げたりすることは、決してなかった人であった。

このような父の印象が、人間臭さを帯びて来るのは、今の、小平の家に移った頃からである。

自分の学生達と、フォークダンスに興じたり、酒を飲み、冗談を飛ばし合い、時には憤慨し、また、時には、過ちを犯した私を叱ったことなど。丁度、私が反抗期であったためか、この頃よく父に怒られたものだったが、一度として、理不尽な叱責を受けた記憶はない。常に物事を論理的に扱え、考える人であった。父の私に対する、そして人間に対する深い愛情を知ったのも、丁

度この頃のことである。

五五歳になって、父は、三五年ぶりにテニスを再開した。当時、テニスを始めたばかりの私をつれて、家の近くのテニスクラブに足を運ぶようになった。学生時代には、全日本ジュニア・ダブルス優勝等、輝かしい戦歴を持つ父である。高齢にもかかわらず、コート上での動きはすばらしく、特に強力なフォアハンドと正確なスマッシュは、自慢の種であった。いつしかテニスクラブの仲間達は、私達のことを中林兄弟と呼ぶようになり、父はこの愛称が大変気に入っていた様子であった。テニスを始めた年に、法政大学の教職員テニス大会に二人でダブルスを組み出場し、予想外の優勝を遂げた時の父の喜びの表情は、今でも忘れることができない。

私が仕事についた後も、一緒に食事をする時の話題はいつもテニスの事であった。

他界して、十月余り経った今も、白いウェアを着て、コートの白球を追いかける父の姿は、私の胸に焼きついて離れない。

(六一一年秋 シンガポールにて)

思い出すままに

中
林
倭
子

はじめに

—御挨拶にかえて

賢二郎急逝の折、通夜から密葬（故人の遺志により、無宗教・献花という形式でとりおこないました）、学部葬、偲ぶ会、そしてこの追悼文集にお骨折りいただき、お忙しいなか、心よく原稿をおよせ下さいました皆様様に厚く御礼申し上げます。又主人死亡の折には、お寒いなか御会葬下さり、その上お心のこもったお悔みとお励ましのお手紙、弔電をいただきながら、体調をくずし、御礼を申し上げることも出来ず、大変失礼をいたしました。この書面をおかりして心より御礼を申し上げます。

*私達の青春

思いおこしますれば、まだ日常生活に切符制度が残っておりまして、昭和二三年暮れもおし追まいった一二月二九日、世田谷奥沢の私の実家に牛車で荷物を運びこんで新しい生活を始めてから、今日まで三七年の歳月がたちました。新生活は主人の蔵書を手離して生活用品を求め、現在では考えられない様な劣悪な食料事情のなか、それでも戦争が終わったという解放感は本当にす

ばらしく、これからの日本は私達若者が作り上げてゆかねばという自負と希望で心はずむような毎日でした。

今は、明治大学の大学院になっております御茶ノ水の建物は、その当時、政経ビルと呼ばれ、各種の研究機関が入っております。主人は政治経済研究所に、私は大原社会問題研究所に勤務しておりました。当時、同じビルにいらした、現法政大学教授上杉捨彦御夫妻と相前後して結婚いたしました。ここ二十数年は、あまりお目にかかる機会はなかったのですが、青春を共有した大切な友人として私達夫婦はたえず身近に感じておりました。主人危篤の折、御夫妻で深夜病院にかけつけて下さり、最後に立ち合って下さったこと、何か強い御縁を感じました。

その頃、政経ビルにありました研究機関の若者達は、休日になると、文化工作隊というものを作り、歌のお上手な上杉夫人を中心に、コーラス隊をくみ、近郊の農村に出かけました。都会の若者達と農村の若者達の交流は楽しいものでした。またその時、出された真白なおにぎりのおいしかったこと、今でも時々思い出します。

また当時家庭では、ガスも止められており、銭湯に行くのが普通でした。暑い夏の夜、連れだつてよく出かけたものでした。その頃、*「粋な黒堀みこしの松に」*という春日八郎の演歌がはやっておりました。この頃では、とんと見かけなくなりましたが自転車にのったそば屋のお兄さんが曲芸まがいに、片手に十数個のそばを重ね持ちし、おしりて調子をとりながら、この歌を口笛

で吹き、私達夫婦のそばをすりぬけて行く風情でした。そうそうお風呂から出る合図は「ラベルのボレロ」が常でした。男湯から勢いよく吹く主人の口笛が聞こえてきますと、そそくさと上り湯をかけ急いで出たものでした。そしてその頃やっと出はじめた、割箸へかためられたアイスキャンデー（甘味はサツカリン）を子どものように口にふくませながら……何はなくとも幸せな日でした。

＊煙草とお酒

近年、煙草の害が叫ばれるようになりました。私も極力やめるようにすすめたのですが、今さらやめても、もう遅いといって聞いてくれません。三、四年前、たしか『朝日新聞』だったと思います。今まで吸っていた人でも中止すれば効果がはっきりあるという記事がのりました。早速その新聞をみせましたら、翌日からすっぱりと煙草を口にしなくなりました。それで煙草とは縁が切れたものと安心しておりましたが、死後、息子が自宅の書齋を整理しました所、吸殻がかなり出てきました。ドクターの学生さんにお聞きしましたら「ああ、先生吸っておられましたよ」との返事、よくもまあ私にかくれてとあきれ、腹も立ちませんでした。

お酒は胃が弱かったせい、晩酌の習慣はありませんでした。ここ数年来、よいお薬ができた

お蔭で胃もすっきり良くなり、体重も六七キロと少し太りすぎる程になりました。そのせいか血圧が少し高くなってしまいました。この頃から夕食時にアルコールを口にするようにになりました。ビールなら小塚一本、日本酒ならお銚子一本とたいていきまっておりましたが、日によって飲みたらないのでしよう、私に向かって、にやりと笑い、お銚子をさかさになりふりもうないのサインをみせましたが、私にもっこり笑って二本目は出しませんでした。その姿が今も目に焼きついて私を苦しめます。

*愛猫ミー子のこと

庭の片隅にある物置で、てのひらにのる程小さな子猫をみつけたのは、一一年前の夏の日でした。のら猫の親が死んでしまったのか、人間を非常に怖がり、餌を置いてても、人がいると警戒して食べてくれません。物置から居間まで七、八メートル程あったでしょうか。

主人は毎日少しずつ餌を置く場所を居間の方に近づけ、一カ月近くかかって、やっと餌づけに成功しました。もう大丈夫と思ったのでしよう、さっと捕まえますと、何と主人の右手親指から血がふき上がりました。それでもまだ懲りずに根気よく餌をやりつづけましたら、やっと馴れてくれました。この小平に移り住んで一五年の間に、二匹の犬を看取りました。こんな悲しい思い

をするのはもうたくさんと、動物を飼うことを拒みつけました。

そしてこの子猫を手懐けることも最初から反対でした。しかし、子ども頃から犬と一緒に寝ていた程、動物好きの主人のこと、私の反対など、何処ふく風とばかり、まもなくこの子猫は我が家の一員となり、ミー子と名付けられました。

のら猫と申しましても、家のミー子は美人で気品のある三毛猫でした。何か事ある時は私と違つて毅然とした態度をとり、ニャーン等といつて人の膝などに上がつてくることなどありません。主人の猫談議を聞かれた方もおありでしょうが、中林の家についても猫の姿など見たこともない、本当に飼っているのかと疑問に思われた方もいらしたようです。そうなんです。家のミー子はまったくの野生の猫なのです。ですから他人の気配を感じると、すばやくかくれてしまうのです。避妊手術以外、医者の世話にもならず、すくすくと育っていききました。

時折り主人がお風呂に入れ、私がタオルを持って上がるのを待ち、ストーブの前で、丹念に毛を乾かしてやるという具合で、他人様が御覧になったら、さぞ可笑しかったでしょう。主人の書斎に自由に出入り出来るのはミー子だけ、夜は主人のぬぎ捨てたスリッパの上で眠り、主人外出の折には、レンガ塀の上で、じーっと帰りを待っているのです。ともすれば大人だけの乾いた会話の中で、ミー子はどんなにか私達の生活に潤いと慰めを与えてくれたでしょう。

一月一日主人が亡くなり、私も床につく日が多くなり、その上、四月から息子も転勤のため、

シンガポールへ旅立っていききました。ミー子にとって、この環境の激変が耐えきれなかったのでしょう。お腹の毛がぬけはじめました。葉をつけますとしばらくは治るのですが、二度三度と再発をくり返しました。六月一六日、私が義兄のおります会津の病院へ入院することになり、留守中のことが心配で、野生の猫は無理だと洩る獣医さんを説得して（避妊手術の時、手こずったせいか）きていただきました。病名は、ストレスと更年期障害だということでした。一〇日ばかりホルモンの注射をつづけましたら皮膚病もすっかりなおり、私は安心して庭にはなしてやりました。

七月一日夜、入院先の病室に二階のIさんからお花が届いたと電話がありました。ミー子は元気ですかという問いに、「昨日出先から帰った直後、二階のベランダに来て餌を食べていましたが、今日は朝から姿をみせませんし、餌も食べていないようです」との返事。ちょっと不安な気もいたしました。淋しいので遠出でもしたのかしらと思うことにしました。一三日から一五日まで嫁の八重子が孫と一緒に荷作りのため、実家から帰ってまいりました。早速、電話した私に八重子は、「いつもは飛んでくるのに今日は姿をみせません」とのこと。これはおかしいなと思いました。一四、一五と私の不安は膨れ上がり頂点に達しました。荷作りに忙しい八重子に、何度も電話をかけ、事故で死んだ三毛猫はいないか市役所に聞いて見て、庭の隅々まで捜して頂戴、隣近所に聞いて頂戴、まあ今から考えますと、お恥ずかしい次第ですが、半狂乱になって頼みました。でもミー子の姿を見つけることは出来ませんでした。きっと主人が、私一人になったら

面倒を見るのが負担になると思ったのでしよう、いつものように「ミーちゃん、こっち」といって、つれていってしまったのでしよう。私はなすすべもなくベッドの上で唯、涙を流すだけでした。七月一日は主人が亡くなって六カ月目の命日でした。行年一一歳、ミー子の死でした。

* 発病から死へ

昨年の一〇月二〇日は卒業生Kさんの仲人を頼まれており、それをすませた二四日、私は簡単な手術のためK病院に入院いたしました。大学と病院は近くなので、主人は授業の帰りにかならず立ち寄ってくれました。

一一月の初め頃でしたか、主人は風邪を引いたような状態になり、かかりつけの医者には薬はもらって飲んでいたのですが、せきがなかなかとまらなくて困ると言っていました。私は授業を少しお休みして家で安静にしたらと何度かすすめたのですが、「大丈夫だよ」と私が退院する一月中旬まで講義はつづけていたようです。退院早々、私は結核の再々発ではないかと心配になり大学へは休講の手続きをとりました。それから何度か総合病院で検査を受けてみてはと強く申しましたが、大病院の嫌いな人であさって行く、今度の金曜日に行く、今日はもう時間的に無理だと病院に行くのを非常にいやがりました。そして夕方になると枕元のテレビでお気に入りの番組

・水戸黄門（東野英次郎の）を見ながら笑い声を立てていました。

一二月一日の朝、九時頃居間におりました私の所へまいりまして、「倭子おかしい、こんな所にこぶができています、Tさん（かかりつけの内科医）に行ってくる」。みますと右あごのリンパ腺がはれていました。

車で帰宅した主人は、私の顔をみるなり「しまった、結核らしい」。例の如く額をポンポンと二、三度たたき、おどけてみせました。T先生は「風邪にしてはちょっと長引くので念のためレントゲンをとってみましょう」といわれ、結果は黒でゴルフボール大の陰があることがわかりました。あごのこぶは雑菌のためでしょうとのことでした。そしてもしよかったら東京医大の胸部外科の先生を紹介するといわれたようですが、女房の兄弟に医者が多いので相談してからとおこわりしたようです。

当時孫達と同居しておりましたので、もし開放性のものでしたら大変なので、近辺の結核病院に電話してすぐ入院出来る所をさがしました。この様子をS医大に勤務している弟につげましたら、そのレントゲン写真を今夜中に自宅に届けるようにとのことでした。写真を届け、深夜帰宅した息子に私はそっと様子を聞きましたら、「うーん、結核らしいよ。専門医にみせて、はっきりしたら、こちらに連絡する」といっていた」と二階へ上がって行きました。この時、すでに息子は肺ガンであることを知っていたようです。弟が時期をみて私に話すからそれまで伏せておく

ようにといったそうです。

翌日、弟はK病院に出むき、先輩でもある胸部外科のI先生にみていただきましたら、やはり結果は、肺ガンの疑いが強いとのことでした。後で聞いたことですが、弟は私の電話で、かかりつけの医者が胸部外科を紹介するといった言葉に、あ、これは肺ガンだな、と思ったそうです。現在、胸部外科は肺ガンの患者さんが多いのだそうですが、素人の私達にそんなことはわかるはずもなく、二人とも結核だと思ひ込んでしまいました。待っていた弟からの電話は二日後でした。やつぎばやに質問する私に、老人性の結核は場所にもよるが開放性のもは少なく、その心配はない。それよりもかく入院して精密検査をすることが先決。S医大ならすぐ入院出来るがK病院は少し時間がかかる、どちらかは二人で決めて返事を下さいとのことでした。いろいろ考えた末、K病院に決め、一月一〇日、I先生の外来日に息子と三人で出かけました。T先生の所をとった、レントゲン写真とK病院でとった写真をみくらべて、I先生はしばらくだまっていられっしゃいました。私が見ても、その黒い影は鶏卵大にふくらんでいるのがよくわかりました。「結核ではないのですか」という主人の問いに、先生はおだやかな口調で、「これからいくつかの検査をつづけてみなければはっきりわかりません」とおっしゃいました。

帰宅し居間のソファーに腰をおろした二人は、ただ、だまって向かい合っていました。やがて主人は「そうだったのか、うーん五年か」とつぶやきました。私は一瞬、目の前が真白になりま

したが、「いやなこといわないで、まだはっきりしないのに」と私自身を叱りつけるように立ち上がり、朝方使った主人の食器の消毒にとりかかりました。その夜、ベッドに入ってしばらくすると主人は「お金はあるの」と聞きました。結婚以来、銀行など行ったことのない人で、すべて私まかせでしたから、長期の入院費用のことが心配だったのでしょう。「大丈夫よ、退職金もあるし、使ってしまったって、年金でなんとかできますもの」と答えますと、安心したような顔をしました。

いやな咳が出はじめたのはその翌日からでした。昼間はいいのですが、よる一〇時すぎから午前三時頃まで、それは普通の咳ではなく、一種異様な、シャククリに近いものでした。しかし不思議なことに、時計の針が三時をまわると、ピタリと止まり、静かな寝息にかわるのです。寝つきの悪い私はほとんど一晩中起きていることになり、一、二日は我慢もできたのですが、次第に疲労がたまり睡眠薬にたよる毎日でした。

一二月一八日、骨の全身レントゲン検査のため、K病院に出むきました。検査室前の廊下に座って待つ私の前を、頭の毛のなくなった人が、一人、二人としかし、しっかりした足どりで放射線室に消えていきました。コバルト照射の副作用で毛がぬけることは、『週刊朝日』連載のフリージャーナリスト・千葉敦子さんの記事を読んできましたので、主人もあんなになってしまうのかしらとボンヤリ考えていました。

検査室から出てきた主人は、憔悴しきっておりました。仰向けに一五分、伏せて一五分、静止したままの検査は非常に負担になったらしく、帰りの車の中でもぐったりしていました。そしてその日の夕食から食事がのどを通らなくなりました。前日まで健康時と変わらない食欲もありよく食べておりましたので、その点安心しておりましたが、こうなっては、点滴で栄養を補給する他はなく、二一日S医大に緊急入院いたしました。

一月二七日、私はK病院に骨のレントゲン検査の結果を聞きにまいりました。I先生は「骨は全く正常です」と答えてくれました。私は嬉しくて、渋谷で彼の好物を何点か買い求めS医大に向かいました。病室に入るなり、おや、と思いました。暗く沈んだ顔をしていた彼が、とてもうれしそうな顔をしているのです。側によりますと「倭子、僕はどうも結核らしいよ、今朝から結核の薬が出ている」と申しました。「そう、よかったわね。骨の検査結果も、何も異状ないそうよ」二人して喜び合いました。しかし、その時すでにガンは肝臓に転移しており、手のほどこしようもなかったようです。しかし主人はそんなことは知るよしもなく、次の様な葉書（次頁）を友人の栗野鳳さんに出しました。これが彼の絶筆となりました。

暮れからお正月にかけて、軽い患者さんは帰宅なさるそうです。主治医も弟も帰宅することを強くすすめましたが、彼は自分の体に不安を感じたのか、お正月はここで過ごすといいはりませんでした。しかし私はもし気が変わって、帰りたいといった時のことを考え、いつもの様に居間と書斎

1985. 12. 27

お手紙有難う。当方ハガキで全く失礼とは知りながらお許しを。大学で最後にお目にかかった時、小生変なカラセキをしていたと思いますが、講義を続けているうちに、異常に悪化し、11月半頃から講義を休んだだけでなく先週火曜日には、義弟が助教授である昭和医大病院に入院の止むなきに到りました。今ベッドに寝たままで書いているのですが何とも申し訳けのいい様がありません。

小生、教授会も11月始め以来出席できず、かといって病氣そのものについても確定でないという状態でいたので、貴兄の問題について土生君と話し合う機会もありませんでしたし、その上当分は話し合へると思えませんので、勝手ですが土生君と直接お話しいただく他ありません。よろしくおねがいします。

小生は体調をすっかりくずしたまま、毎日かなり体力を要求される精密検査の連続に苦しめられています。

なお、小生の病氣は多分それ程、御心配いただくような性質のものではないらしいことが検査で一つ一つ、明らかになりつつありますが、体の状態そのものは素人では手のつけようもないもの。たとへ早くとも五月頃にならなければ大学には行けそうもありません。乱筆お許し下さい。

に、鏡餅を飾り、中林家代々つづいている、鯛入りの昆布巻の準備もしておきました。

三一日朝七時半、主人からの電話で起こされました。「やっぱり帰りたいから」とのことでした。すぐ迎えに行きますという私に、「君の体は大丈夫か」と何度も念をおしました。一日後自分の命が絶えるというのに、人のことなどかまわず痛いとか苦しいとかどうしていつてくれなかったのか、と悔まれてなりません。私がそれだけあの人にはぶらさがっていたからでしょう。

夕方、息子と二人で髪の毛と爪を切り、体をふいてやりました。主人は気持よさそうに目をつぶっておりました。が私達は、黄疽ですっかり黄色になった背中をみて愕然となりました。おなかも少し水がたまっているようでした。二一日に入院する時は、ほとんど食事をとっていきなにかかわらず、元気で、自分の荷物を持って、大病院の階段を軽い足どりで降りていきました。そして病院内を案内して下さる、看護婦さんと冗談をかわしながら笑い声を立てていました。その人が、たったの一〇日で、すっかり別人になっていました。これは、ただごとではないと息子も私も感じました。

元旦と二日、八重子の作ってくれた、お雑煮を「おいしいー」といって食べてくれました。私は「他に何か食べたいものがありますか」とたずねますと、ちょっと恥ずかしそうな顔をして、「おかしいけれどいり玉子が食べたいの」と申しました。子どもの頃いり玉子が好きだったと聞いております。

私は齒をくいしばってそれを作りました。病院へ帰る三日の朝、主人は淳一郎（孫）を呼んできてと申しました。やっと歩きはじめた孫はトコトコと入ってまいりました。「淳一郎」と声をかける主人をチラリとみたり、入ったことのない部屋の方に興味をもったのか、天井やまわりの本棚をみまわっていました。孫が居間にもどった後、「障子を開けて」と申しました。しばらく、じーっと冬枯れの庭を眺めておりました。午後、息子におぶさるようにして車に乗り込みました。車の外に八重子と私が立っておりました。それまで小さな声で話していた主人が、びっくりする程、大きな声で「八重子さん、八重子さん」と嫁を呼びました。八重子は「ハイ」と答え車の扉を開けますと、「お嫁にきてすぐなのに、こんなことになってゴメンネ」と申しました。もう再び生きてこの家に帰ることのないのを感じたのでしょうか。嫁は一日中、涙が止まらなかつたそうです。

帰院した彼は、看護婦さんに、「お家でのお正月はどうでしたか」と聞かれますと、「一〇日しかたっていないのに孫が大きくなりました」と答えていました。私は奥沢の実家から毎日通院するようになりました。九日、検査室（実は第二回目のコバルト照射）から帰った彼は、私に向かつて、「Hさん（つきそって、くださった看護婦さん）にはお世話になったのでお礼をいって」と申しました。Hさんは恐縮なさって、「そんなこと、ただ、あたりまえのことをしたまでです」とはにかんでいられました。私ははいねいに頭をさげました。「中林さん、また月曜日にまいり

ますから」と明るい声で部屋を出てゆかれました。主人はあの娘さんは九州から一人で出てき、正看になるための勉強をしている感心な子だと教えてくれました。数ある看護婦さんのなかで、Hさんのやさしい心遣いが、病に苦しむ主人に一瞬、心のやすらぎを与えてくれたのでしょうか。一日午後、検査室から（第三回目のコバルト照射）かえりました主人は、「今日は疲れた」といい、あとはほとんど口をききませんでした。

この日の夕方、翌土曜、日曜と付添ってくれるはずの息子に「今日はこなくてよいことよ」と勤務先へ電話をしました。ところが六時すぎ、くるはずのない息子が、ひょっこり顔を見せました。聞けば淳一郎（孫）の写真ができたのでと主人に手渡ししました。幾枚かの写真をくりかえし、じーっと眺めていました。八時過ぎいつものように顔をふきおえ、また明日きますからという私に深くうなづく主人を後に、息子は自宅へ、私は実家へ帰りました。夕食をとりはじめると、電話のベルがけたたましく響き、いやな予感がしました。主治医からのもので、「今、意識が混濁しはじめたのですぐおいで下さい」とのこと。何をしていたのかかわからず、ただろろろしている私を叱りつけ、弟が病院まで同行してくれました。病室にかけ込んだ時、主人はほとんど意識のない状態でしたが、私が大声で「あなた、あなた、倭子よ」と声をかけますと、臉が二、三回ピクピクと動きました。待っていてくれたのです。これが三七年つれそった私への別れの挨拶でした。

*つれづれなるままに

大学時代、肺結核を患い二年間、サナトリウムでの生活を強いられました。このため兵役をまぬがれ戦争にはいっておりません。親しい友人の何人かを失ったと聞いております。このことは彼の戦後の生き方を決めた重要な部分だと思っております。

結婚直後、主人の父から「賢二郎はロマンチストだから」と笑っていわれたことをよく覚えております（言外に苦勞するぞという意味があったようです）。

生活にゆとりができてからも、何事につけ質素な人でした。背広もぶらさがり専門で、たまには、身体に合わせてあつらえてはと、すすめる私に「僕はこれで結構」と結婚以来オーダーしたのは、喪服をふくめて五ノ六着位でしょうか。安物の背広を着ていても、根はおしゃれだったのでしょう、ネクタイだけは、時々、気に入ったのがあったと買ってきました。

年によって太目のが流行ったこともありましたが、細身一筋で、堀江正規先生の奥様からいただいた、グレーのものは、よく身につけさせていただきました。

そうです、こんなこともありました。ある時、用事で家にこられた旬報のIさんが帰られたあと、主人が私に向かっていいますのは、「このズボンそんなにひどいかなあ、I君に、「先生、そ

ういうズボン三〇〇〇円位でうっていますよ』といわれちゃった」と笑っていました。このコール天のズボンはお気に入りで、ぬがすのに苦労しました。

昭和五年から一年間、私達は、ロンドン生活を楽しました。主人にとっては、三回目のロンドンでしたが、外国は初めて、その上、飛行機も初めて、悪いことに好奇心だけは旺盛という私をつれての旅は、大変だったと思うのです。ロンドンでの生活は、主人は日本にいる時とあまり変わらず、ロンドン大学に行く以外は本を読んだり、タイプをたたいたりでした。私は近所のアダルトスクールに通ったお蔭か、徐々になれ、一人でどこへでも出かけられるようになりました。がヨーロッパ旅行はそうはいきません。私のために時間の許す限り、オランダ、フランス、ベルギー、イタリア等につれていってくれました。

日本を立つ前に、西洋史を勉強しておくようにと本まで渡されましたのに、ついつい準備に追われ、ロンドンにきてから泥縄式にやっても身につくはずはありません。一つの絵を見ても彫刻を見ても、描かれ、又、作られた歴史的背景がわかると感動の受け方も違います。主人は、「君は幸せだな、専用のガイド付でヨーロッパを旅行できるんだから」と言いながら、いやな顔もせずによく説明してくれました。

入院中、しばしば、「今ごろの蓼科はどうだろうなー」といっていましたので、一〇月一日の命日に私は思いきって、一人で山荘に出かけました。ちょうど一年振りになります。山の中の一

軒屋、憶病者の私をよく御存知の御近所の奥様が、「そんな淋しい所に、たった一人で行って大丈夫ですか」と心配して下さいました。が、地獄をみた者にとって、この世で怖いものはありません。山荘の台所で昼食の準備をしながら、二階に向かって「あなた、お食事ですよ」と叫んでみたり、ベットの上にたたまされ置かれているパジャマを抱きしめてみたり、内なる人との、たえまない対話は、私にある種の落ち着きを与えてくれました。四日間、こうして過ごすうちに、二階の机の中から、山荘の庭をえがいた水彩画が出てきました。描くことは好きで、二〜三年に一回位しか描けなかったと思うのですが、テレ屋の彼は私には見せませんでした。この本のグラフィアの最初の頁にのせたのがそれです。九月末まで近所のテニスクラブで走り廻っていたものから、いつまでもいつまでも生きてくれるものと思いつんでいた私が、迂闊でした。あと五年、やり残した仕事をし、絵や随筆を存分に書いて旅立ってほしかったと思います。

五月の一日(日)大学院生とOBの方においでいただき、子どもの頃から机上に置いて大事にしていました、ポインター犬の置物と一緒に、鎌倉靈園に納骨いたしました。

本当にたくさんのよい先輩・友人にめぐりあい、彼の一生は幸せだったと思い、感謝の念で一杯です。ただ主人の急逝でいろいろな方に御迷惑をおかけしたこと、あらためてお詫びいたします。若い頃は病弱で、もっと楽な生き方もできたと思うのですが、志を立てたそのときから、一貫してその思いを貫いたことに、妻としてではなく、一人の人間として、ほめてやりたいと思

ます。

ふりかえって、三七年を共にした私は幸せでした。主人はお墓のなかで（僕はもうゴメンダヨ）と逃げるかも知れませんが、でもきつと私が行ったら、くるりとふりむき「早かったな」「遅かったじゃないか」どちらのセリフになるかわかりませんが、大きく手を広げ、受けとめてくれるでしょう。最後に、後記しました西条八十の墓碑銘のように静かに眠ることが出来たら幸せだと思います。

われらたのしくこゝにねむる

離ればなれに生まれめぐりあひ

短かき時を愛に生きしふたり

悲しく別れたれどこにまた心となりて

とこしへに寄りそひねむる

西条八十 墓碑銘

「中林賢二郎先生を偲ぶ会」の記録

偲ぶ会の準備

一九八六年一月一日、中林賢二郎先生が急逝され、お通夜、密葬、法政大学社会学部葬と、あわたたしく、しかしとどこおりなく進んだ。中林賢二郎先生を偲ぶ会をもとうではないかという声が、いろいろな集まりで出始めたのは一月一七日の社会学部葬が終わった前後からである。中林先生の友人研究者たち、労働運動史研究会有志、中林ゼミ（含むOB）、かつての自主ゼミ（どうどうめぐりの会）、大原社研、社会学部有志などが主な「声」であった。同時に、そうした各方面の声をできるだけ一つにまとめようという動きも並行して出始めていた。そして、結局、発足したのが、「中林賢二郎先生を偲ぶ会」を実務的に企画、準備する実行部隊（以下、便宜上、事務局とよぶ）であった。

二月四日、最初の事務局会議が開かれ、事務局メンバーの構成、「偲ぶ会」の名称、日時、場所、内容、「偲ぶ会」の呼びかけ人依頼など多くの事が相談された。事務局メンバーは次の人た

ちて構成されることになった（敬称略）。塩田庄兵衛（労働運動史研）、但し代理として同研究会より栗田健、浅見和彦（中林ゼミ）、木下武男（中林ゼミOB）、飯島信吾（どうどうめぐりの会、労働旬報社）、佐保勲（大月書店）、岡松利治（労働者教育協会）、田沼肇（法大社会学部）、早川征一郎（大原社研）。以後、「偲ぶ会」当日の運営に至るまで、実際には事務局を中心にごを進めた。

他方、「偲ぶ会」の呼びかけ人をお願いし、「偲ぶ会」の案内状に名を列ねていただいた方は次のとおりであった。

- 代表 塩田 庄兵衛（立命館大学教授）
 田沼 肇（法政大学教授）
 戸木田 嘉久（立命館大学教授）
 二村 一夫（法政大学大原社会問題研究所所長）
 鳥居 俊夫（中央労働学園常務理事）
 辻岡 靖仁（労働者教育協会理事長）
 引間 博愛（運輸一般委員長）
 中西 五洲（建設一般全日自労委員長）
 浅見 和彦（中林ゼミナール）
 波多野 章（どうどうめぐりの会）

平 智 享（大月書店社長）

柳 沢 明 朗（労働旬報社社長）

山 本 功（新日本出版社社長）

この人たちの呼びかけによって、二月下旬、事務局をつうじ案内状が発送された。並行して事務局では、「偲ぶ会」当日の内容など準備を進めていった。もちろん、折にふれ御遺族、とくに中林倭子夫人とも御相談しつつ、準備が進められた。

「偲ぶ会」当日のこと

一九八六年三月二二日（土）午後三時三〇分～七時三〇分、神田一ツ橋にある日本教育会館九階・喜山において、「中林賢二郎先生を偲ぶ会」が開かれた。当日は約一五〇名近い方々が出席され、大変、盛大な会となった。学界、労働界、教え子たち、出版社、そして御遺族も含め、生前の中林先生の研究、活動分野にふさわしく、きわめて多彩な分野の方々が出席された。

会は、「第一部、中林先生、その研究、人と思ひ出」（司会田沼肇）と「第二部、中林先生を偲ぶパーティ」（司会早川征一郎）に分けられた。第一部では、まず中林先生の生前の研究活動について、四人の方々がそれぞれ話された。ここには、テーマと報告者のみ記し、内容は割愛させていただきます。

国際社会労働運動史研究について

手島 繁一（別掲）

労働組合論研究について

木下 武男（別掲）

労働運動史研究会と中林さん

塩田庄兵衛

大原社会問題研究所と中林さん

二村 一夫

このあと、各方面の方々から、中林先生、その人と思いが語られた。第二部のパーティでも同様であった。呼びかけ人の引間博愛氏、辻岡靖仁氏、柳沢明朗氏、旧制八高以来の友人である寺沢恒信氏、歴史家の犬丸義一氏、その他多くの方々から貴重な思い出話が語られたが、ここまでは内容、人とも詳細は割愛させていただく。

かくして、予定の七時半、偲ぶ会は閉会した。ただ盛大だったというだけでなく、多方面の方のお話をつうじ、生前の中林先生のいろいろな側面が改めて浮き彫りにされたという意味でも、大変、意義深い集まりであった。

なお「偲ぶ会」が終わったのち、事務局メンバーのうち若干名の異動があったが、今回の追悼文集の刊行委員会が発足した。その意味で、追悼文集と刊行委員会は、「偲ぶ会」と事務局のいわば一つの必然的発展の産物であり帰結でもあったということができる。（早川征一郎記）

あとがき

一九八六年三月に開かれた「中林賢二郎先生を偲ぶ会」の記録にも明らかのように、この集まりの前後から、中林先生の追悼文集をだしたいという声がひろがった。その後、主として中林ゼミOBや「偲ぶ会」事務局有志などを中心に、追悼文集の刊行について相談をすすめ、六月四日に「中林賢二郎先生追悼文集刊行委員会」が発足した。メンバーは、つぎのとおりである。田沼肇（代表、法政大学教授）、五十嵐仁（事務局責任者、法政大学大原社研研究員）、早川征一郎（法政大学大原社研教授）、木下武男（法政大学講師）、手島繁一（法政大学講師）、佐々木太郎（法政大学大学院）、浅見和彦（法政大学大学院）、飯島信吾（労働旬報社）、佐保勲（大月書店）、田辺崇博（学習の友社）。

書名は、『追憶 中林賢二郎』とすること、内容は、『敗戦日誌』（中林先生自筆）、「法政大学社会学部葬における弔辞」、「業績を偲ぶ」、「追悼・中林さん」、「親族による思い出」、「その他」の六部構成とすること、などを合意した。

六部構成のうち、「業績を偲ぶ」には、戸木田嘉久氏の既発表の論稿が収録されているほか、

国際社会労働運動史研究について、労働組合論研究については、中林先生の指導をうけた若い研究者たちが共同で作業し、一九八六年三月の「偲ぶ会」で発表したものである。

「追悼・中林さん」には、追悼文集刊行委員会のよびかけにこたえて、全国から五人のかたがたが寄稿してくださった。文章はできるだけ年代順に編集したが、刊行委員会としては、中林先生の全生涯をほぼカバーする思い出が綴られたと判断している。寄稿してくださったみなさまに、厚く謝意を表する次第である。

「追悼・中林さん」の原稿締切りを一九八六年九月末日とさせていただいたほか、字数を二〇〇字詰原稿用紙七〜八枚に制限し、それぞれの表題も、なるべく執筆者につけてくださるようお願いしたが、みなさまのご協力を、中林先生にもご報告しておきたいように思う。

なお、既発表の論稿を転載するにさいしては、初出紙誌を明らかにした。転載を心よく了承しただきった関係者にお礼を申し上げます。また法政大学大原社会問題研究所、同社会学部資料室、労働旬報社には、ひとかたならぬお世話になったことをここに記し、感謝をささげたい。

(田 沼 肇 記)

- 〈青年講座〉労働組合 その歴史と役割⑥ 国際労働運動がしめす政党と労働組合の関
係⑥ 「労働運動」第234号、1985年5月号
- 〈青年講座〉労働組合 その歴史と役割⑦ 労働組合の組織形態 「労働運動」第235号、
1985年6月号
- 〈青年講座〉労働組合 その歴史と役割⑧ 団結権・争議権獲得の歴史は何を教えるか
「労働運動」第236号、1985年7月号
- 〈青年講座〉労働組合 その歴史と役割⑨ ストライキ闘争と労働組合 「労働運動」
第237号、1985年8月号
- 〈青年講座〉労働組合 その歴史と役割⑩ 政治闘争と経済闘争の結合 「労働運動」
第240号、1985年11月号
- メーデー——そのたたかひの歴史 学習の友編集部編『メーデーの歴史に学ぶ』学習
の友社、1985年3月
- 堀江正規さん——その人と仕事 「あれから10年、堀江正規さんをしのぶ」堀江正規
さんをしのぶ会、1985年8月
- 『国際労働運動史』の出版によせて 『『国際労働運動史』読書ノート』協同産業(株)出版
部、1985年9月

〔作成責任者＝浅見 和彦〕

☆ 先生が筆名や無署名で書かれたものや執筆分担不明のものは収録されていません。このリストに
載っていないもの（筆名や無署名で書かれたものを含めて）をご存知の方、また誤りに御気付きの
方は下記あてご連絡いただきたいと思います。

〒174 東京都板橋区前野町1-20-1-715 浅見 和彦

リレー時評・国鉄赤字の責任は 「日高教情報」第889号, 1982年6月1日
イギリス労働組合運動における職場組織と職場委員 「研究資料月報」第288号, 1982年8月

現代労働組合組織論① 現代日本労働組合運動と職種別・職業別団結 「賃金と社会保障」第849号, 1982年9月

リレー時評・組合民主主義こそ団結の前提 「日高教情報」第892号, 1982年7月21日

リレー時評・正念場迎える労働戦線統一問題 「日高教情報」第895号, 1982年9月11日

イギリスにおける社会民主党結成と労働党 「研究資料月報」第288号, 1982年8月

リレー時評・人勸凍結とTUCの闘争 「日高教情報」第898号, 1982年10月11日

* 1983年

書評の世界・待望の社会・労働運動史書の登場——塩田庄兵衛『日本社会運動史』

「労働法律旬報」第1063・1064号, 1983年1月

日本の労働組合運動の将来について 岩波書店編集部編『これからどうなる——日本・世界・21世紀』岩波書店, 1983年5月

イギリスの労働者と生活 日本女子大社会福祉学科卒業生の会「みどり会ニュース」第39号, 1983年7月20日

* 1984年

イギリス運輸一般規約から学ぶ: 「月刊TGU」第230号, 1984年1月号

階級的労働運動を主敵とする運動史——「労働運動の理念」批判 「労働運動」第222号, 1984年5月臨時増刊号

イギリスにおける失業とそれをもたらした諸要因 舟橋尚道編著『現代の経済構造と労使関係』総合労働研究所, 1984年5月

〈青年講座〉労働組合 その歴史と役割① 労働運動は酒場からはじまった 「労働運動」第228号, 1984年11月号

〈青年講座〉労働組合 その歴史と役割② 労働運動の発展には科学的社会主義の理論が必要 「労働運動」第229号, 1984年12月号

* 1985年

〈青年講座〉労働組合 その歴史と役割③ 組合運動内における諸潮流と自覚的活動家の任務 「労働運動」第231号, 1985年2月号

〈青年講座〉労働組合 その歴史と役割④ 国際労働運動がしめす政党と労働組合の関係④ 「労働運動」第232号, 1985年3月号

〈青年講座〉労働組合 その歴史と役割⑤ 国際労働運動がしめす政党と労働組合の関係⑤ 「労働運動」第233号, 1985年4月号

イギリスでも進む組合の企業内化政策 「労働運動」第175号, 1980年7月号
旅について くるみ会誌「塑像」戦後復刊初号, 通算第5号, 1980年11月
新たな胎動示すイギリス労働者——経済危機と労働運動 「賃金と社会保障」第808号,
1980年12月

***1981年**

イギリス通信⑨ イギリス労働運動と「民主的対案」 「損保調査時報」第112号, 1981
年1月

イギリス通信⑩ イギリス労働運動とトニー・ベン 「損保調査時報」第113号, 1981
年1月

イギリス通信⑪ マス・メディアと労働運動 「損保調査時報」第114号, 1981年3月

イギリス通信⑫ 炭鉱労組とサッチャー内閣のUターン 「損保調査時報」第115号,
1981年4月

イギリス通信⑬ イギリスと日本と 「損保調査時報」第116号, 1981年5月

イギリス通信⑭ イギリスの労働組合運動から学ぶもの 「損保調査時報」第118号,
1981年6月

イギリス通信⑮ フランス、イギリスの政権構想と日本 「損保調査時報」第119号,
1981年7月

イギリス通信⑯ サッチャー政権と拡大する暴動 「損保調査時報」第120号, 1981年8月

イギリス通信⑰ イングリッシュ・ジョークと労働運動 「損保調査時報」第121号,
1981年9月

イギリス通信⑱(最終回) イギリス労働運動の原点 「損保調査時報」第122号, 1981年10月
塩田庄兵衛編『改訂労働問題講義』, 『労働問題の成立と展開』, 青林書院新社, 1981年3月
サッチャーの「屈辱的な譲歩」と労働者の戦闘化 「学習の友」1981年5月号
深化するイギリス政治・経済の危機 「経済」1981年8月号

イギリスの失業と暴動 「婦人通信」第260号, 1981年9月号

***1982年**

イギリス労働運動の新たな画期——その背景と運動の諸相 「社会労働研究」第28巻
3・4号, 1982年3月

イギリスの情勢推移に学ぶ(上) 「月刊TGU」全日本運輸一般労働組合, 第209号, 1982
年4月号

イギリスの情勢推移に学ぶ(下) 「月刊TGU」第210号, 1982年5月号

リレー時評・あいつが災害と労働組合 「日高教情報」日本高等学校教職員組合, 第
886号, 1982年5月1日

コミンテルン史研究の現況と「歴史の偽造」——立花隆氏への反論——『特高史観と

歴史の偽造 立花隆「日本共産党の研究」批判』日本共産党中央委員会出版局、1978年10月
組織方針からみた79春闘への提言 「賃金と社会保障」第760号、1978年12月
組織論的視点の再検討と地域共闘問題 「労働運動」第156号、1978年12月号

*1979年

特集 第三回中央幹部学校 79春闘の諸課題 「季刊 学習」全日本自由労働組合、第
11号、1979年3月

国際労働運動史 『大月経済学辞典』大月書店、1979年4月

プロフィンテルン 『大月経済学辞典』大月書店、1979年4月

労働運動史(各国の) 2 イギリス 『大月経済学辞典』大月書店、1979年4月

労働運動史(各国の) 4 ドイツ 『大月経済学辞典』大月書店、1979年4月

労働運動史(各国の) 6 フランス 『大月経済学辞典』大月書店、1979年4月

労働運動の前進・後退をめぐるイギリス左派内の論争 「資料宝報」第256号、1979年6月
<シンポジウム>地域別、産業別共闘をめぐる(基調報告) 「労働運動」第162号、
1979年6月号

戦後労働組合運動の到達点と教訓 「労働者教育協会会報」、第23号、1979年8月

労働組合の“原点”に立ち返り 「賃金と社会保障」第783号、1979年12月

新たな労資協調体制と労働戦線統一の問題 「学習の友」1979年12月号

*1980年

<座談会>いまなぜ統一労組懇の運動強化が重要か(引間博愛、中西五洲と) 「労働運
動」第170号、1980年2月号

イギリス通信① 5・14全国統一闘争デーへむけ闘いを強める労働組合 「損保調査
時報」全日本損害保険労働組合、第103号、1980年3月

イギリス通信② 5月14日・TUCの統一行動日 「損保調査時報」第105号、1980年5月

イギリス通信③ イギリスの銀行・保険業と労働組合 「損保調査時報」第106号、
1980年6月

イギリス通信④ イギリスの労働組合の組織の特徴 「損保調査時報」第107号、1980
年7月

イギリス通信⑤ イギリス労働組合の職場組織 「損保調査時報」第108号、1980年8月

イギリス通信⑥ TUC第112回大会 「損保調査時報」第109号、1980年9月

イギリス通信⑦ 現代イギリスの失業問題 「損保調査時報」第110号、1980年11月

イギリス通信⑧ イギリスの労働組合と政党 「損保調査時報」第111号、1980年12月

労働運動の質的転換のための条件——今日における地域共闘の階級的意義 「賃金と社会保障」第711号、1976年10月

労働組合と政党との正しい関係——ヨーロッパの労働運動の経験から学ぶ 「労働運動」第131号、1976年11月号

アムステルダム——抵抗戦士の碑をめぐって 「法政」第268号、1976年12月号

* 1977年

VILÉM KAHANの研究によるコミンテルン最高諸機関の構成員 「資料室報」第232号、1977年2月

多読して基礎学力を養おう 「法政」第271号、1977年4月号

青年が胸にひそめている鋭い社会批判——新入組合員を迎えた組合活動家諸君に 「労働運動」第137号、1977年5月号

メーデーの歴史——第48回メーデーを迎えて—— 「月刊全自運」全国自動車運輸労働組合、第150号、1977年5月号

『勤労者通信大学 特別コース 労働組合運動』第1課 勤労者通信大学、1977年6月
文化・図書せいせん 谷川巖『日本労働運動史』 「学習の友」1977年7月号

「連合時代」と総評運動——「^①連合時代^②」に対応する大胆な政治運動の展開」は可能か 「労働法律旬報」第934・935号、1977年9月

転機にたつ労働組合運動と統一戦線（パンフレット）東京学習会議、1977年11月

世界労連開催の1953年の国際社会保障会議に関する資料 「資料室報」第239号、1977年11月

新刊紹介 松尾章一著『日本ファシズム史論』 「法政」第278号、1977年12月号

労働運動の転換と前進課題——政治革新につながる諸努力 「賃金と社会保障」第736号、1977年12月

* 1978年

1945～50年の時期における金属労働運動のあらましと若干の問題点 総評全国金属労働組合編『全国金属の歴史をかえりみて』全国金属労働組合、1978年5月

シャトー・ド・フォンテーヌブローの庭（写真と文） 「法政」第279号、1978年1月号
新しい組織形態——「一般労働組合」の意義——その現実的基礎と必然性について

「労働法律旬報」第246号、1978年7月

アレン・ハット 「イギリス労働組合運動小史」第6版の増補部分について 「資料室報」第246号、1978年7月

第1課学習の重点 勤労者通信大学「月報」第1号、1978年7月15日

記念講演・新しい組織形態としての「建設一般」の意義 「建設一般」建設・資材・一般労働組合協議会、第20号、1978年10月

第2半インタナショナルの「政綱」と「決議」「資料室報」第211号、1975年2月
合評座談会・「風雪のあゆみ」(第二部)を読んで「前衛」第380号、1975年3月号
第2半インタナショナルの指導理論とその組織成立の過程「社会労働研究」第21巻
3・4号、1975年3月

堀江正規さんの死を悼む「賃金と社会保障」第674号、1975年5月

問答 まなぶ・ともこの労働組合とは「学習の友」1975年7月号

だれにでもわかる労働組合のはなし「赤旗日曜版」1975年7月6日-11月16日連載
20回

内外の労働運動の経験と統一戦線「建設」東京土建一般労働組合、第4号、1975年
9月

平和と民主主義をめざす世界の労働運動「婦人通信」1975年10月号

日本科学者会議編『講座＝現代人の科学——危機にたつ戦後世界』第7巻、「先進資本主
義諸国の労働運動と階級闘争」、大月書店、1975年11月

春闘・労働運動の前進のために「賃金と社会保障」第687号、1975年12月

*1976年

「危機における労働運動——その前進と後退」を特集するにあたって「労働運動史研
究」第58号、1976年1月

スト権闘争勝利の展望と統一戦線「学習の友」1976年2月号

〈シンポジウム〉経済危機のもとでの労働組合運動(戸木田嘉久、高木督夫)「労働
運動」第122号、1976年2月号

私の発言「労働運動」第123号、1976年3月号

第二インタナショナルの再建と3つのインタナショナルのベルリン協議会「社会労
働研究」第22巻3・4号、1976年3月

日本の大学・イギリスの大学ハリソン教授に聞く(ロイドン・ハリソン、二村一夫、
岡本秀昭との座談)「法政」第260号、1976年2・3月合併号

コミンテルン史研究の現況と「歴史の偽造」立花隆氏への反論「朝日ジャーナル」
1976年3月19日号

書評『報知闘争の記録』「労働法律旬報」第901号、1976年4月

労働・社会主義インターナショナル規約「資料室報」第224号、1976年5月

統一戦線運動の国際的経験と労働組合の闘争——「連敗春闘」の総括によせて「労働
運動」第129号、1976年9月号

記念講演・革新統一戦線とはたらく婦人の役割 第21回はたらく婦人の中央集会(記
録)実行委員会「はたらく婦人は前進する」1976年9月

さまざまな反共主義・労資協調主義との闘争 「労働農民運動」第92号, 1973年10月号
セミナー これからの労働運動③ 先進資本主義諸国における労働運動 「月刊労農
のなかま」全国農業協同組合労働組合連合会, 1973年10月号

現代イギリス労働組合運動の新しい傾向とジャック・ジョーンズ 「資料室報」第198
号, 1973年11月

〈翻訳〉ジャック・ジョーンズ「70年代の労働組合運動」『資料室報』第198号, 1973年11月

〈翻訳〉ジャック・ジョーンズ「民主主義は成長する組合の活力」『資料室報』第198号,
1973年11月

* 1974年

講座・労働組合入門⑦ 政治闘争と経済闘争の結合 「労働法律旬報」第848号, 1974年1月

講座・労働組合入門⑧ 政党と労働組合 「労働法律旬報」第849号, 1974年1月

〈座談会〉戦後の大原社会問題研究所と労働年鑑(田沼肇, 二村一夫, 舟橋尚道などと)
『資料室報』第200号, 1974年1月

社会主義協会「向坂派」の「統一戦線」論を批判する 「労働農民運動」第97号,
1974年2月号

講座・労働組合入門⑨ 労働組合とストライキ闘争 「労働法律旬報」第853号, 1974年3月
メーデーの歴史に学ぶ——第45回メーデーをむかえて 「学習の友」1974年5月号

〈翻訳〉わが組合の活動——運輸一般労組の活動内容と活動方法 「建設一般 資料」
第1号, 1974年7月

“テニス馬鹿”復帰の弁 「法政」第245号, 1974年7月号

政治革新のための統一戦線と労働組合における「政党支持」問題 「労働法律旬報」
第865号, 1974年9月

グラフ学習・世界と日本の労働者と労働組合の現状 「学習の友」別冊「労働組合の
基礎知識」1974年10月

労働組合運動と統一戦線 「高教組時報」日本高等学校教職員組合, 第19号, 1974年11月
イギリス運輸一般労働組合の教訓と建設一般の課題 「建設一般」資料, 建設・資材・
一般労働組合協議会, 第4号, 1974年11月

労働戦線「再編・統一」運動の歴史的考察 「労働運動史研究」第57号, 1974年12月

労働組合と政党 みんなの労働組合教室② 「労働農民運動」第108号, 1974年12月号

* 1975年

労働者階級とはなにか 『働くものの学習基礎講座』付録, 学習の友社, 1975年
ずいひつ・「自覚ある労働者」とは 『働くものの学習基礎講座』付録, 学習の友社,

1975年

「義教育」全国民主主義教育研究会、1972年10月号

ハイヤー・タクシー・観光バス運転手の労働移動 「資料室報」第187号、1972年10月
〈翻訳〉1920年2月3～8日アムステルダム開催の第三インタナショナル協議会（議事録）「資料室報」第187号、1972年10月

最近のイギリス労働運動 春闘民間共闘幹部講座 「月刊総評」第185号、1972年11月号

* 1973年

労働戦線再編運動の現段階とその展望 「労働法律旬報」第825号、1973年1月
ゲ・エム・アディベコフ著、梅田美代子訳『プロフィンテルン小史』国民文庫への
「解説」 大月書店、1973年3月

春闘講座・七三年春闘と労働戦線統一問題 練馬区労働組合協議会編「学習テキスト
七三年春闘講座講義メモ」1973年4月

協会派の反共性への「弁明」——「労働組合と政治闘争」について 「労働農民運動」
第87号、1973年5月号

労働組合運動と組織について 「第1回中央労働学校講義要綱」全日本自由労働組合、
1973年5月

労働者階級とはなにか 「学習の友」1973年5月号

現代の政治革新と労働運動——三野党連合政権構想と労働運動の課題 「賃金と社会
保障」第638号、1973年11月

デグラスのコミンテルン資料集とその邦訳について 「歴史学研究」第402号、1973年
11月号

読書案内・国際労働者階級の運動の発展に確信——『コミンテルンの歴史』プロフィ
ンテルン小史」「労働農民運動」第95号、1973年12月号

革新統一戦線と労働組合の役割 『現代の労働組合運動』第4集、大月書店、1973年
6月

講座・労働組合入門① 労働組合への団結 「労働法律旬報」第835号、1973年6月

講座・労働組合入門② 団結の経済的基礎 「労働法律旬報」第837号、1973年7月

講座・労働組合入門③ 労働者の団結権 「労働法律旬報」第839号、1973年8月

講座・労働組合入門④ 不団結と分裂の要因 「労働法律旬報」第841号、1973年9月

講座・労働組合入門⑤ 労働組合の組織形態 「労働法律旬報」第844・845号、1973
年11月

講座・労働組合入門⑥ 国際労働組合組織とわが国労働組合運動 「労働法律旬報」
第846号、1973年12月

Japanese Trade Union Upsurge・Labour Monthly, August 1973.

連合会，大学生協，1970年2月
統一の力 「学習の友」1970年3月号
70年代の労働問題 「新劇人」安保体制打破新劇人会議，第3号，1970年5月
座談会・産別会議の再検討——『産別会議小史』をめぐって 「労働運動史研究」第53号，1970年12月

*1971年

労使関係法反対闘争をつうじて前進するイギリス労働組合運動 『現代の労働組合運動』第1集，大月書店，1971年11月
アムステルダムの国際社会史研究所にて 「資料室報」第170号，1971年3月
エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』国民文庫(1)への「解説」大月書店，1971年4月
世界の若者たち・静かなデモのいわれ 「学習の友」1971年9月号
労働戦線再編運動の性格と経緯 「労働法律旬報」第789号，1971年9月
ずいそう・国際社会史研究所のことなど 「経済」第90号，1971年10月号
国際労働運動における労働貴族 「労働農民運動」第67号，1971年10月号
コミンテルンのアムステルダム・サブビューローと1920年2月の国際協議会について 「資料室報」第178号，1971年12月

*1972年

団結は労働者のいのち——権利闘争の歴史から 「労働農民運動」第71号，1972年2月号
勝利したイギリス炭鉱労組の7週間ストライキ 「労働農民運動」第73号，1972年4月号
ヨーロッパの労働組合の組織形態の特徴：イギリス 「労働農民運動」第74号，1972年5月号
対談・日本の労働組合組織の問題点をえぐる——企業別組織の歴史的形成と弱点の克服 「労働農民運動」第74号，1972年5月号
*総がかり春闘方式*の発展によせて——イギリス炭鉱ストに関連して 「賃金と社会保障」第604号，1972年6月
右翼的潮流の支配の動揺と破綻——大英帝国の没落とイギリス・プロレタリアート—— 『現代の労働組合運動』第2集，大月書店，1972年6月
戦線統一・生活闘争と総評労働運動——総評大会と日経連の共同歩調よびかけをめぐって 「賃金と社会保障」第609号，1972年9月
民主主義教育に期待するもの——ラディカリズムの問題とかがわって—— 「民主主義

1968年3月号

戦後労働組合運動の国際的連帯関係 「社会政策学会年報」第15集, 1968年4月
統一戦線史論——そのいくつかの問題点 「労働運動史研究」第48号, 1968年4月
労働組合の組織にかんする調査報告(一) 全国金属労組の組織の発展とその組織活動
の現段階 「資料室報」第140号, 1968年5月
労働組合の組織にかんする調査報告(二) 全国金属労組の支部組織の実態(原薫との
共同執筆) 「資料室報」第141号, 1968年6月

* 1969年

コミンテルン・イギリス支部を形成した諸潮流 「資料室報」第149号, 1969年3月
労働者階級の伝統とメーデー・スローガン 「機関紙通信」第2620号, 1969年4月22日
社会運動の半世紀展(大原社会問題研究所主催の展示会パンフ, 太島清, 二村一夫と
の共同執筆) 朝日新聞社, 1969年5月

みんなの学習ろくおん室⑤ メーデーとはなんでしょう? 「学習の友」1969年5月号
サンフランシスコ体制下の労働組合運動と統一行動の発展 「労働運動史研究」第50
号, 1969年6月

きずかれた国際連帯のきずな 戦後労働組合運動の歴史⑩ 「労働農民運動」第43号,
1969年10月号

新安保体制のもとで 戦後労働組合運動の歴史⑫ 「労働農民運動」第45号, 1969年
12月号

資本主義のもとでの労働組合運動についてのマルクス・エンゲルス・レーニンの理論
(要旨, 解説) 『労働組合運動の理論』の宣伝パンフ, 大月書店, 1969年
ストライキ戦術とマルクス=レーニン主義(要旨, 解説) 『労働組合運動の理論』の
宣伝パンフ, 大月書店, 1969年

* 1970年

コミンテルンの成立——初期コミンテルン史をめぐって 「労働運動史研究」第51号,
1970年1月

イギリス共産党の成立 「労働運動史研究」第51号, 1970年1月

「70年」をむかえる労働者階級と人民の闘いのあらたな前進 戦後労働組合運動の歴史
⑬ 「労働農民運動」第46号, 1970年1月号

読書・上杉重二郎著『ドイツ革命運動史』(上)(下) 「エコノミスト」1970年1月27日号
討論・運動史からなにを学ぶか 戦後労働組合運動の歴史⑭ 「労働農民運動」第47
号, 1970年2月号

社会科学の学習によせて——社会科学と空想—— 「'70 生協のしおり」生活協同組合

エンゲルス、コクリンの手紙についての総評議会の声明

マルクス、『イースタン・ポスト』編集者へ

マルクス、『イースタン・ポスト』編集者へ

マルクス、『イースタン・ポスト』編集者へ

インタナショナルとパリ・コミューンにたいしてブルジョア新聞が流布した中傷に反論するマルクスの演説の報道

『マルクス＝エンゲルス全集』第17巻、大月書店、1966年8月
労働組合運動の歴史的役割について 「労働運動史研究」第45号、1966年10月
コミンテルン第13回プレナムについて 「資料室報」第125号、1966年12月
企業を通じてみた労働力の需給と移動の実態 大原社会問題研究所編『中小企業の賃金と労働市場』労働旬報社、1966年12月

* 1967年

戦後における世界労働運動の歴史と現況(上) 「月刊アジア・アフリカ研究」アジア・アフリカ研究所、第70号、1967年2月

戦後における世界労働運動の歴史と現況(下) 「月刊アジア・アフリカ研究」第71号、1967年3月

戦後労働組合の国際連帯史の5つの時期 「労働運動史研究」第47号、1967年4月
国際労働運動と産業再編成 「エコノミスト」1967年4月20日号

労働運動のあゆみ① 「機関紙通信」機関紙連合通信社、第2328号、1967年5月13日

労働運動のあゆみ② 「機関紙通信」第2329号、1967年5月16日

労働運動のあゆみ③ 「機関紙通信」第2331号、1967年5月20日

労働運動のあゆみ④ 「機関紙通信」第2334号、1967年5月27日

労働運動のあゆみ⑤ 「機関紙通信」第2335号、1967年5月30日

労働運動のあゆみ⑥ 「機関紙通信」第2336号、1967年6月1日

カール・ヨネダ著『在米日本人労働者の歴史』への序文(塩田庄兵衛との共同執筆)
新日本出版社、1967年6月

ウィリアム・ベンボウとその「グランド・ナショナル・ホリデー」について 「資料室報」第134号、1967年10月

〈討論〉労戦統一の国際的経験と教訓(宮田光雄、小森良夫と) 「労働農民運動」第21号、1967年12月号

* 1968年

戦後における政党と労働組合 「季刊労働法」第67号、総合労働研究所、1968年3月
労働組合と政党——その関係を原則的なものにするために 「労働農民運動」第24号、

岡谷・諏訪工業地帯における労働力の需給と移動の実態(一) (舟橋尚道との共同執筆)

「資料室報」第117号, 1966年2月

岡谷・諏訪工業地帯における労働力の需給と移動の実態(二) 「資料室報」第118号,

1966年4月

日本のベトナム侵略加担と労働者人民のたたかい (山田昭との共同執筆) 『新段階の

ベトナム戦争』労働旬報社, 1966年3月

歴史をくりかえさせてはならない 「労働運動史研究」第43号, 1966年4月

総評 「日本の巨大組織」朝日ジャーナル編, 勁草書房, 1966年5月

誌上学習会・戦争と労働組合 (市川敏, 井上忠雄, 吉村英との座談) 「学習の友」

1966年8月号

〈翻訳〉マルクス=エンゲルス、『タイムズ』編集者へ

マルクス、『タイムズ』その他の諸新聞編集部にたいする総評議会の声明

マルクス、『ウェルカー』編集部へ

マルクス、『タイムズ』編集者へ

マルクス、『ベル・メル・ガゼット』編集者への手紙

マルクス、『タイムズ』編集部にたいする総評議会の声明

マルクス、『スタンダード』編集部への総評議会の手紙

エンゲルス、『スペクテーター』および『エグザミナー』編集部への総評議会の
手紙

マルクス、『デイリー・ニュース』編集者へ

マルクス、『ベル・メル・ガゼット』編集者フレデリック・グリーンウッドへの
手紙

マルクス、『モーニング・アドヴァタイザー』編集者へ

マルクス、『スタンダード』編集者へ

マルクス、『タイムズ』編集部への添え状

エンゲルス、『タイムズ』編集者へ

マルクス、『アンテルナシオナル』編集者へ

マルクス、『パブリック・オピニオン』編集者へ

マルクス、『パブリック・オピニオン』編集者へ

マルクス、『ゴロア』編集者へ

マルクス、『サン』編集者チャールズ・デーナへの手紙

マルクス、『ヴェリテ』編集者へ

マルクス、『イーヴニング・スタンダード』編集者へ

戦後労働運動史(9)国際労働運動 「学習の友」1961年3月号

産業別統一と政治的統一闘争——総評新方針案を中心に 「月刊労働問題」第39号、
1961年8月

戦後労働運動史(14)勤評闘争から警職法闘争へ 「学習の友」1961年9月号

* 1962年

書評・荒畑寒村訳『コミンテルン・ドキュメント』I 「労働運動史研究」第30号、
1962年3月

〈翻訳〉J. M. バディッシュヨ「アメリカ労働者階級構成の変化」 「月刊労働問題」第49
号、1962年6月

* 1963年

国際路線は第三勢力論——総評はどこへ行く 「エコノミスト」1963年7月23日号
それが知りたい・「労働憲章」とは 「学習の友」1963年12月号

* 1965年

はたらくものの生活と政治 「学習の友」1965年3月号

日本の巨大組織④ 総評 「朝日ジャーナル」第7巻第14号、1965年4月4日号

イギリスの初期労働運動にかんする新しい解釈について 「資料室報」第109号、1965
年5月

アレン・ハット著「イギリス労働組合運動小史」第5版について 「労働運動史研究」
第38号、1965年5月

共同研究・戦後労働組合運動史、戦後労働運動の出発点(上) 「労働運動史研究」第
38号、1965年5月

共同研究・戦後労働組合運動史、戦後労働運動の出発点(下) 「労働運動史研究」第
39号、1965年7月

国際労働運動でアメリカ労働組合幹部が果たしてきた役割 「労働運動史研究」第41号、
1965年11月

E. J. ホブズボウム「1850年以後のイギリス労働運動の諸潮流」について 「資料室
報」第115号、1965年12月

『世界労働運動の歴史』から学ぶ、著者・中林賢二郎氏をかこんで 「青年運動」日本
民主青年同盟、1965年12月号

問題提起・労働戦線統一について 「トラック運輸労働」全国自動車運輸労働組合、
1965年12月6日特別号

* 1966年

戦争と労働者階級 「労働法律旬報」第585号、1966年1月

史——』への「解説」 合同出版社、1958年9月

国際労働情勢・タ・ハ法以来の反組合法ケネディ・アイヴス法案の悲喜劇 「労働法律旬報」第321号、1958年9月

国際労働事情・インドネシア労組のオランダ人企業国有化のたたかい 「労働法律旬報」第324号、1958年10月

警職法「改正」反対運動と労働者階級 「思想」岩波書店、第416号、1959年2月号
調査報告・日本の政治的底流——国民運動と地方選挙—— 「中央公論」1959年6月号

イタリアの労働プラン——大衆闘争を土台とした構造的改良の闘い「労働と経済」、1959年7月号
〈翻訳〉J・キャンベル『新資本主義の幻想——労働運動からの諸問題』合同出版社、1959年10月

日常的利害と長期的利害 「思想」第426号、1959年12月号

* 1960年

安保条約改定反対闘争と国会 「思想」第427号、1960年1月号

ソ連の七ヵ年計画と世界の明日 「月刊炭労」日本炭鉱労働組合、1960年2月号

特別調査・総評と全労（北川隆吉、笹木弘、増島宏、佐藤竺、松下圭一との共同執筆）
「中央公論」1960年4月号

社会主義化の現実的課題、統一戦線の歴史的考察「横浜国立大学新聞」1960年5月15日号
シンポジウム・三池争議のそのなかから 「エコノミスト」1960年5月17日号

労働運動の質的転換 「労働法律旬報」第384号、1960年6月

総評と全労（北川隆吉、笹木弘、増島宏、佐藤竺、松下圭一との共同執筆） 白井吉
見編集・解説『現代教養全集』筑摩書房、1960年7月

組合分裂の傾向をめぐって——運動史的側面よりの考察(1) 「月刊労働問題」第26号、
1960年7月

現地ルボ・定保闘争の高まりと日教組大会 「教育評論」日本教職員組合、1960年7月号
世界と日本はどううごく（朝野勉、堀江正規、吉谷泉、佐藤重雄との共同執筆）「教
育評論」1960年8月号

組合分裂の傾向をめぐって——運動史的側面よりの考察（2・完）「月刊労働問題」
第30号、1960年11月

* 1961年

春闘にのぞむにあたってアメリカ鉄鋼ストのおしえるもの 「労働法律旬報」第404号、
1961年1月

戦後労働運動史(8)国際労働運動 「学習の友」1961年2月号

〈翻訳〉ジェームズ・クラクマン、「イギリス共産党の創立」 「労働運動史研究」第26号、
1961年3月

- 『イギリス通信——経済危機と労働運動』、学習の友社、1981年9月
 『現代の労働組合運動論講座』、『ヨーロッパの労働組合運動』、学習の友社、1982年8月
 『日本の労働組合運動』第5巻、『企業別組合と現代労働組合運動の組織論的課題』、大月書店、1985年6月

II. 論文, その他

*1940年代

- 北方のヒューマニスト——トーマス・モアをめぐる—— 『饗宴』日本書院、1947年9月号
 社会民主主義と社会化の諸問題——イギリスの産業国有化をめぐる—— 『思想問題研究』第2巻、第11・12号、1947年12月
 世界復興一ヶ年の回顧・英国 『季刊大学』第5号、1948年3月
 英国産業再建の方式 政治経済研究所、1948年11月

*1950年代

- 現代史 歴史学研究会編『歴史学の成果と課題』(1949年歴史学年報) 岩波書店、1950年8月
 中近東におけるアメリカ資本 『世界経済』1950年11月号
 再軍備の重圧に苦悩するイギリス経済 『日本経済情報』日本経済出版社、1951年1月号
 <翻訳>デュ・ボシ 『政経国際資料』第11集、政治経済研究所、1951年6月
 イランとエジプトにおける民族解放闘争 岡倉古志郎・鈴木正四編『民族解放統一戦線——アジアの現状分析——』三一書房、1953年11月
 1945-49年における上海労働者の闘争 『歴史評論』1957年10月号
 第4回世界労働組合大会について 『労働運動史研究』第9号、1958年
 <翻訳>ヴェラ・シュラクマン『企業と給料取り』、『事務労働者の地位とイデオロギー』 『現代の中間階級』大月書店、1958年2月
 技術革新がもたらす新潮流 『エコノミスト』毎日新聞社、1958年6月7日号
 <翻訳>ジェームズ・クルーグマン『国有化と国家』 井汲卓一編『国家独占資本主義』大月書店、1958年7月
 国際労働事情、『情勢の評価』によせて——アメリカ、イギリス労働者の闘い 『労働法律旬報』第318号、1958年8月
 J・ブリュア、M・ビオロ著、小出俊訳『フランス労働運動史——労働総同盟(CGT)小

中林賢二郎著作目録

I. 主要単行書 (含む共著)

- 『現代マルクス主義——現代革命の諸問題』Ⅲ, 『社会民主主義と共産主義』, 大月書店, 1958年7月
- 『戦争と労働者階級』, 春秋社, 1959年
- 『学習テキスト・統一と団結』(塩田庄兵衛監修), 学習の友社, 1961年2月
- 『学習講座・社会科学の基礎』第2巻, 『世界労働運動史』, 青木書店, 1963年11月
- 『講座現代——社会主義世界の形成』3, 『社会主義世界と日本』, 岩波書店, 1963年9月
- 『講座現代——現代の民衆』11, 『独占資本主義国における労働者階級の運動』, 岩波書店, 1964年1月
- 『世界労働運動の歴史 上』, 労働旬報社, 1965年7月
- 『世界労働運動の歴史 下』, 労働旬報社, 1965年9月
- 『現代日本とマルクス主義』Ⅱ, 『統一戦線論』, 青木書店, 1966年3月
- 『ドゴール体制下の労働運動と五月ゼネスト』, 『ドゴール体制とフランス労働者の五月ゼネスト』, 労働旬報社, 1969年3月
- 『労働組合運動の理論——労働組合の役割』第1巻, 『資本主義のもとでの労働組合運動についてのマルクス・エンゲルス, レーニンの理論』, 大月書店, 1969年9月
- 『労働運動と統一戦線』, 労働旬報社, 1969年12月
- 大原社会問題研究所編『金属産業労働組合の組織活動』(原薫との共著), 労働旬報社, 1970年2月
- 『岩波講座・世界歴史』第25巻, 『コミンテルンの成立』, 岩波書店, 1970年8月
- 『労働組合運動の理論——労働組合の戦術』第6巻, 『ストライキ闘争とマルクス=レーニン主義』, 大月書店, 1970年5月
- 『戦後労働組合の歴史』(塩田庄兵衛, 田沼肇との共著), 新日本出版社, 1970年6月
- 塩田庄兵衛編『労働問題講義』, 『労働問題の成立と展開』, 青林書院新社, 1971年9月
- 『労働組合入門』, 労働旬報社, 1974年4月
- 『統一戦線史序説 1914-1923 インタナショナルにおける統一と分裂の論理』, 大月書店, 1976年5月
- 『現代労働組合組織論』, 労働旬報社, 1979年6月

- 4月 法政大学大原社会問題研究所に入所（兼任研究員），『日本労働年鑑』の編集，執筆にたずさわる。
- 1966(昭和41)年3月 法政大学大原社会問題研究所専任研究員となる
- 1968(昭和43)年4月 法政大学社会学部兼任講師となり，ゼミ担当。1969(昭和44)年～1970(昭和45)年労働組合論担当。
- 1971(昭和46)年2月 アムステルダム社会史国際研究所に留学（同年5月帰国）
- 4月 法政大学社会学部教授となり，社会問題総論担当。以後社会労働運動史など担当。
- 1974(昭和49)年12月 第1回全法政教職員硬式テニス大会優勝
- 1976(昭和51)年3月 法政大学大学院社会科学研究所社会学専攻委員会主任
- 4月 法政大学社会学部長を務める（～1978(昭和53)年3月）
- 1980(昭和55)年4月 法政大学在外研究員として，イギリス・ロンドン大学に留学，法政大学ロンドン分室長を務める（～1981(昭和56)年3月）
- 1981(昭和56)年4月 日本女子大学文学部社会福祉学科兼任講師となり，社会運動史担当。
- 現職 法政大学社会学部教授
法政大学大原社会問題研究所研究員
日本女子大学兼任講師
- 1986(昭和61)年1月11日東京都品川区旗の台の昭和大学病院で，午前0時48分，肺癌のため死去
享年66歳

中 林 賢 二 郎 年 譜

- 1919(大正8)年1月17日 横浜市で父中林賢吾(日本放送協会常務理事)、母千代の二男として生まれる
- 1931(昭和6)年4月 愛知県第一中学校入学
- 1936(昭和11)年3月 愛知県第一中学校卒業
- 4月 第八高等学校入学
- 8月 第7回全日本ジュニア・テニス大会でダブルス優勝
- 1939(昭和14)年3月 第八高等学校卒業
- 4月 東京帝国大学文学部西洋史学科入学
- 1944(昭和19)年9月 東京帝国大学文学部西洋史学科卒業
- 10月 財団法人東亜研究所入所
- 1946(昭和21)年3月 財団法人東亜研究所解散にともない退所
- 4月 国民経済研究協会嘱託となる
- 10月 財団法人政治経済研究所に入所、国民経済研究協会嘱託を辞任
- 1948(昭和23)年12月 松本倭子と結婚
- 1951(昭和26)年11月 財団法人政治経済研究所退所、世界労働運動研究協議会事務局に入る
- 1953(昭和28)年12月 長男賢一生まれる
- 1956(昭和31)年5月 世界労働運動研究協議会事務局を辞任し、中国、ソ連、オランダ、西ドイツなどに外遊(同年12月帰国)
- 1957(昭和32)年7月 社会主義経済研究所に入所
- 1959(昭和34)年10月 中央労働学園講師を兼任、「労働運動と統一戦線」の課目を担当、10月から「国際労働運動史」を担当(1976年まで17年間連続担当)
- 1960(昭和35)年4月 東京都立大学法経学部講師となり、労働問題の講義を担当
- 1961(昭和36)年 労働者教育協会理事となる
- 1962(昭和37)年4月 中央労働学園理事となり、常務理事に就任(～1964(昭和39)年3月)以後1980年まで理事
- 1965(昭和40)年3月 社会主義政治経済研究所退所

追憶 中林賢二郎

一九八七年二月一日 発行

編集 追悼文集刊行委員会

代表 田沼 肇

発行 中林倭子

〒187 東京都小平市上水新町一三四〇一七

製作 金株式会社 労働旬報社

〒112 東京都文京区目白台二ノ一四ノ二三



